

店舗新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

きたおほらいせき (だい2じちょうさ)
木太小原遺跡 (第2次調査)

木太小原遺跡
(第2次調査)

二〇二四年三月

株式会社コスモス薬品・高松市教育委員会

2024年 3 月

株式会社コスモス薬品
高松市教育委員会

例 言

- 1 本書は、木太小原遺跡（第2次調査）の発掘調査報告書である。
- 2 調査地、調査期間及び調査面積は、次のとおりである。
調査地 高松市木太町字小原 733 ほか
調査期間 令和4年11月2日～12月2日
調査面積 約936㎡
- 3 本調査を実施するに当たり、高松市、高松市教育委員会、株式会社コスモス薬品は「木太町店舗新築工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」に関する協定書を締結した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、高松市教育委員会が実施した。調査及び整理に係る費用は、全額を株式会社コスモス薬品が負担した。
- 5 現地調査及び整理作業は、高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員 高上 拓、同課会計年度任用職員 磯崎 福子が担当した。
- 6 本報告書の執筆は高上が行い、磯崎が補佐した。
- 7 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会にて保管している。

凡 例

- 1 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は国土座標第IV系（世界測地系）、方位は座標北を表す。
- 2 遺構・遺物の縮尺については図面ごとに示している。
- 3 土層及び土器観察表の色調表現は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。
- 4 整理作業の遺物写真撮影は西大寺フォトに委託した。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査と整理の経過	1
第2章 地理的・歴史的環境	2
第3章 調査の成果	3
第1節 試掘調査の概要	3
第2節 調査の方法	3
第3節 調査の成果と報告の方針	5
第4節 弥生時代の遺構・遺物	9
第5節 飛鳥時代の遺構・遺物	17
第6節 中世・近世の遺構・遺物	27
第7節 時期決定が困難な遺構	31
第8節 その他	55
第4章 自然科学分析	56
第1節 木太小原遺跡出土木製品の樹種同定	56
第2節 木太小原遺跡出土木製品の放射性炭素年代測定	58
第5章 まとめ	60
第1節 遺構の変遷	60
第2節 周辺の調査成果との照合	60

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	1	第29図	埋土の種類ごと遺構分布図(西半)	32
第2図	古高松湾(香川県歴史博物館)	1	第30図	埋土の種類ごと遺構分布図(東半)	33
第3図	木太町周辺のハザードマップと発掘調査地点	2	第31図	SP46・47・49・51・52・53・118・54平・断面図	34
第4図	試掘調査出土遺物	3	第32図	SP149・150・151・152・153・188・189・191平・断面図	35
第5図	調査区配置図	4	第33図	SP156・157・158・161・162・163平・断面図	36
第6図	試掘トレンチと調査区的位置関係	5	第34図	SP230～232、SP251～253平・断面図	41
第7図	遺構名称(西半)	6	第35図	SP05・06、10・11、26・33、30・31、67・68、121・122平・断面図	42
第8図	遺構名称(東半)	7	第36図	SP125・129、124・130、138・139、196・197、201・205、262・263、277・278平・断面図	43
第9図	遺構配置図	8	第37図	時期不明遺構集合①(溝)	44
第10図	旧河道 平・断面図、遺物実測図	9	第38図	時期不明遺構集合②(溝・土坑)	45
第11図	SX15平・断面図	10	第39図	時期不明遺構集合③(土坑)	46
第12図	SX15遺物実測図①	11	第40図	時期不明遺構集合④(ピット)	47
第13図	SX15遺物実測図②	12	第41図	時期不明遺構集合⑤(ピット)	48
第14図	SD12平・断面図、遺物実測図	13	第42図	時期不明遺構集合⑥(ピット)	49
第15図	SD261平・断面図	14	第43図	時期不明遺構集合⑦(ピット)	50
第16図	SD12平・断面図、遺物実測図	15	第44図	時期不明遺構集合⑧(ピット)	51
第17図	SB288平・断面図、遺物実測図	17	第45図	時期不明遺構集合⑨(ピット)	52
第18図	SB289平・断面図、遺物実測図	18	第46図	時期不明遺構集合⑩(ピット)	53
第19図	SD254平・断面図、遺物実測図	19	第47図	時期不明遺構集合⑪(ピット)	54
第20図	SD132平・断面図、遺物実測図	20	第48図	9トレンチ平・断面図	55
第21図	SD256・110・133平・断面図	22	第49図	遺構外出土遺物	55
第22図	SD160・08平・断面図、遺物実測図	23	第50図	暦年較正結果	59
第23図	SD280・63・64平・断面図、遺物実測図	24	第51図	周辺の調査成果合成図	61
第24図	SX245・246平・断面図、遺物実測図	25	第52図	SD01・02断面図(高松市教委2022)より転載	62
第25図	SK281・235、SP16・249平・断面図、遺物実測図	26			
第26図	SD166-55・171-56平・断面図、遺物実測図	28			
第27図	SK02・SP194・SX134平・断面図、遺物実測図	29			
第28図	SK19・21・23平・断面図、遺物実測図	30			

挿 表 目 次

表1	遺構一覧表①	34	表5	木太小原遺跡出土木製品の樹種同定結果	56
表2	遺構一覧表②	35	表6	測定試料および処理	58
表3	遺構一覧表③	36	表7	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	59
表4	遺構一覧表④	37			

写真図版目次

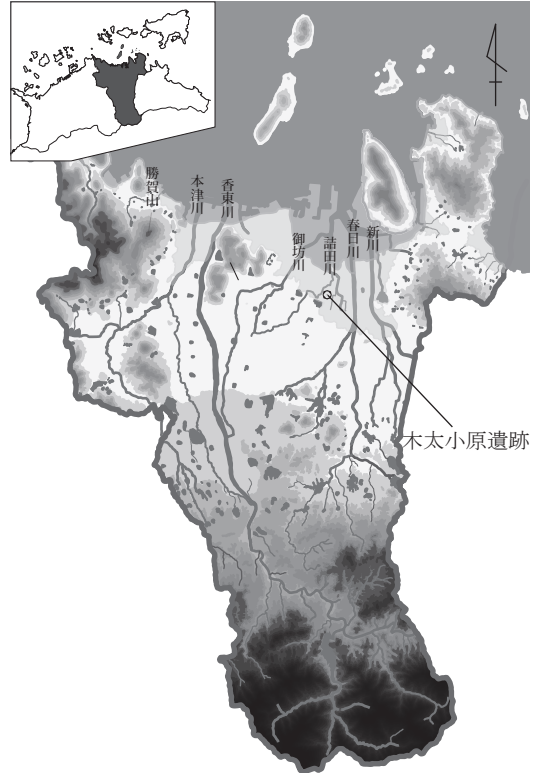
- 図版 1-1 調査前風景(北東から)
-2 調査前風景(南東から)
- 図版 2-1 1 tr 西半(東から)
-2 1 tr 東半(西から)
- 図版 3-1 SD12 完掘状況(南から)
-2 SD12 断面(南から)
- 図版 4-1 1 tr 西半断割り断面(南西から)
-2 旧河道最下層石鏝出土(南から)
-3 石鏝出土状況(南から)
-4 SP46～SP54(北から)
- 図版 5-1 2 tr 南半(北から)
-2 2 tr 北半(南から)
- 図版 6-1 3 tr 北半(南から)
-2 3 tr 南半(北から)
- 図版 7-1 4 tr 南半(北から)
-2 SD132 完掘状況(南東から)
-3 SD110・133 切りあい状況(北から)
-4 SD133 完掘状況(南から)
- 図版 8-1 5 tr 南半(北から)
-2 5 tr 北半(南から)
- 図版 9-1 SX15 完掘状況(北から)
-2 旧河道断面(南東から)
-3 SX15 完掘状況(南から)
- 図版 10-1 6 tr 南半(北から)
-2 6 tr 北半(南から)
- 図版 11-1 6 tr 北部(東から)
-2 5・7 tr 境界(東から)
- 図版 12-1 7・8 tr 西半(東から)
-2 7・8 tr 東半(西から)
- 図版 13-1 SD254-1・2 完掘状況(北から)
-2 SD254-1・2 遺物出土状況(南から)
-3 SD254-1・2 遺物出土状況(東から)
-4 SD254-1・2 遺物出土状況(南から)
-5 SD254-2 遺物出土状況(西から)
-6 SD254-1・2 遺物出土状況(南から)
-7 SD254-1・2 完掘状況(東から)
- 図版 14-1 SD261 完掘状況(南から)
- 図版 15-1 SD256(北から)
-2 陶製土管出土状況(南から)
- 図版 16-1 9 tr 東壁断面(西から)
-2 9 tr 完掘状況(南西から)
- 図版 17 SX15 出土遺物
SD254 出土遺物
- 図版 18 SD160 出土遺物
試掘 2-3tr 溝 出土遺物
- 図版 19 SD12 出土遺物
SK21 出土遺物
- 図版 20 SD132 出土遺物
SP229 出土遺物
出土石器

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

本調査地は株式会社コスモス薬品（以下、事業者）による店舗新築工事の予定地で、周知の埋蔵文化財包蔵地「木太小原遺跡」に近接していた。このため、事業者より試掘調査の依頼が提出され、高松市教育委員会（以下、市教委）が試掘調査を実施した。

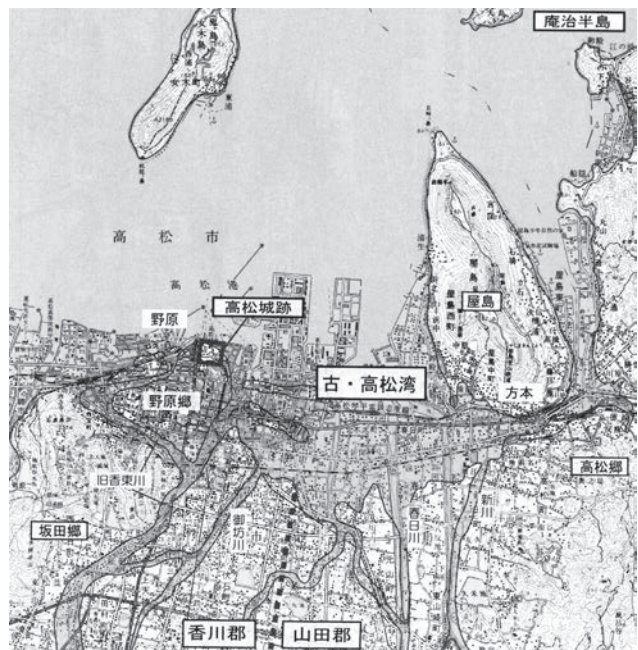
結果、弥生時代～近世までの幅広い時期の埋蔵文化財が多数確認されたため、当該範囲は周知の埋蔵文化財包蔵地「木太小原遺跡」として登録された。事業着工に先立ち、事業者より令和4年9月14日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘届出が提出されると、県教委より工事着手前に発掘調査を行う旨の行政指導が通知された。これを受け、事業者と高松市は協議の上、「木太町店舗新築工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」に関する協定書を締結し、令和4年11月2日より発掘調査を開始した。



第1図 調査地位位置図

第2節 調査と整理の経過

調査にあたっては、建物基礎の形状に併せて調査区を設定した。発掘調査は令和4年11月2日から同年12月2日の期間で実施した。整理作業は令和5年度に開始し、令和6年3月31日に本書の刊行を以て完了した。



第2図 古高松湾（香川県歴史博物館）

第2章 地理的・歴史的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に位置する高松平野は、西を五色台・勝賀山、南を阿讃山脈、東を立石山塊により画され北方に開けた平野であり、その規模は東西約 20km、南北約 16km である。高松平野は香東川をはじめ本津川・春日川・新川等の河川活動により形成された河成堆積平野である。平坦と思われる平野であるが、主要な河川の本流から派生した複数の自然流路や旧河道、それらの埋没が進んだ低地帯、自然堤防をはじめとする微高地等の存在により比較的起伏に富んだ地形を呈していたことが、微地形分析や発掘調査の成果から判明している。

木太小原遺跡が所在する木太町周辺は、高松平野の東部に位置する。木太町周辺はかつて古高松湾と呼ばれる湾がかなり内陸に入り込んでいた事が指摘されており、概ね現在の長尾街道周辺を境界として北側は海浜部であったことが推定される（第2図）。この推定海岸線から当調査地までの距離は直線距離で約 1.4km 程であり、現在の地理感覚に比べるとより海浜部に近い立地であった事が分かる。

周辺の標高は 5.0 m 前後である。調査地周辺をさらに詳細にみると、西側には大池から北流し詰田川と合流する宮前川が存在する。現在の川道は治水工事によって固定化されたものであるが、西側が相対的に低く、旧河道等が存在することが推定される。実際に今回の調査地でも西側に存在した旧川道が埋没して平地化したことが確認出来ている。

なお、木太小原遺跡周辺の発掘調査成果から見た歴史的環境は、『木太小原遺跡』（高松市教委 2022）に整理しており基本的に重複するため本書では省略する。

（参考文献）

高松市教育委員会 2022『木太小原遺跡』高松市埋蔵文化財発掘調査報告書第 229 集



第3図 木太町周辺のハザードマップと発掘調査地点

第3章 調査の成果

第1節 試掘調査の概要

事業に先立ち、対象地の埋蔵文化財の有無について試掘調査を実施した。試掘は諸般の事情から2回に分けて実施した。1回目は令和4年4月、2回目は令和4年9月である。最初に実施した試掘調査の調査区名は頭に1-と付け、2回目に実施した調査区名には頭に2-を付けて呼称する。また、試掘調査の成果概要は(高松市教委 2023)に報告したため、本節では発掘調査区との重複関係と出土遺物について報告する(第4・6図)。

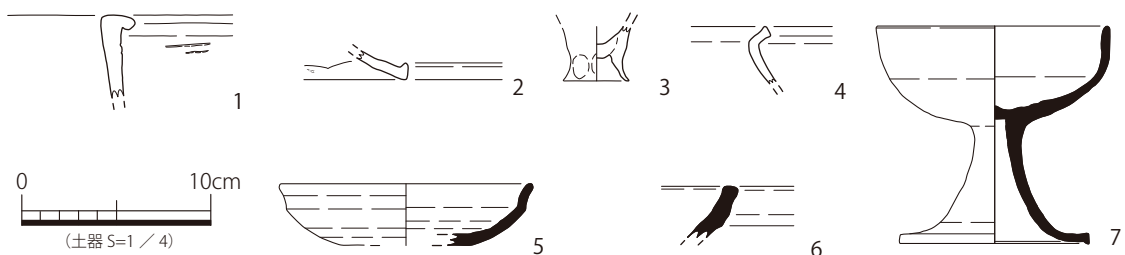
1～7は試掘調査時に出土した遺物。1・2・3は試掘1-1トレンチで同一の溝出土。位置関係から本調査のSD254と同一の遺構と考えられる。4・5は試掘1-3トレンチのピット出土。位置関係と一番大きいピット出土という試掘調査時の所見メモより、SP205に相当する可能性が高い。6・7は試掘2-3トレンチ溝出土。やや位置が離れており、溝の方角も若干異なるが、SD254の北側延長に相当すると考えられる。1は弥生土器甕。L形に折れる口縁部で体部上半に沈線。榦描かへう描かは器壁の風化で判断が難しい。弥生時代前期末を中心とした時期が想定できる。2は弥生土器高坏脚部。3は製塩土器脚部。4は弥生土器甕口縁部。2～4の存在で弥生時代後期後半の資料がまとまって存在することを予測した。また、5は須恵器高坏の坏部。6は須恵器甕口縁部。7は須恵器高坏。ほぼ完形で出土した。こうした資料からは、弥生時代と古墳時代後期～飛鳥時代の資料が存在することを想定した。検出した遺構は柱穴と溝が中心であり、遺構密度は密であることが想定された。

(参考文献)

高松市教育委員会 2023『令和4年度高松市内遺跡発掘調査概報』高松市埋蔵文化財発掘調査報告書第243集

第2節 調査の方法

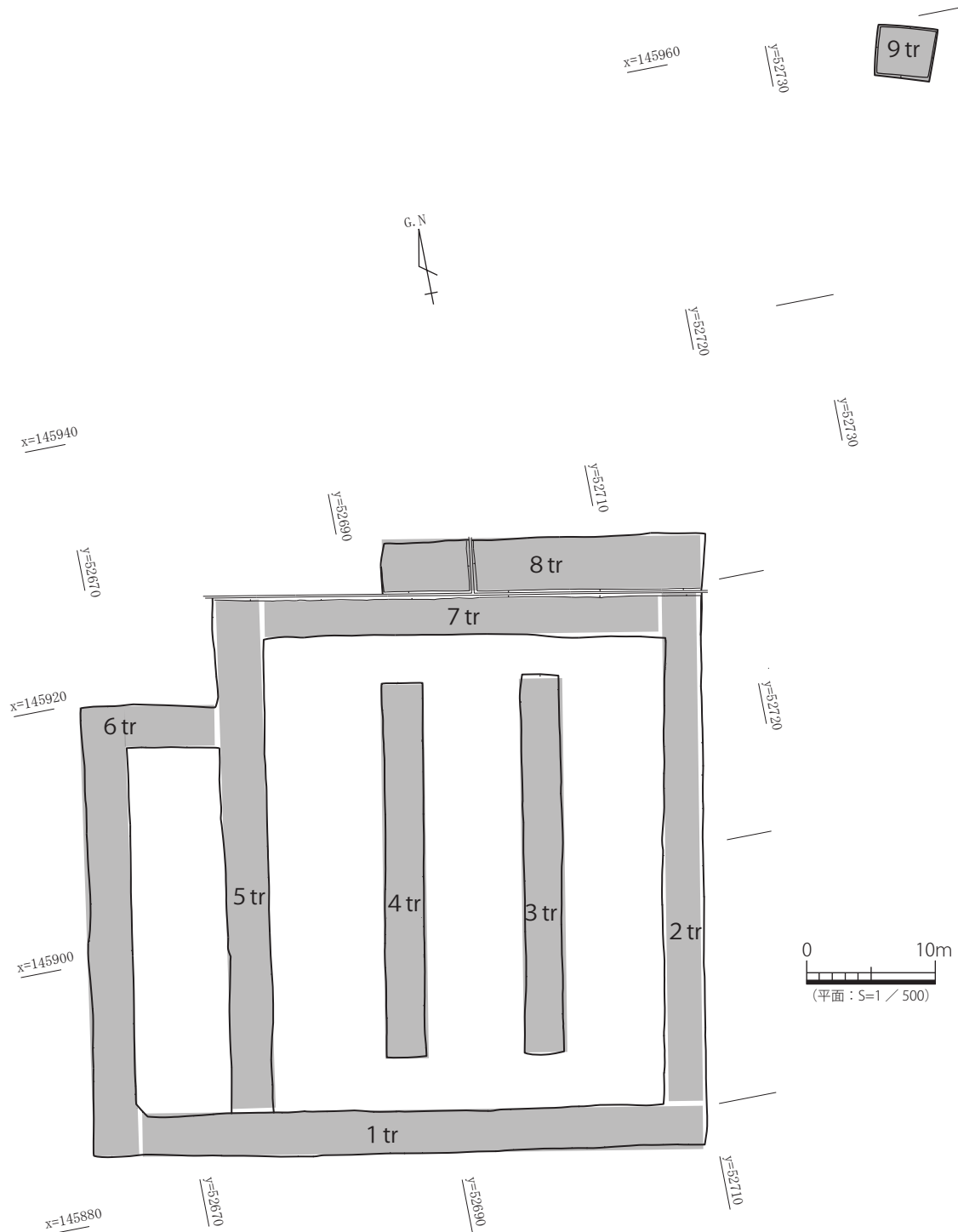
本事業で発掘調査の対象となったのは店舗の基礎部分に相当する範囲(1～8tr)及び看板設置地点(9tr)である(第5図)。特に店舗基礎部分については、柱及び地中梁の設置予定箇所において保護層が確保出来ず、発掘調査を行うこととなった。調査区の設定に際しては、作業効率も考慮して掘削最大幅に合わせた直線的な調査区を組み合わせる事で必要な記録保存を図ることとした。調査時にはそれぞれ連結する部分はあるものの、直線で区切られる範囲を調査区と呼称して記録作成を行った。調査区の名称と範囲は第5図のとおり。遺構にはその性格・規模にかかわらず連番で遺構番号を振り、整理作業の段階で遺構番号の頭にSX、SPといった遺構の性格を考慮した記号を付与した。なお、報告書作成に当たって調査時の遺構番号は振りなおしておらず、一部には欠番も存在するが調査時の記録との整合を重視して変更しないこととした。



第4図 試掘調査出土遺物

遺構の平面図は手測りにより行い、調査地に近在する基準点を用いて国土座標第IV系（世界測地系）にはめ込む方法を取った。基準点の座標は、D9-3（X = 145875.737、Y = 52692.365）、D9（X = 145943.030、Y = 52663.853）である。標高はKL4（H = 5.268）を基準とした。なお、基準点の数値は事業者より提供されたもので、等級等は不明である。

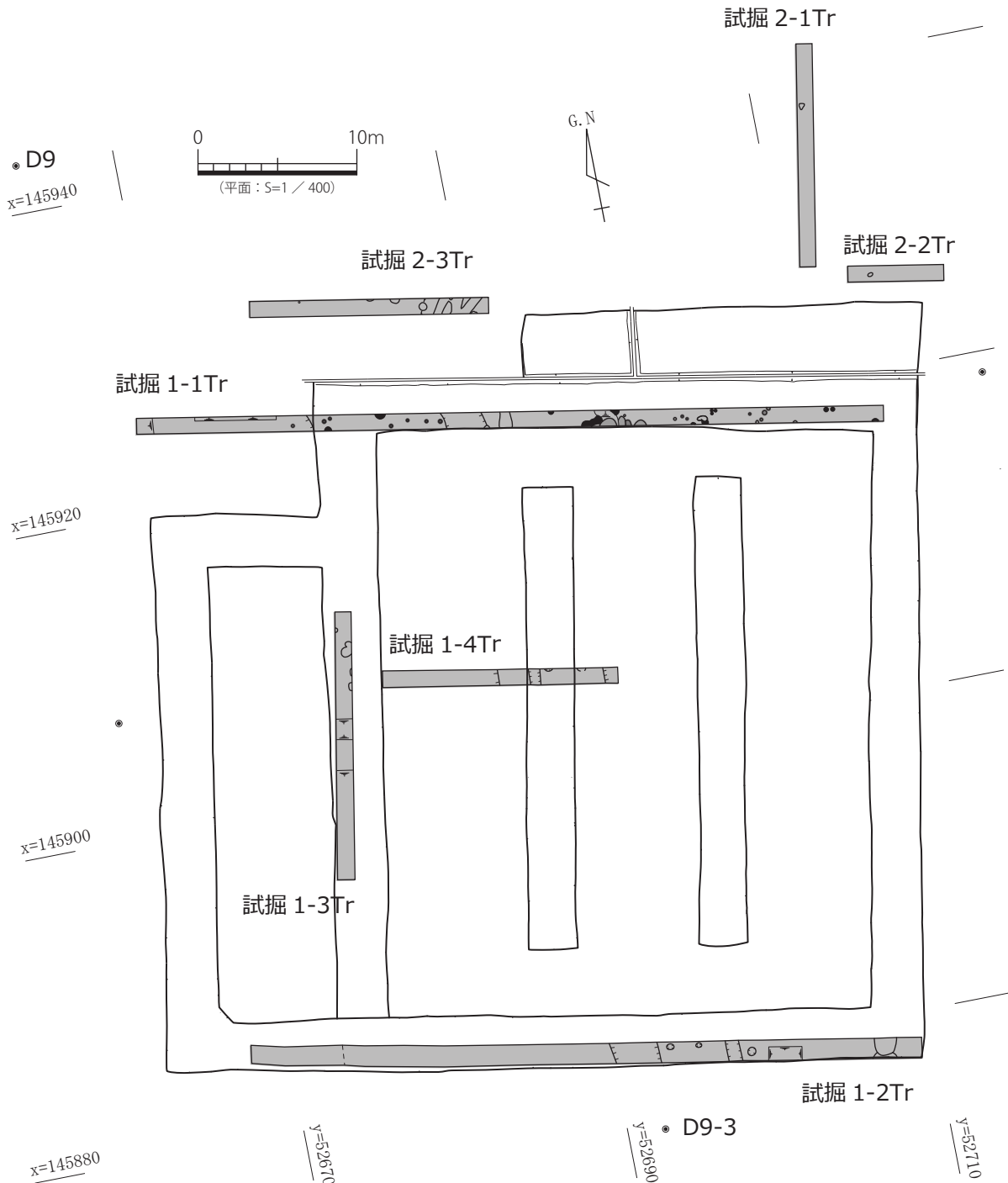
写真撮影に際しては、デジタルカメラでの記録とし、コンパクトカメラとデジタル1眼カメラを用い、主要な写真は紙に印刷したうえで保管するハイブリッド保存の手法を採用した。



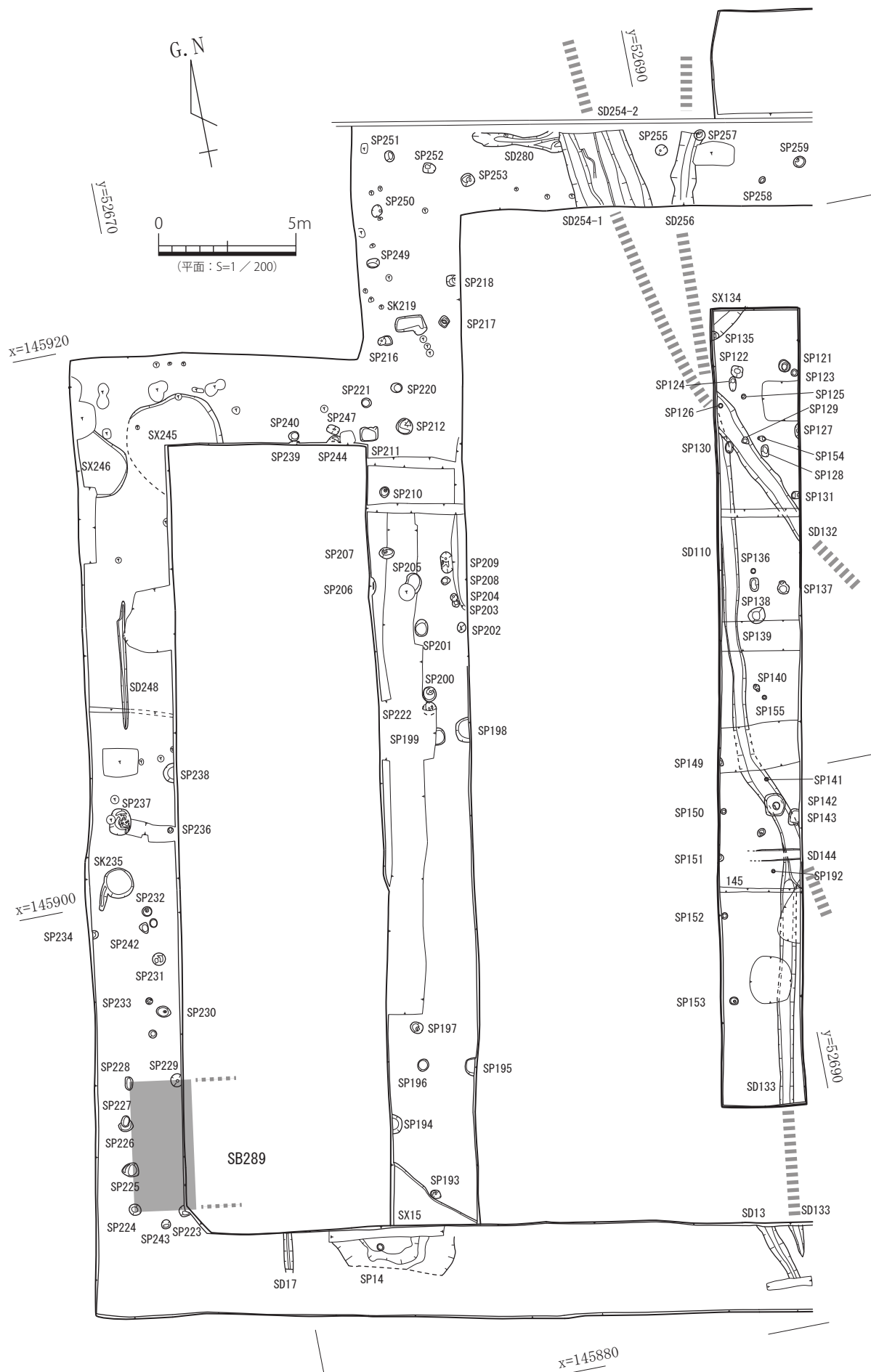
第5図 調査区配置図

第3節 調査の成果と報告の方針

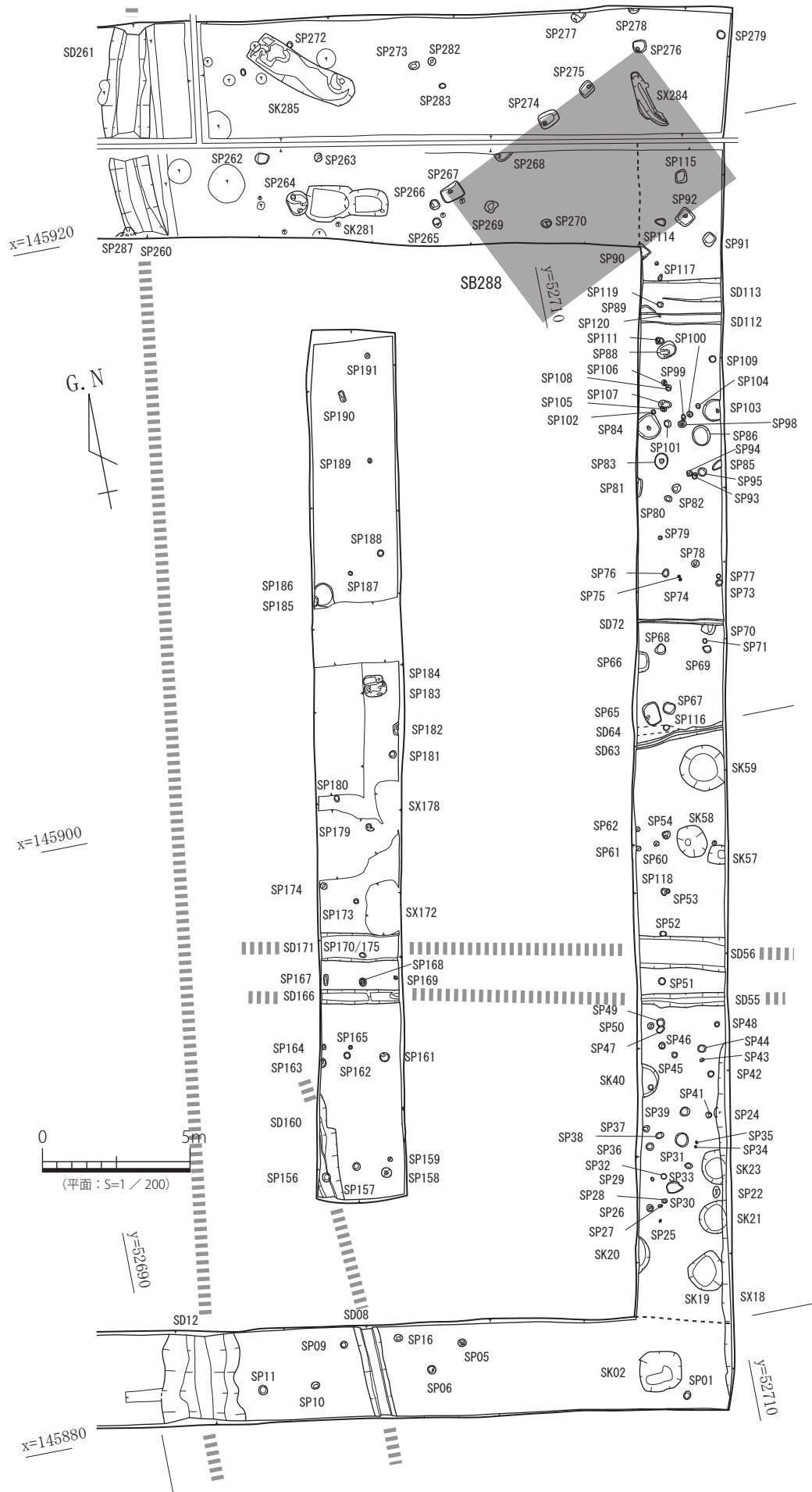
発掘調査は主に店舗の基礎を対象に実施したため、必然的にトレンチ状の細長い調査区に分かれる事となった。一方で、検出した遺構の大半は建物跡や柵列等の存在を示唆するピット群であったが、上記の調査区の配置状況であるため、建物跡の全体像を把握できるほどの面的な調査とはなっていない。また、埋土に多様性が認められることと、一部に切りあいも確認できることから、複数時期にまたがる遺構を同一遺構面上で検出したことになる。すなわち、長期間に渡って建物が建て替えられ続けた結果の蓄積として現況を呈しているが、限られた検出範囲ではどの範囲のピット群が同一建物の柱跡群として認識できるのか判別がつかないものが多い。ま



第6図 試掘トレンチと調査区の位置関係



第7図 遺構名称 (西半)

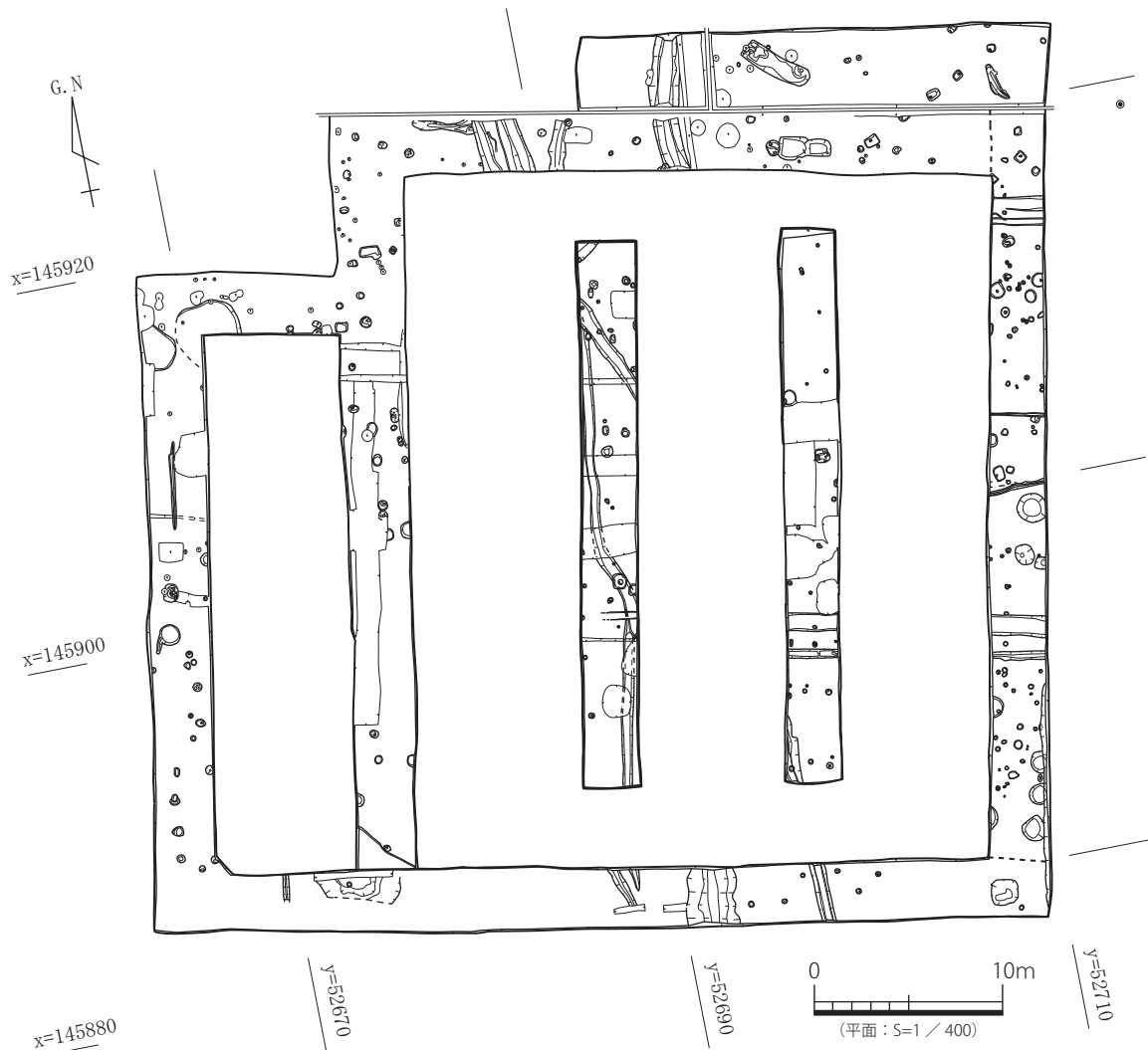


第8図 遺構名称 (東半)

た、遺物が出土した遺構も僅少であり、帰属時期についても明らかにしがたい遺構が大半である。こうした遺構については、それぞれ遺構単独の報告を行い、将来的に未調査範囲で発掘調査が実施された際に解明すべき課題であることを明記して引き継ぐほかない。本書では、遺構密度がやや疎な範囲で一定の間隔を持って並び、埋土の土質等に共通性が高いと認められたことによって、同一建物跡を構成する一連のピット群として認定したもののみ、SBの頭号を付す。現場でつけた遺構番号の連番が287までであったため、288以降の番号を付した。

ピットをはじめとする時期不明遺構の報告方法について、最大公約数的に埋土の共通性によってグルーピングし、遺構の形成時期不明資料として一覧表で整理することとした。

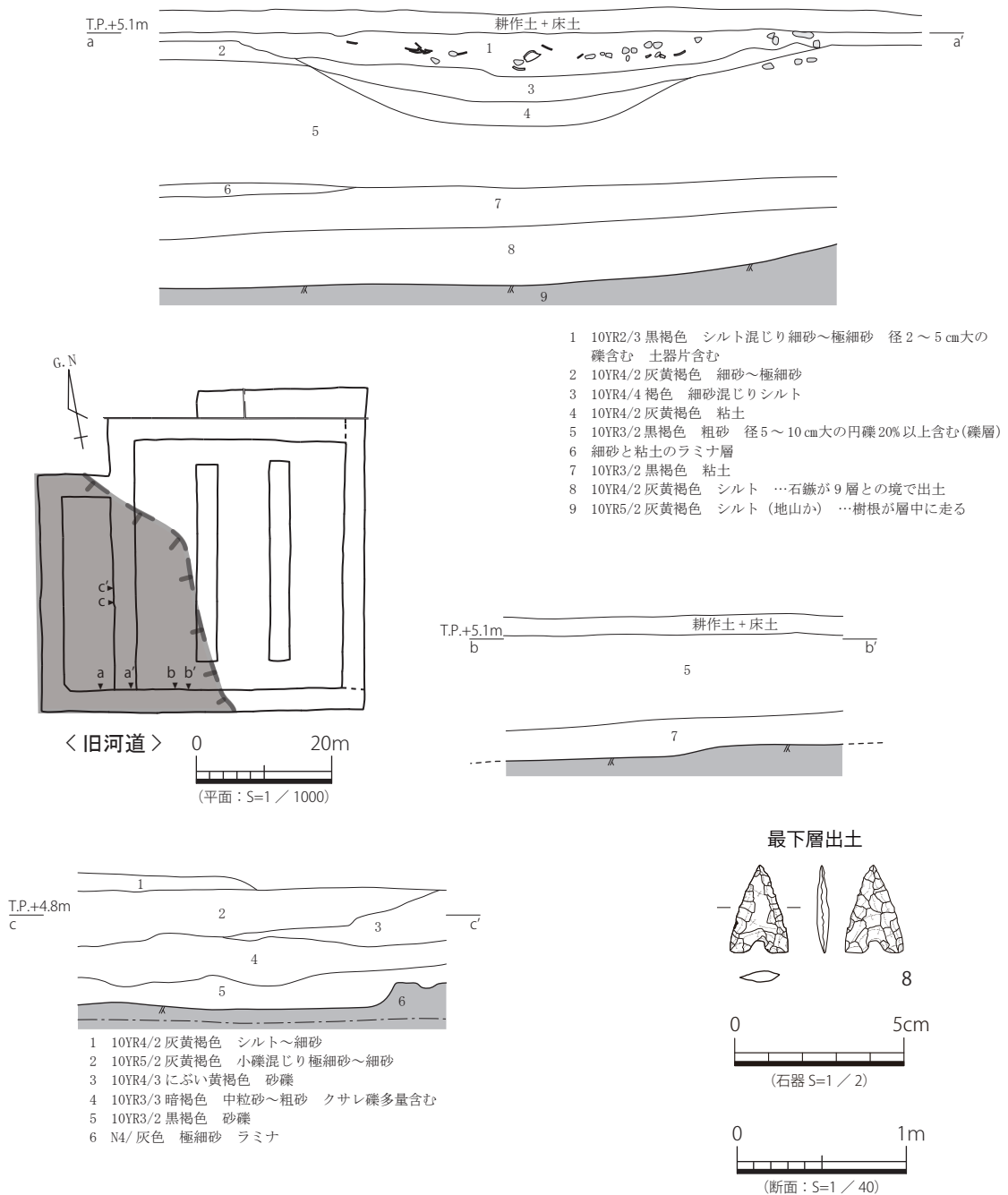
近世以降の遺構について、調査開始時には遺構埋土の傾向が掴めておらず、番号を付して逐一調査していたが、調査が進む中で特徴的な灰白色シルト～極細砂基調の埋土の遺構は近世以降の遺物のみを含むことが判明した。当初想定を遥かに超えた遺構検出数に期間内に対応するため、高松城下町以外の範囲においては近世以降の遺構・遺物は埋蔵文化財の対象外としている高松市の方針に基づき、近世以降の遺構については中途より攪乱扱いとし、断面図を作成せず完掘した。なお、調査担当者の所見として近世以降は大型の土坑が多く、粘土採掘の可能性が推測されること、ピットも多く、建物の存在が推定されることを補追しておく。



第9図 遺構配置図

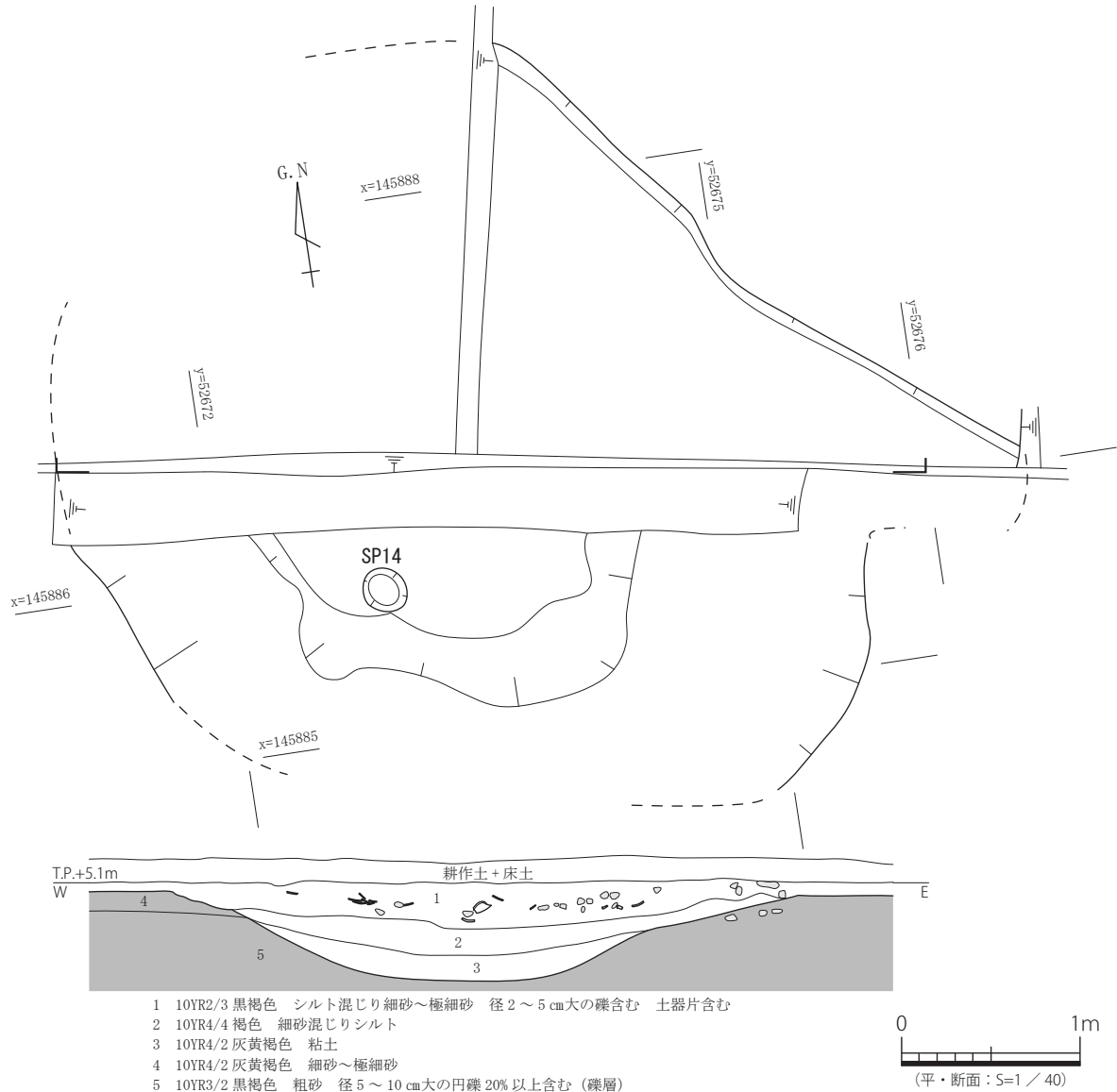
第4節 弥生時代の遺構・遺物

旧河道 自然地形と判断したため遺構番号は付与していない。調査区の南西側で広く確認できた旧河道。調査区のさらに西側にひろがる。数か所で柱状に断面図を作成したが、現地表面下約1.6mの灰黄褐色シルトを基盤層として、その上に厚い堆積層が確認できる。堆積する土質はシルト層～粘土層が互層状に堆積しており、部分的にラミナ状の堆積を示す部分もある。なお、掘削中に湧水は顕著でなかったが、常に湿気を含む状況ではあった。こうした堆積状況からは、緩やかな河川の氾濫等が複数発生し、それが積み重なることで徐々に低地が埋没した状況がうかがえる。埋土の最下層には自然木が大量に含まれており、一部では樹根が地山中に伸びる様子がうかがえたため、ある段階では樹木の生育が可能な環境であったことがうかが



第10図 旧河道 平・断面図、遺物実測図

SX15



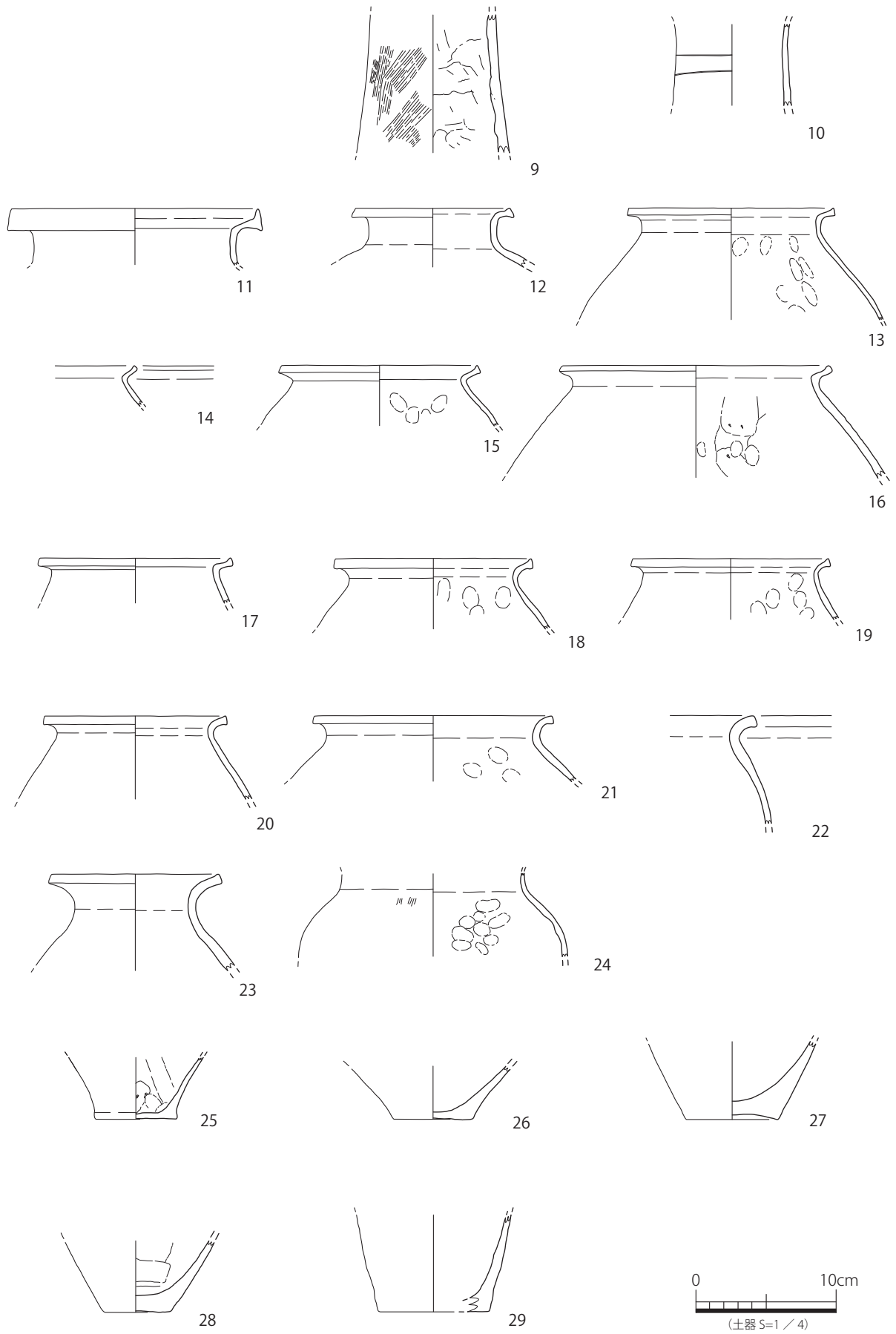
第11図 SX15平・断面図

える。一方、埋土中で確認できた遺物は極めて少なく、地山直上で石鏃(8)が1点確認できたのみである。河道埋没の上限を示す資料であるため、石鏃と同一地点で出土した木材をAMS分析で年代測定した。結果、14C年代が 2495 ± 20 14C BP、 2σ 暦年代範囲(確率95.45%)が771-721 cal BC (19.15%)、707-662 cal BC (19.11%)、652-544 cal BC (57.19%)で、紀元前8世紀前半～紀元前6世紀中頃の暦年代を示した(第4章)。縄文時代晩期後半～弥生時代前期前半に相当する。

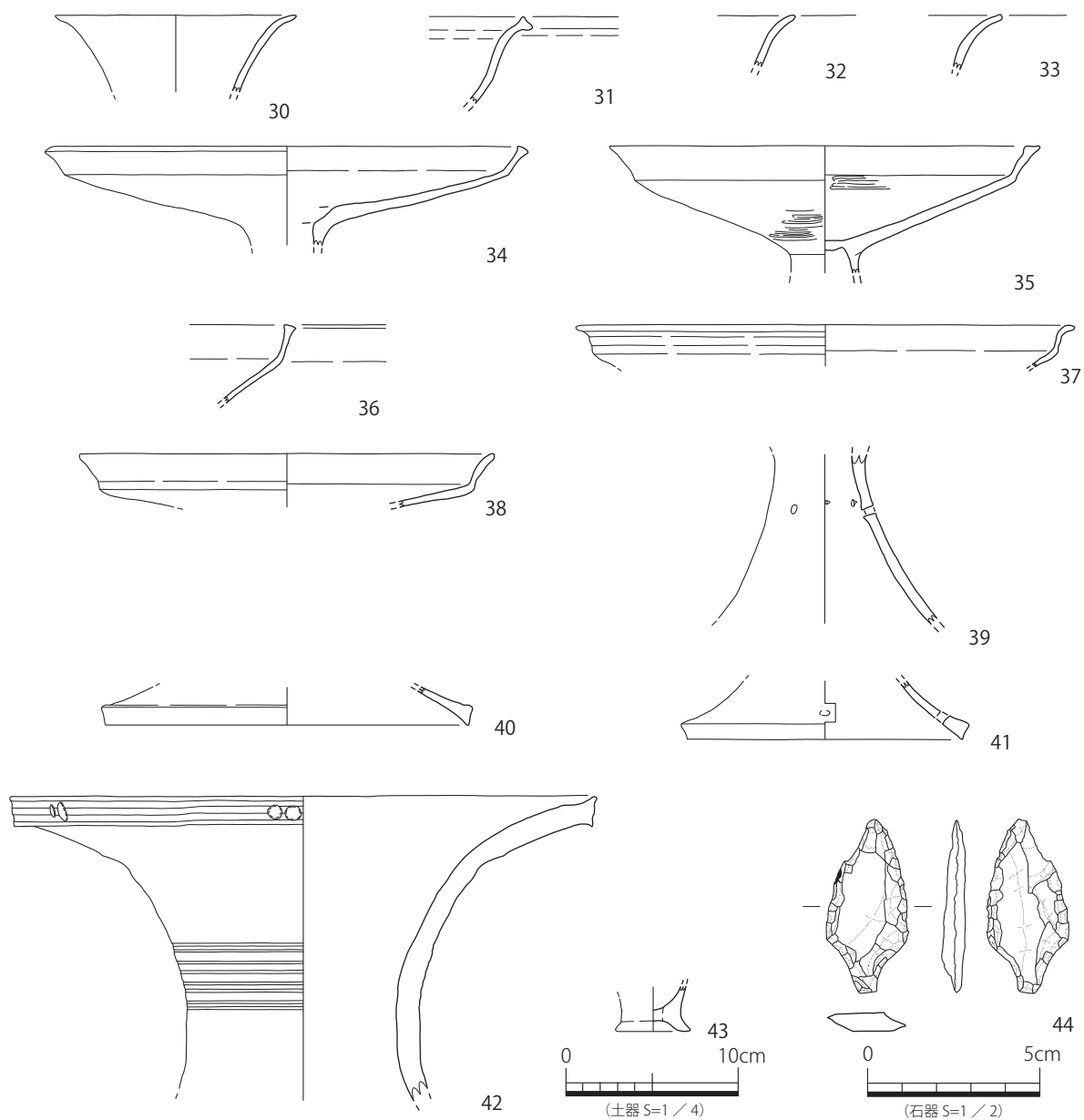
8は凹基式石鏃。三角形を呈し、小型のサヌカイト製。重量は1.2g。

なお、2層を基盤層として形成されたSX15は後述するとおり、弥生時代後期後半の年代観が想定されることから、これ以前に旧河道の埋没が完了していることがうかがえる。

SX15 1・5トレンチの境界付近で確認した。不定形な土坑状の落ち込みであり、大量の弥生土器を包含する。図中に示した平面形は検出時の重機掘削の程度が1・5トレンチによって異なっ



第12図 SX15 遺物実測図①



第13図 SX15 遺物実測図②

たこともあって、いびつな形状を呈する。

9・10は弥生土器長頸壺の頸部。10は2条の沈線。刃物上の鋭利な先端を有す工具で線刻状に施される。

11～29は弥生土器甕。大きく目視で白色から赤褐色を呈し、厚手で焼けが悪く、胎土中に石英・長石粒を多く含む一群(22・23・26～29)と、これ以外の茶褐色を呈し薄手で内面ケズリが卓越し、焼成が良好な一群とに大別することができる。後者には角閃石を比較的密に含むもの(15)も認められ、いわゆる香東川下流域産土器とされる資料に相当する。ただし、目視による観察では15以外には角閃石の混和があまり明瞭に認められないものが多い。口縁端部が上下に肥厚するもの(11)と、肥厚の程度が弱いもの(12～23)が認められる。また、頸部が明瞭に直線的に立ち上がるもの(11～13)と、「く」字状に屈曲するものがある。底部はいずれも平底。

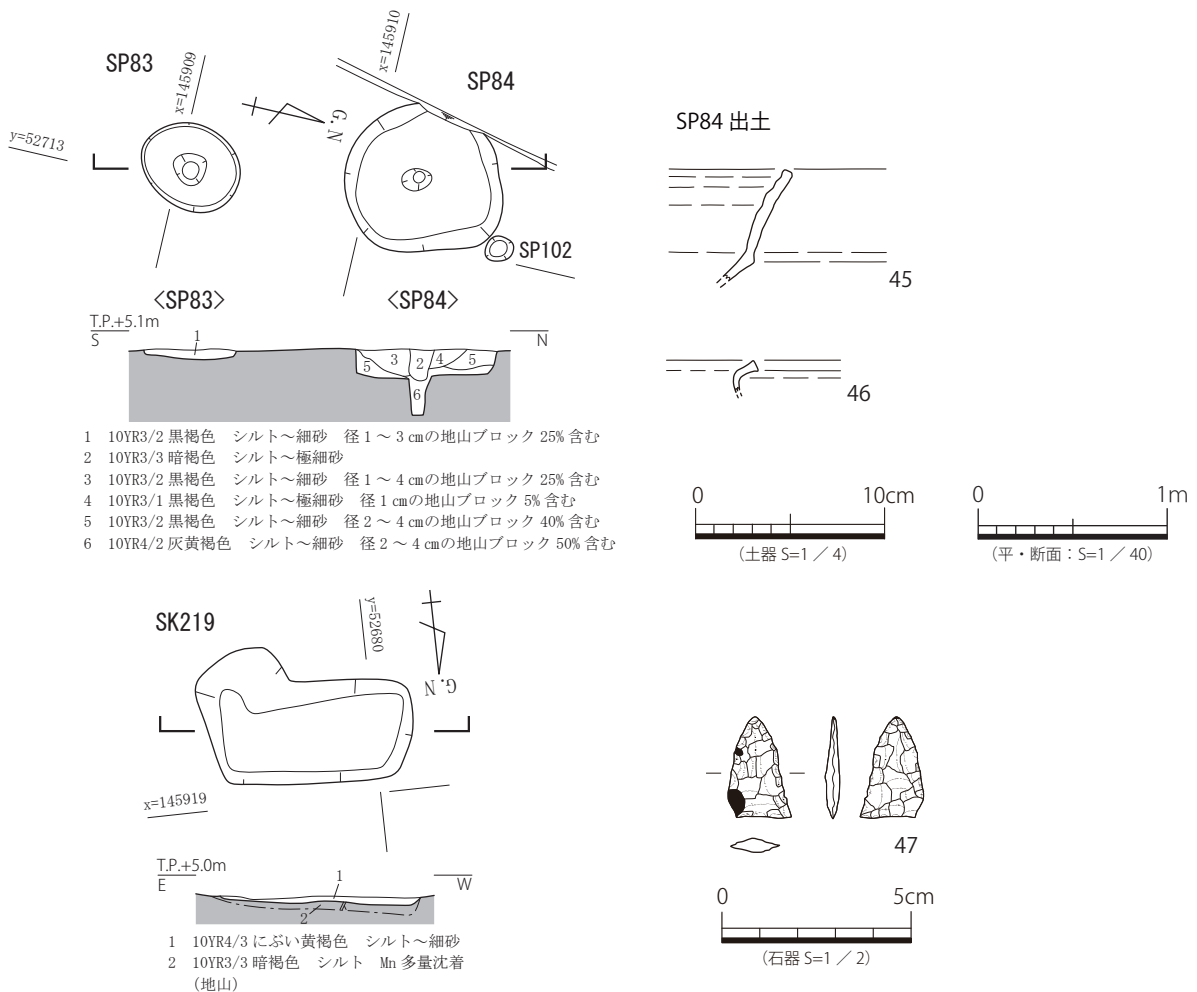
30～33は弥生土器鉢。30は形態から小型直口壺の可能性も考えられる。この器種でも甕と同様胎土の様相は大別2種に分けることができ、前者が33、後者が30～32に相当する。口縁部形態のバリエーションも大きく、直線的に外反して収めるものと、湾曲して口縁端部が肥厚するものが認められる。

34～41は弥生土器高坏。図化可能として抽出した資料の胎土は後者の胎土のものに限られる。口縁端部が若干肥厚して平坦面をもつもの(34～36)と、肥厚せず外反するもの(37・38)が認められる。脚部はスカート上に広がる形態で、脚端部も若干肥厚して平坦面をもつものが認められる。脚端部付近及び脚中央に円形の穿孔が認められる。

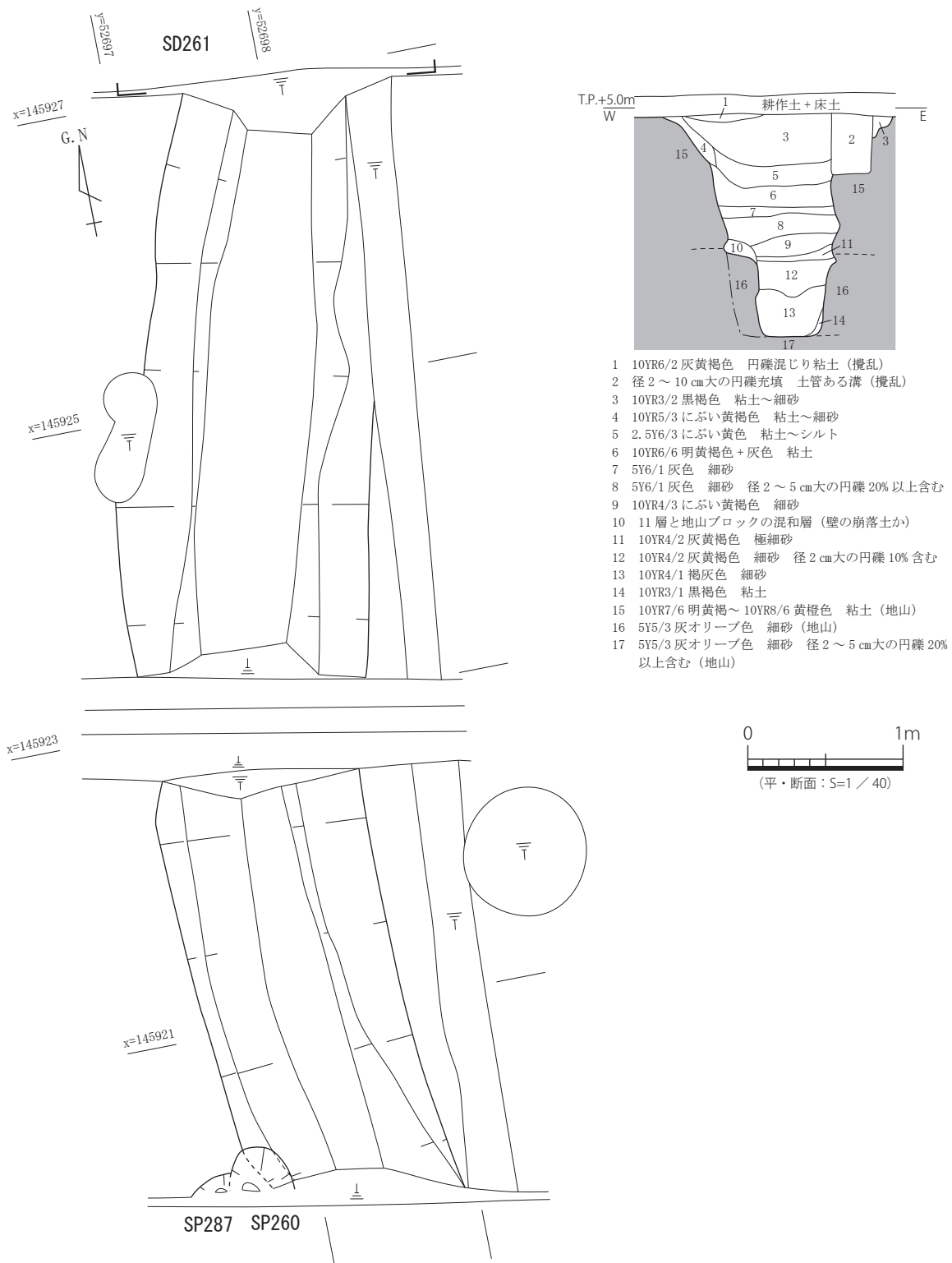
42は弥生土器器台。胎土は白～黄褐色を呈し、焼成はやや不良。胎土に白色の石英・長石をはじめ粒系の大きな砂粒を多く含む。口縁端部に2個一対の円形浮文を貼り付ける。口縁部に2条、胴部に8条の沈線が巡る。胴部に形態不明だが方形基調の透かし孔があり、配置から3孔が想定できる。43は製塩土器脚部。胎土は茶褐色を呈し手づくねで石英・長石を多く含む。44は石鏃。有茎式でサヌカイト製。やや左右の対称性を欠く。重量7.1g。

編年的な位置づけは、後期2～4(蔵本2019)の範疇で理解するのが適当であろう。

SP84 黒色系シルトを主体とした埋土のピット。弥生土器が出土したため特記して報告する。



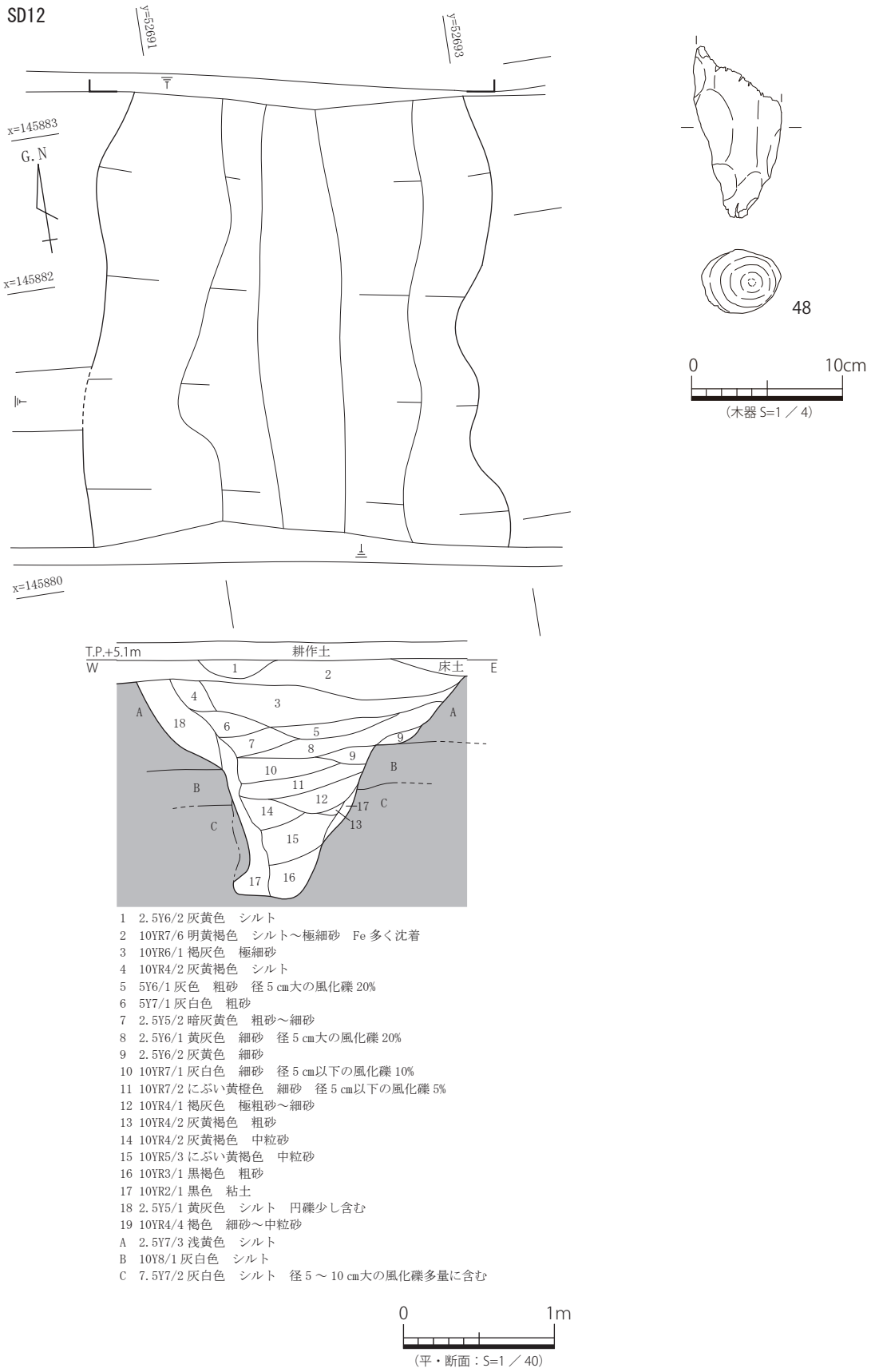
第14図 SD12 平・断面図、遺物実測図



第 15 図 SD261 平・断面図

45 は高坏。端部が角ばっているが肥厚しない。46 は甕。緩やかにくの字形に折れる頸部で端部は角ばるが肥厚しない。これらの特徴は上記した SX15 出土資料の年代と大きく変わらない。

SK219 5トレンチで検出した土坑。埋土はにぶい黄褐色シルトであり、他の弥生時代遺構と埋土の特徴が異なることから、時期は後出する可能性もあるが石鏃が出土したことから本節で報告する。47 はサヌカイト製平基式石鏃。一部欠損し、重量は 1.4 g。



第 16 図 SD12 平・断面図、遺物実測図

SD261-12 調査地の中央付近で検出した大型の溝。中間が調査対象範囲外のため、南北1箇所ずつで検出した恰好になるが、位置及び断面形状・埋土の特徴から同一の遺構と判断して報告する。上記想定が正しければ、この溝はほぼ正方位に近い方向で少なくとも調査対象地内で48m分の範囲で検出しており、南北それぞれ調査区外に延びる。幅は約2.5m、深さ約1.2m。埋土の観察からは掘り直しは確認されず、小さな単位に細砂～シルトを主体として細かく分層できる。このため、流水によって土砂が堆積し、徐々に埋没したものと考えられる。遺物は先端を加工した杭の可能性が考えられる木製品(48)とサヌカイト剥片(122・123、図化はせず巻末写真図版20に掲載)が確認されたのみで、他の遺構との切りあい関係もほとんど認められないため、時期決定の根拠に欠ける。また方位も高松平野の条里地割とは方向が異なる。本書において弥生時代の遺構の節で報告するのは、北側に隣接して実施した発掘調査成果において、当該遺構から連続する可能性のある位置で検出された遺構(SD01・02)(第51図)の年代観が弥生時代後期前葉に位置づけられていることに拠る(高松市教委2022)。詳細は第5章にて整理する。

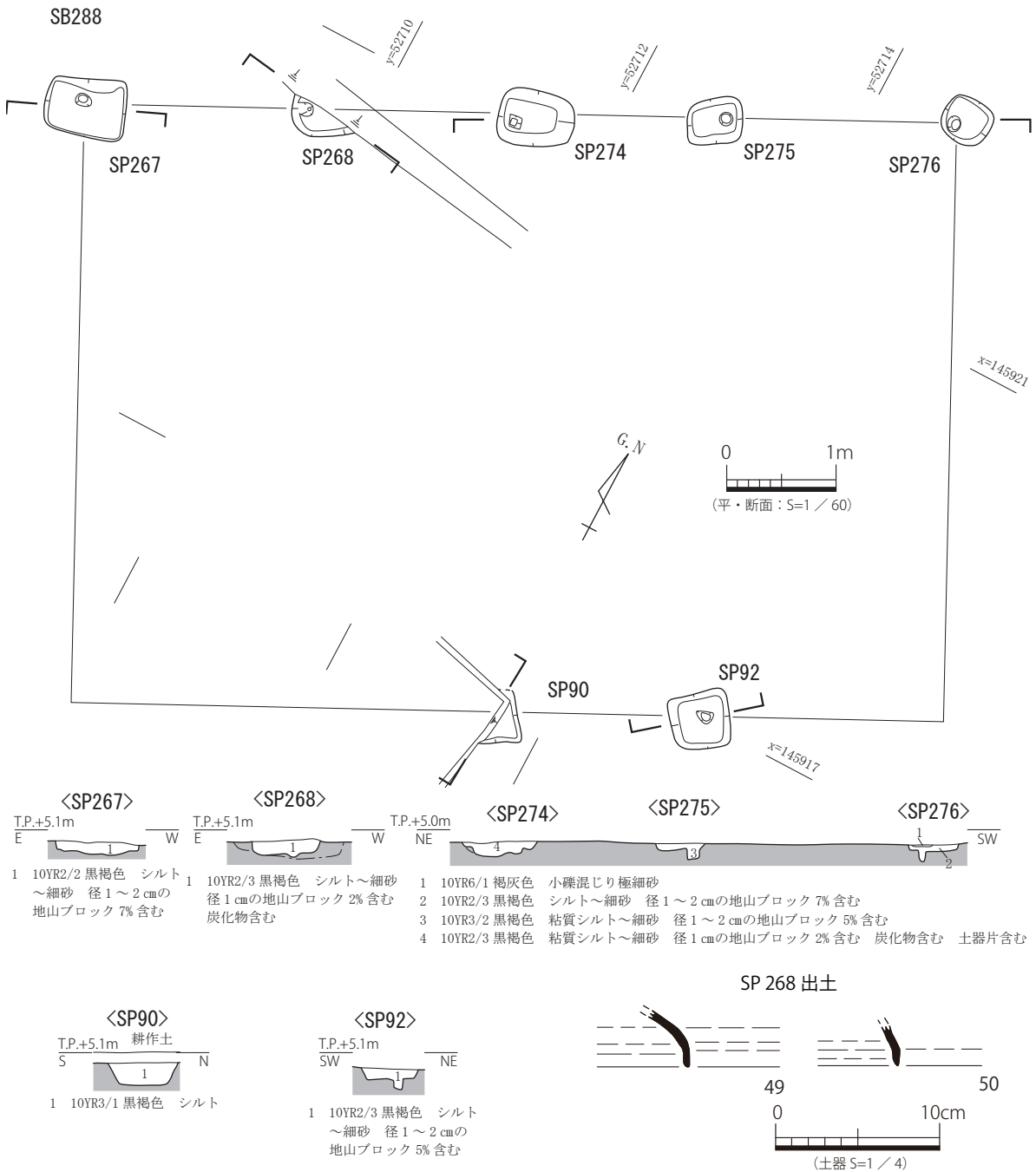
(参考文献)

大久保徹也 2003 「高松平野香東川下流域産土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』学生社
蔵本晋司 2019 「香東川下流域産土器群の基礎的研究」『上林遺跡』香川県教育委員会
高松市教育委員会 2022 『木太小原遺跡』

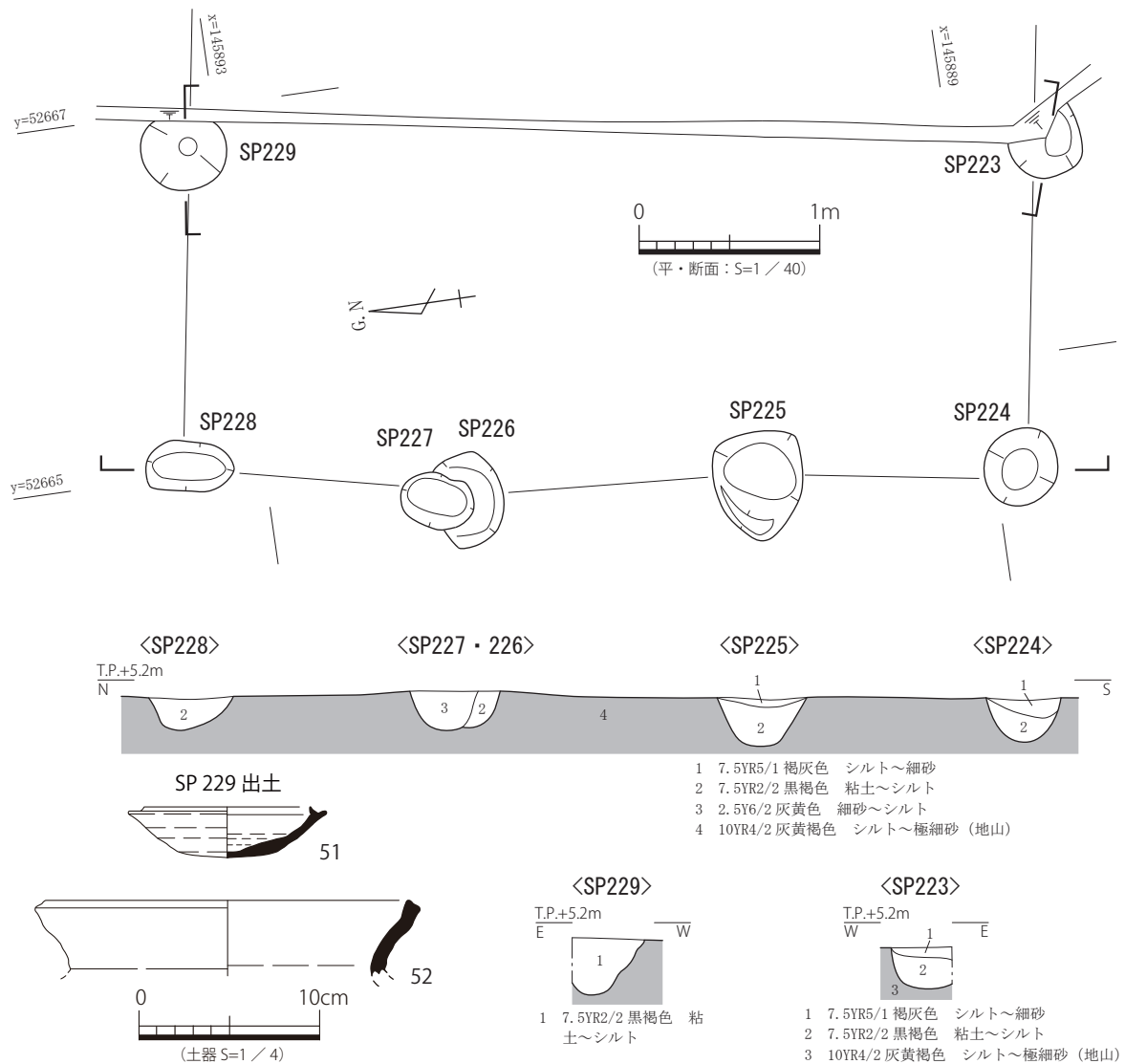
第5節 飛鳥時代の遺構・遺物

SB288 調査地の北東側、2・7・8トレンチに跨って検出した。建物を構成するピットのいくつかは調査区外に当たる。柱穴の平面形は隅丸方形が基調となる。建物の主軸はN-64° -E。条里地割や正方位には乗らない。最も長く柱間を確認した北辺では4間。柱芯間隔は概ね1.2m程度。埋土は黒褐色系のシルトが主体となる。49・50は須恵器杯蓋。坏Hに対応するものと考えられるが小片であり径不明。49は丸みを帯びた形状であるのに対し、50は直線的に立ち上がり屈曲が強い。古墳時代後期後半～飛鳥時代の年代が想定できるが、細分は困難である。

SB289 調査地の南西側、6トレンチで検出した。建物を構成するピットのうち、東側は調査区外である。柱穴の平面形は円形が基調となる。建物の主軸はN8° W。最も長く柱間を確認し



第17図 SB288 平・断面図、遺物実測図

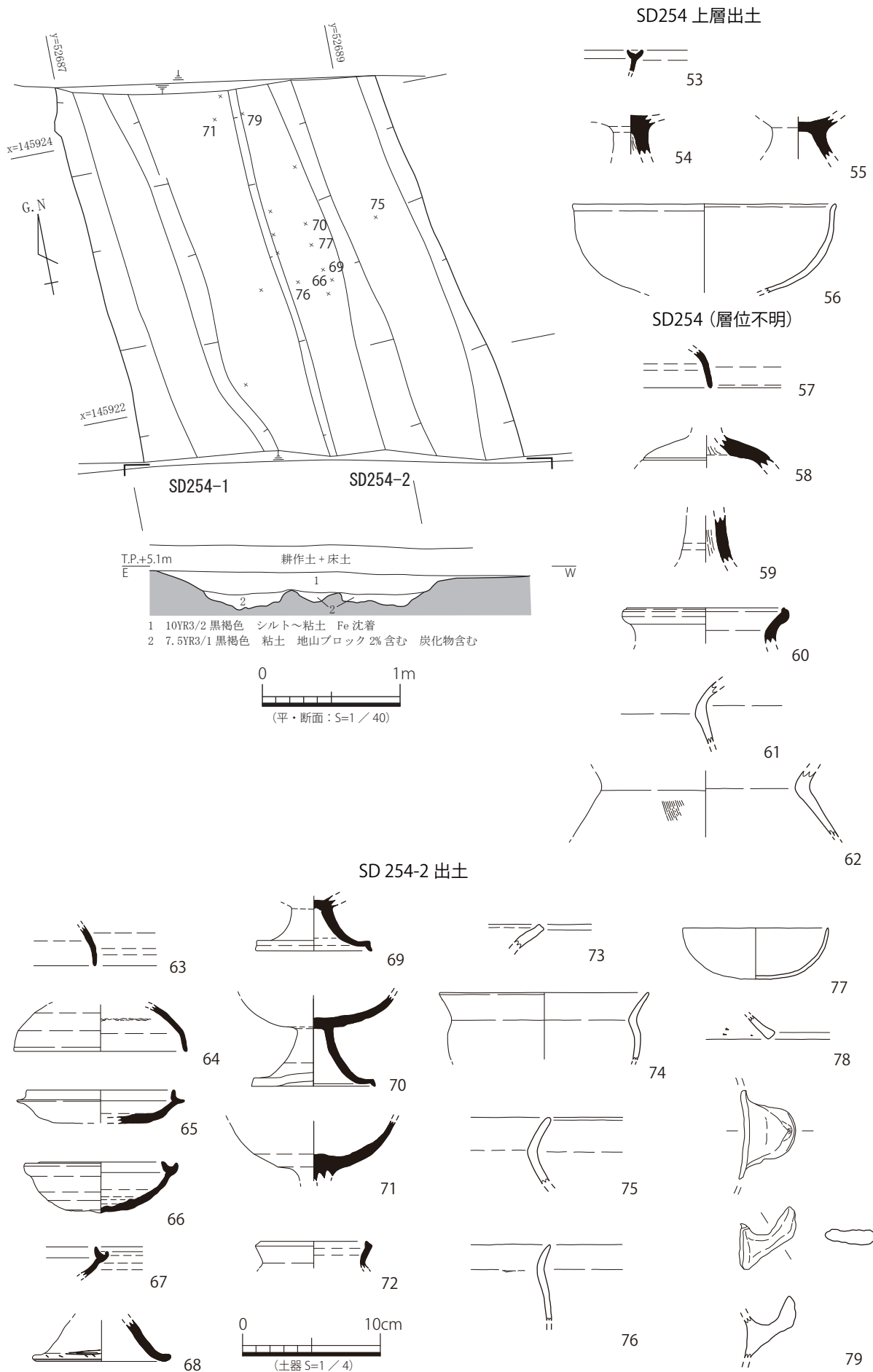


第 18 図 SB289 平・断面図、遺物実測図

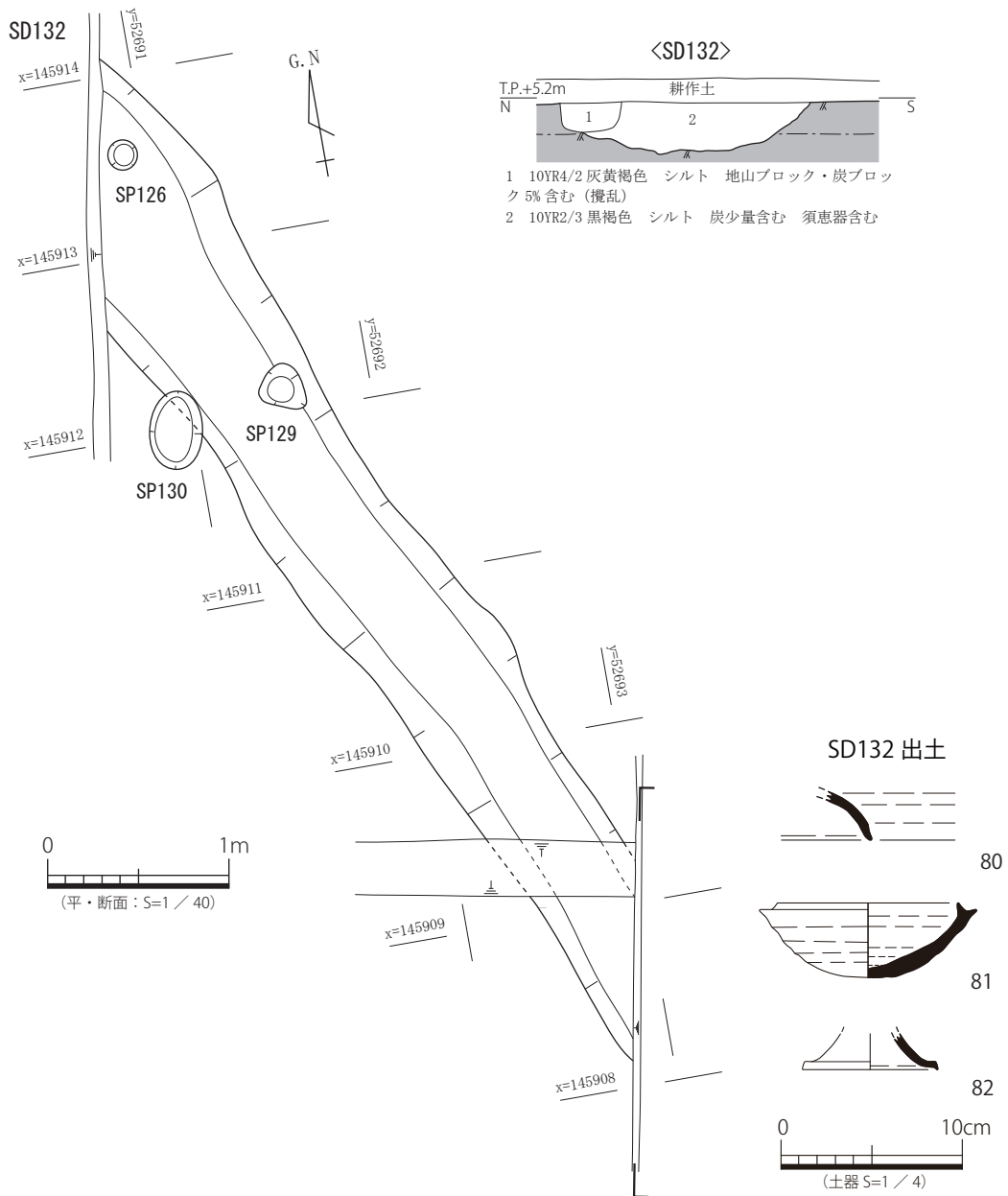
た西辺では3間。柱芯間隔は概ね 1.4 ～ 1.5m 程度。埋土は黒褐色系のシルトが主体となる。51 は須恵器坏 H。口径は約 10.0 cm。52 は須恵器甕口縁部。51 から飛鳥編年 II 期（西 1986）の時期を想定する。

SD254-132 7トレンチ～4トレンチにかけて検出した溝。位置関係と埋土の特徴から連続する溝と評価している。北西 - 南東方向に直線的に延びる。なお、位置関係から後述する SD160-SD08 とも連続する遺構の可能性も考えられる。比較的多くの遺物が出土する点も共通性は高い。一方で断面形態はやや異なっており、遺構の連続性には一定の留保が必要である。

SD254 は掘削中に底部付近で複数本が合流している可能性が想定できたため、東から順に 1～2 の枝番を振って記述する。ただし、掘り返しの痕跡はなく、同一の埋土（黒褐色系シルト）によって埋没しているため、同時期に埋没したものと考えられる。53～56 は 1 層掘削中、57～62 は 1・2 層の区別ができない資料、63～79 は 2 層中からの資料。80～82 は SD132 の範囲で出土した資料。



第19図 SD254 平・断面図、遺物実測図



第 20 図 SD132 平・断面図、遺物実測図

53 は須恵器坏 H 口縁部。小片であり径は不明。54・55 は須恵器短脚高坏脚部。前者に比べて後者が脚貼り付け部の径が大きく、法量が異なるものと考えられる。56 は土師器坏。口縁部がやや外反する。胎土は粗く砂粒を多く含み、ミガキ等は認められない。57 は須恵器蓋。坏 H に対応か。小片で径不明。58 は須恵器はそう。一条の沈線が巡る。内面にタタキ目。59 は須恵器高坏脚部。60 は須恵器甕口縁部。61・62 は土師器甕。黄白色系統の胎土に粗く砂粒を含む。63 は須恵器坏 H 蓋。やや直立気味で径不明。64 は須恵器坏 H 蓋。口径約 12.5 cm。65 は須恵器坏 H 身。扁平で器高が低い。口径約 10.8 cm。66 は須恵器坏 H 身。椀状に丸みを帯びて器高が高い。67 は須恵器坏 H 身。径不明。68 は須恵器短脚高坏脚部。スカート状に広がる器形。端部は丸く収める。69・70 は須恵器短脚高坏脚部。端部が下方方向に突出する。

71は須恵器高坏坏部。72は須恵器小型甕口縁部。端部は明瞭に角張った形態でやや内側に突出する。73は弥生土器壺口縁部か。混入であろう。74は土師器甕。「く」の字形に屈曲。白色系統の胎土にやや粗く砂粒を含む。75・76は土師器甕口縁部。77は土師器坏。白色系統の胎土。摩耗が著しく調整は不明。78は弥生土器高坏脚部。混入であろう。79は土師器甕の把手部。薄手で切れ込み等はない。80は須恵器坏H蓋。径不明。81は須恵器坏H。口径は約10.0cm。深い器形。82は須恵器短脚高坏脚部。

須恵器坏Hを手掛かりに遺構の形成時期を見ると、64がやや口径が大きく古相を示す可能性がある一方、65・66・81は小型で飛鳥Ⅱ期の範疇で理解してよいだろう。

SD256-110 7トレンチ～4トレンチにかけて検出した溝。位置関係と埋土の特徴から連続する溝と評価している。SD110がSD132に切られるため、SD254-132よりも先行する遺構である。また、後述するSD160-08と特徴的な箱型の断面形態が類似しており、連続する遺構である可能性も考えられる。ただし、遺物が全く出土しない点など相違点もあり留意が必要である。北-南方向に直線的に延びる。

SD133 4トレンチ～1トレンチにかけて検出した溝跡。南は1トレンチで終端する。南北方向に延びる。SD133がSD110に切られるため、SD256-110に先行する遺構である。遺物は出土していない。

SD160-08 3トレンチ～1トレンチにかけて検出した溝跡。北西～南東方向に延びる。上記の通り、SD254-132と連続する溝の可能性も考えられる。特徴的な箱型の断面形態を呈し、この点はSD256-110に共通性が高い。

83～88はSD160出土。83～85は須恵器坏H。径不明。86は須恵器坏底部。87は須恵器坏底部。箱型の器形を呈しており、坏Gの可能性が高い。88は土師器甕。

坏Gを含み、坏Hが残存することから、飛鳥Ⅰ～Ⅱ期の範疇で理解しておく。

SD280 7トレンチでSD254に切られる溝。北西側が調査区外に延びる可能性があるが、溝の終端を検出している可能性もある。

89は坏H蓋。口縁部が強く屈曲する。90は土師器で大型の坏か。

SD64 2トレンチ中央で検出した溝。掘削の失敗によりSD64の平面形を検出することができなかったが、SD63に切られるものと考えられる。

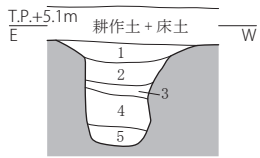
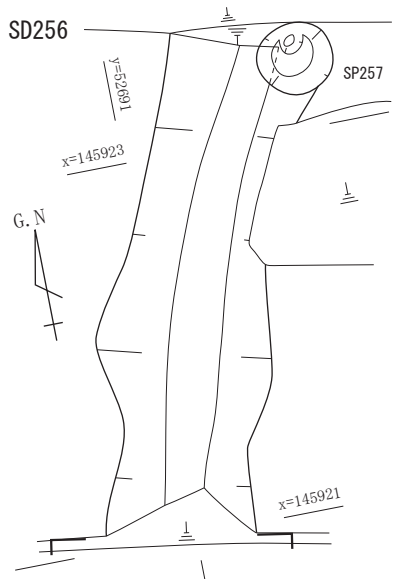
91は須恵器坏H。返し部分を欠損する。小型で径不明。

SX245 6トレンチ北西角付近で検出した不明遺構。浅い窪地に土器が比較的多く堆積した土器溜まり状の廃棄遺構か。

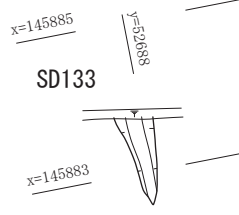
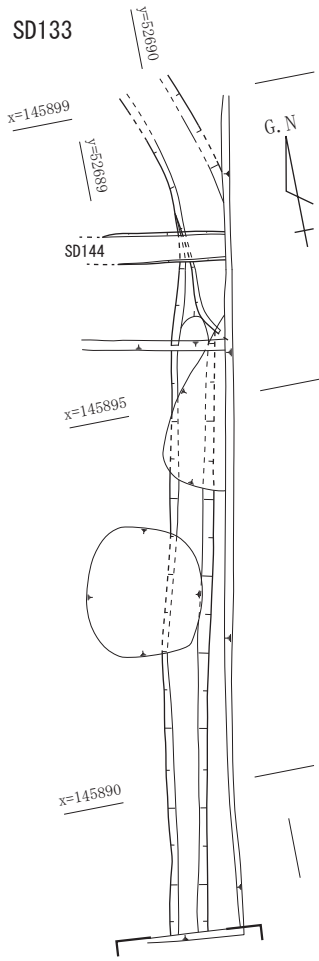
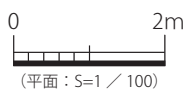
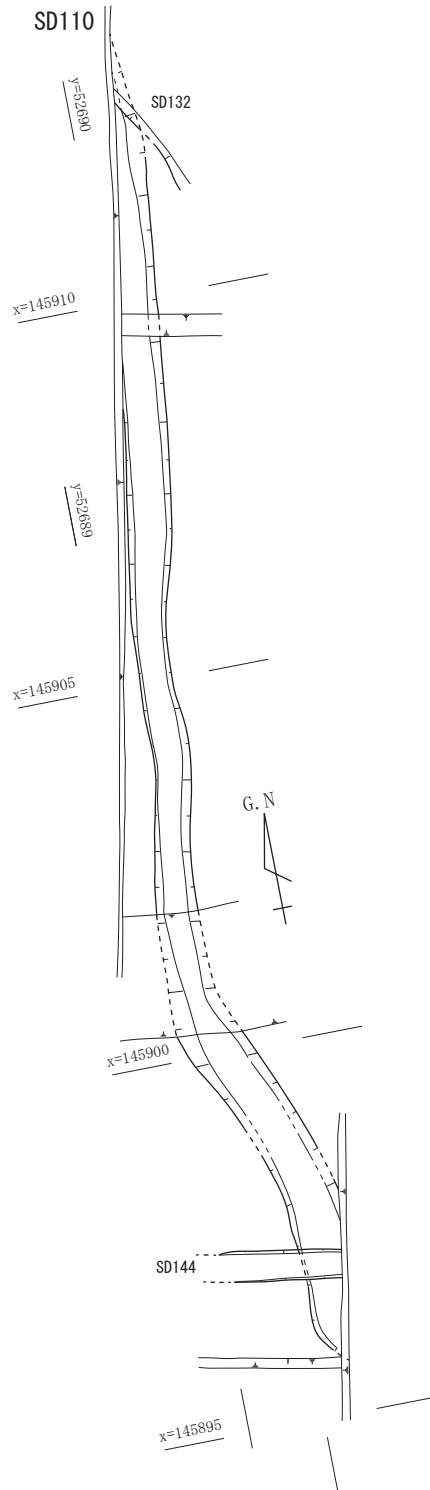
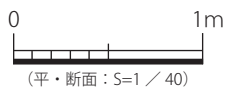
92は須恵器坏H。小型で口径8.5cm。93は須恵器坏H身。やや器高は高い。口径約10.4cm。94～96は土師器甕。胎土は灰黄色基調で粗く砂粒を含む。97は弥生土器甕口縁部。98は弥生土器底部。

弥生土器は少量で堆積時の混入と考えられる。遺構の形成時期は坏Hから飛鳥Ⅱ期を想定しておく。

SX246 6トレンチでSX245の西側で検出した不明遺構。こちらも同様に浅い窪地に土器を含むが遺物の包含量は少ない。

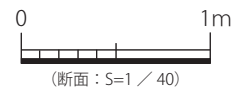


- 1 2.5Y5/1 黄灰色 粗砂混じりシルト
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
- 3 10YR3/2 黒褐色 粘土〜シルト
- 4 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂〜小礫
- 5 10YR2/2 黒褐色 細砂〜粗砂

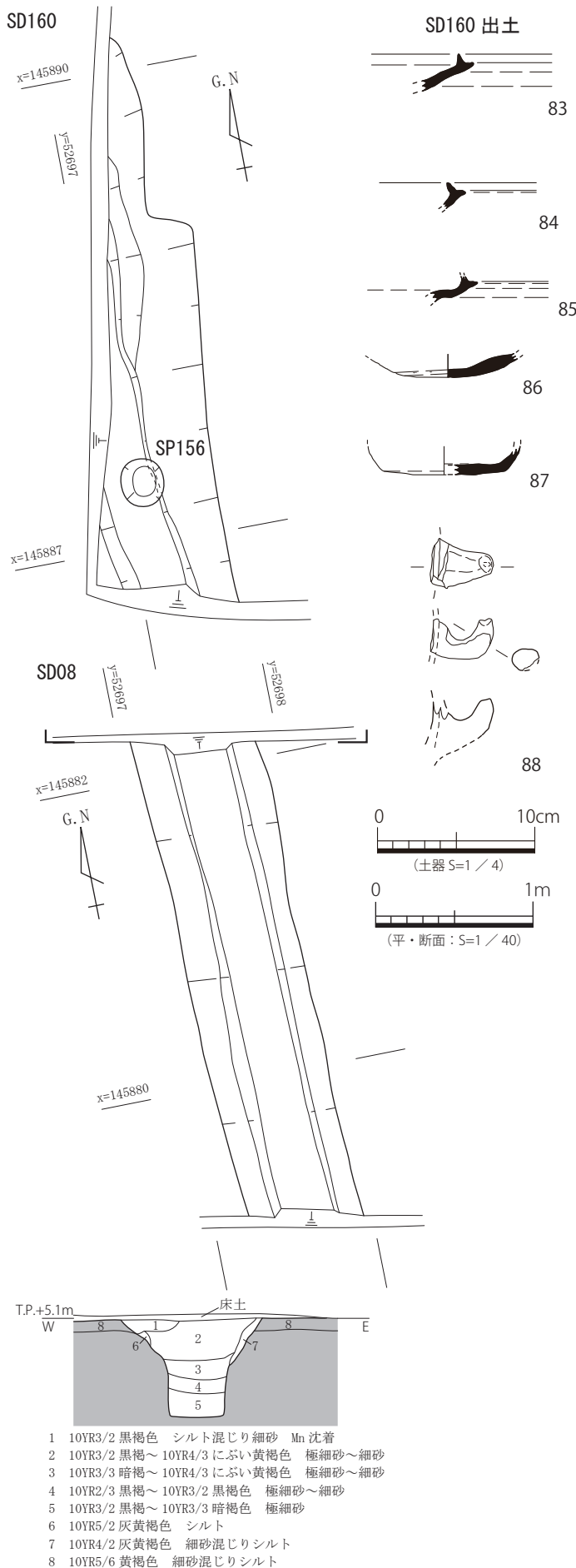


T.P.+5.6m
E

- 1 10YR6/2 灰黄褐色 シルト Fe 沈着 床土
- 2 10YR5/1 褐灰色 シルト
- 3 10YR3/1 黒褐色 粗砂
- 4 10YR4/2 灰黄褐色 シルト〜極細砂
- 5 10YR6/6 明黄褐色粘土



第 21 図 SD256・110・133 平・断面図



第 22 図 SD160・08 平・断面図、遺物実測図

99 は須恵器坏底部。扁平で箱型の器形が想定できるため、坏 G か。100 は弥生土器底部。

坏 G から飛鳥時代の遺構である。小型の底径から飛鳥 II 期か。

SK281 7トレンチで検出した土坑。当初単一の土坑と考え半裁したところ、断面観察で二基の土坑が切りあい関係にあることが判明したため、本書では西半、東半と呼び分けることとする。西半を東半が切る関係にある。101～103は東半・西半いずれに帰属するか分からない資料。104・105は西半出土。

101は須恵器坏H身。径不明。102は小型の須恵器壺肩部。103は須恵器短脚高坏脚部。スカート状に広がる器形で2状の沈線。104は須恵器坏H身。口径約10.6cm。105は須恵器坏H身。径不明。

西半は少なくとも坏Hから飛鳥II期の時期を想定しておく。東半はこれに後出するが、遺物から明確な年代差を見出すことはできない。相対的に前後関係があることだけを確認しておきたい。

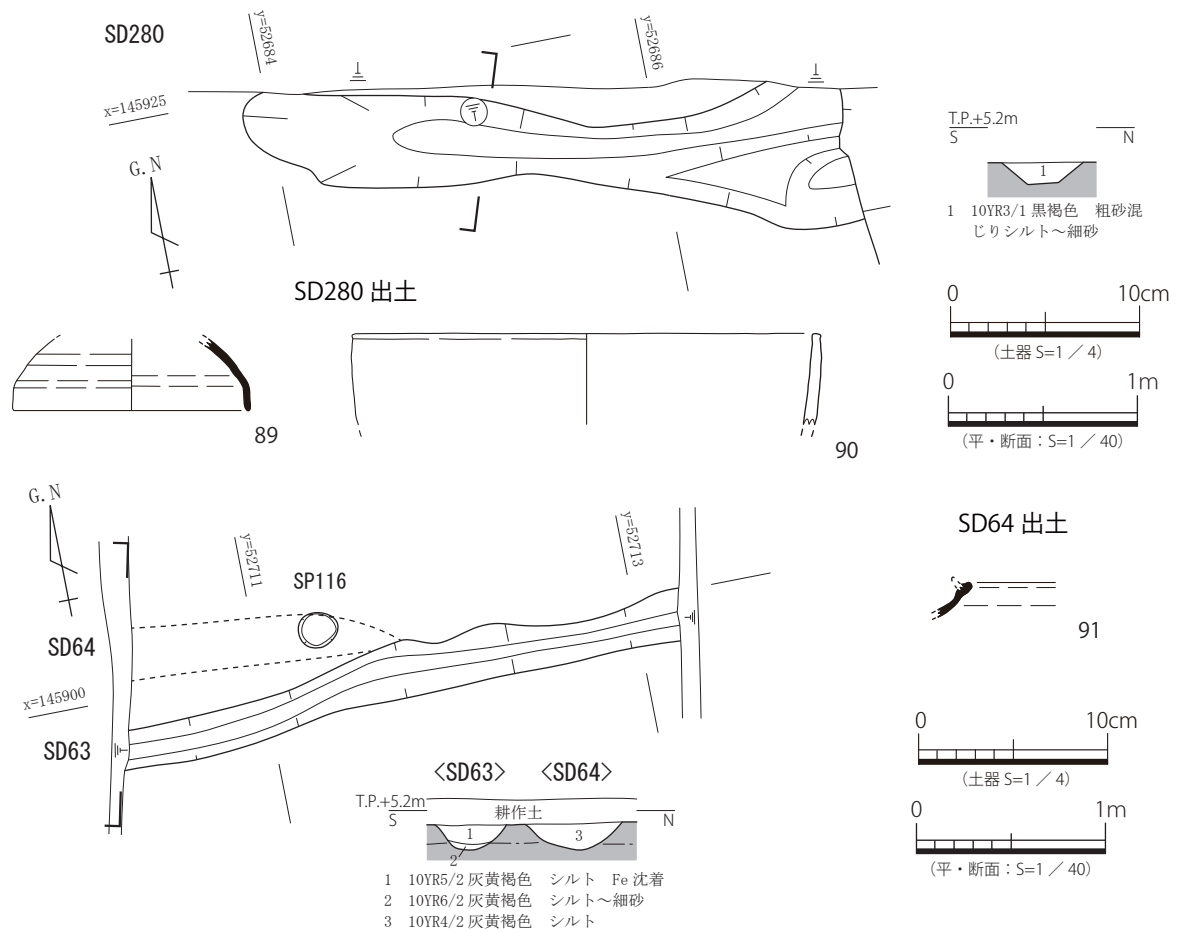
SK235 6トレンチで検出した土坑。円形の土坑に小さな溝がとりつく。106は須恵器坏H身。口径は小型で8.5cm。

飛鳥II期を想定する。

SP16 1トレンチで検出したピット。SP09・05とセットで建物が復元できる可能性があるが確定できない。107は須恵器坏H身。口縁部は強く上方に延びる。口径15.6cm。

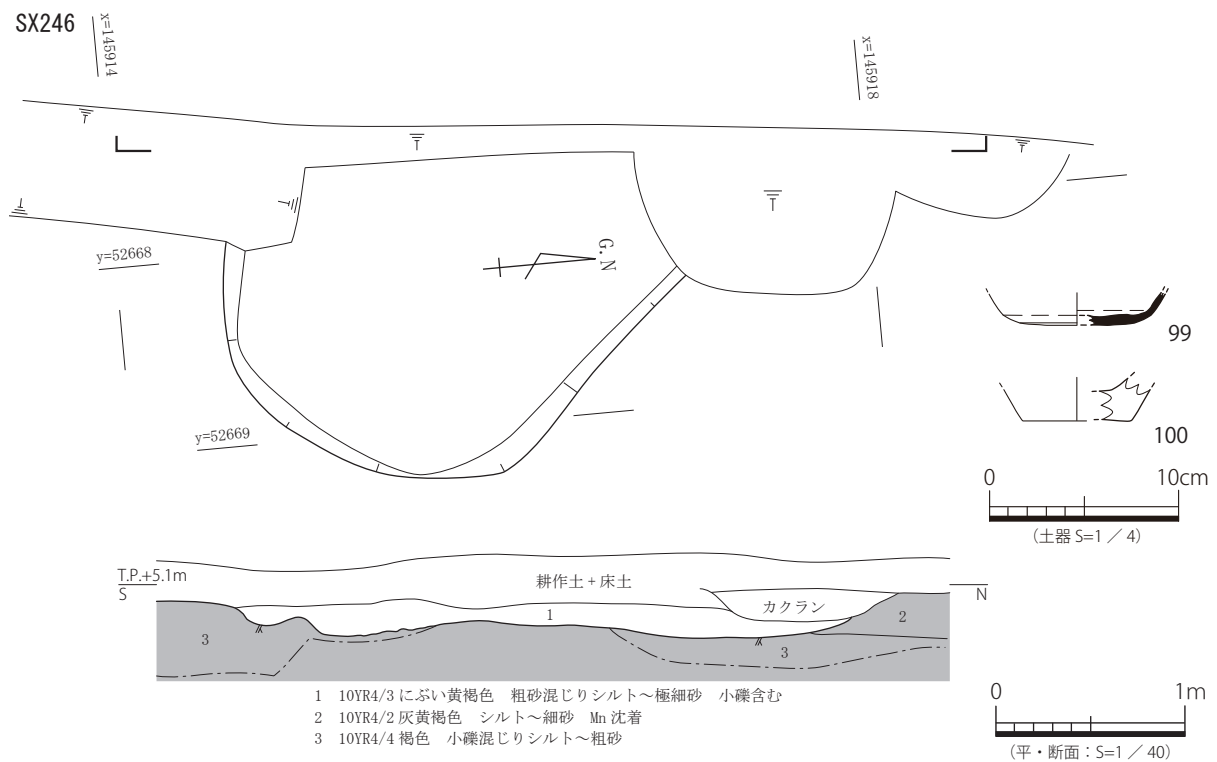
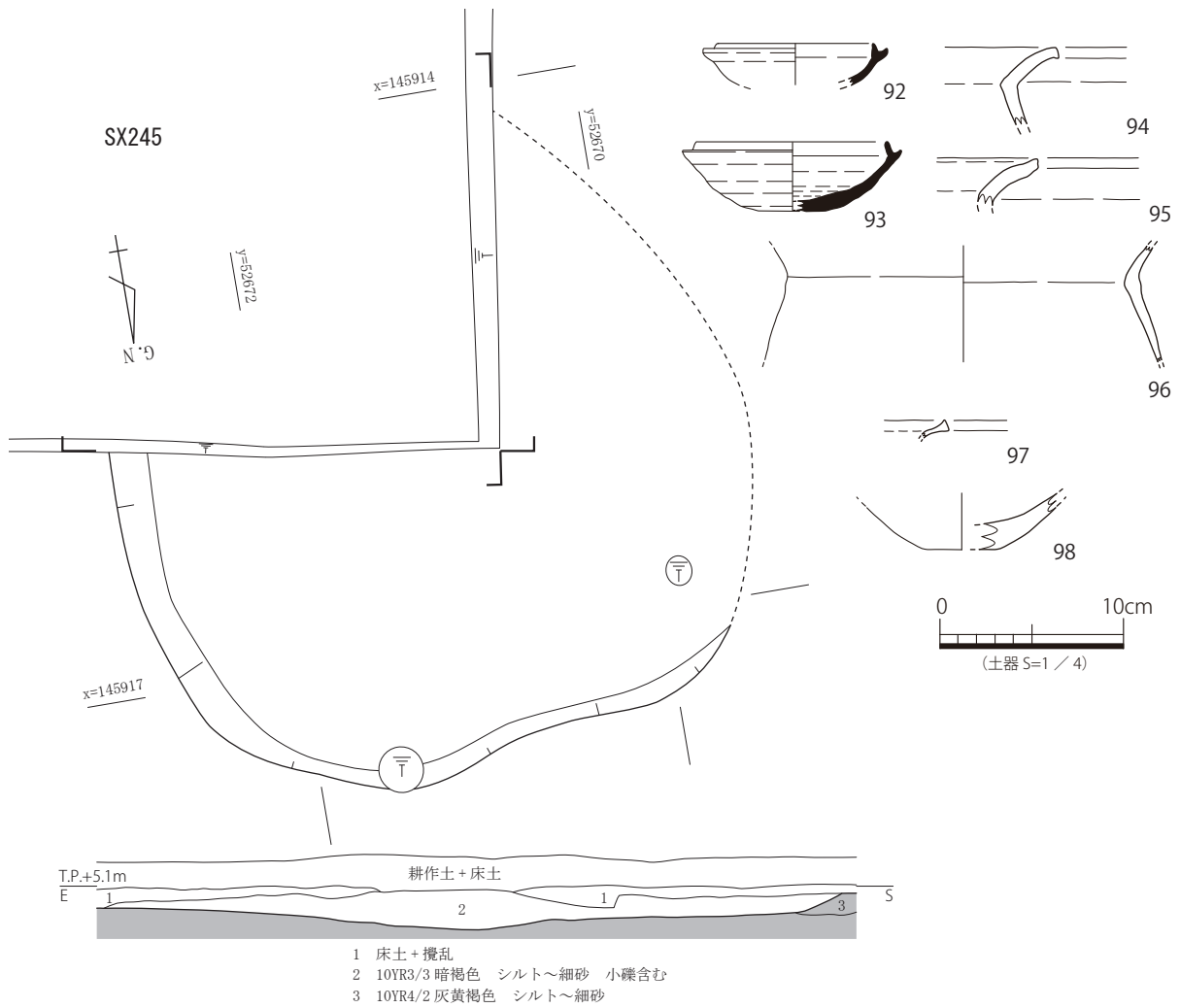
他の須恵器坏Hよりも古相を呈しており、TK10～MT85型式平行期であろうか。

SP249 5トレンチで検出したピット。SP250・251とセットで建物が復元できる

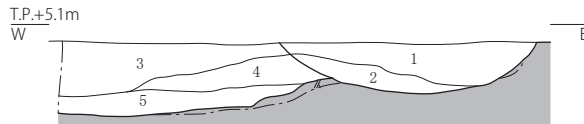
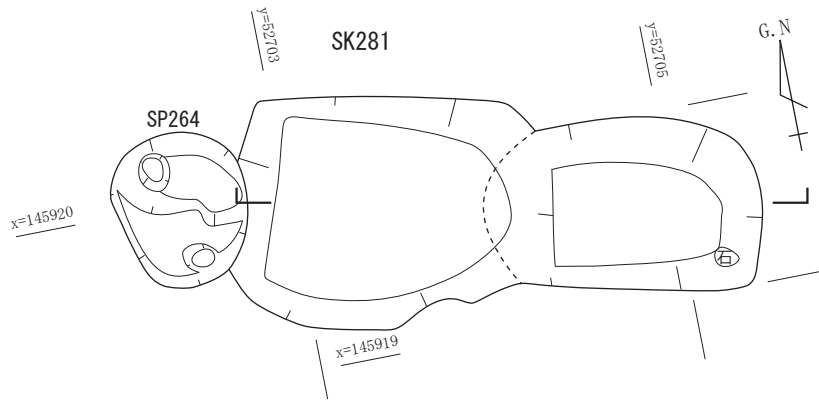


第 23 図 SD280・63・64 平・断面図、遺物実測図

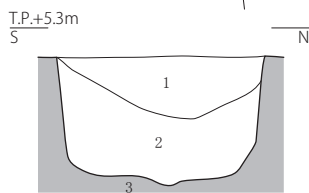
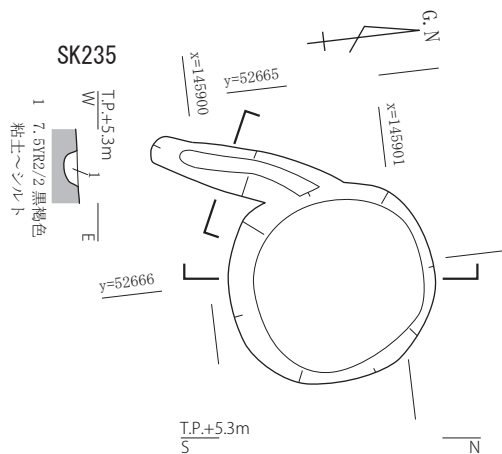
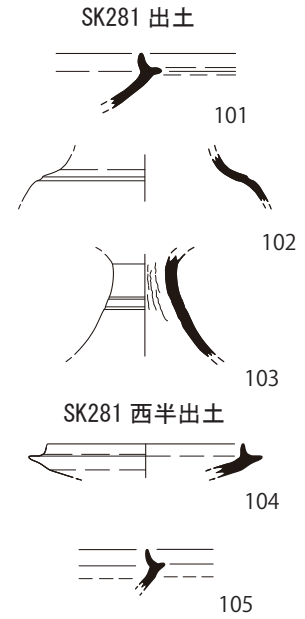
可能性があるが確定できない。108 は須恵器短脚高坏脚端部。傾きは焼け歪みによるものか安定しないが、下方に端部が突出する。



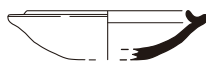
第 24 図 SX245・246 平・断面図、遺物実測図



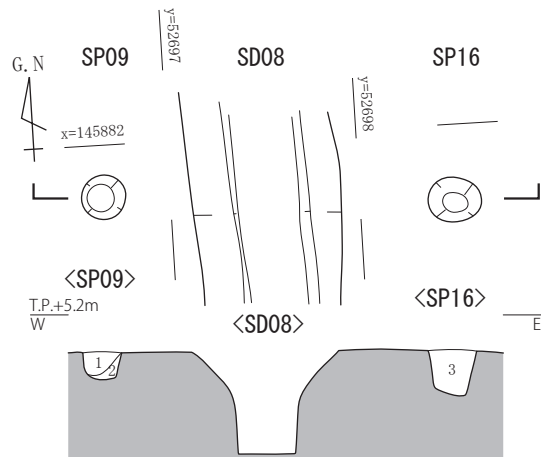
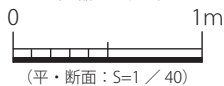
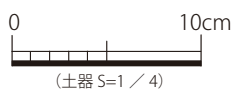
- 1 10YR6/3 にぶい黄褐色 シルト～細砂 径1～5 cmの黒褐色シルト・地山ブロック 10% 含む
- 2 10YR3/2 黒褐色 シルト～細砂 径2～3 cmの1層ブロック 20%+ 径1～2 cmの地山ブロック 15% 含む
- 3 10YR3/2 黒褐色 シルト～細砂 径2～10 cmの地山ブロック 50% 含む
- 4 10YR6/4 にぶい黄褐色 粗砂混じり粘質シルト 径2～3 cmの黒褐色シルトブロック 10% 含む
- 5 ほぼ地山ブロックで構成 径1～2 cmの黒褐色シルトブロック 3% 含む



- 1 7.5YR5/1 褐灰色 シルト～細砂
- 2 7.5YR2/2 黒褐色 粘土～シルト
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 シルト～極細砂 (地山)

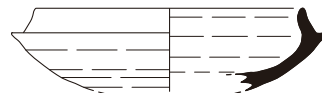


106

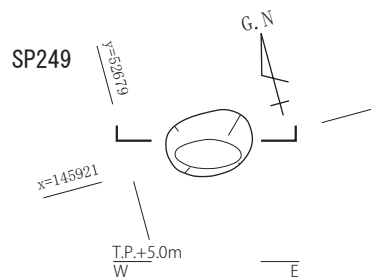


- 1 10YR5/2 灰黄褐色 粘質シルト～シルト Mn 沈着
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘質シルト Mn 沈着
- 3 10YR5/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト 径2～4 cmの10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルトブロック 20% 含む

SP16 出土



107



- 1 10YR3/2 黒褐色 粗砂混じりシルト～細砂 径1 cmの地山ブロック 10% 含む 炭化物含む



108

第 25 図 SK281・235、SP16・249 平・断面図、遺物実測図

第6節 中世・近世の遺構・遺物

SD166-55 2・3トレンチで検出した溝跡。断面は非常に浅い皿状。調査時には攪乱として処理したが、4トレンチでSD133を切る直線的な攪乱も同一の遺構の連続である可能性が高い。5トレンチでは確認できないため、西端は4・5トレンチ間で終わるものと考えられる。東端は調査区外に延びる。方位はN109° Eであり高松平野の条里地割に沿う。SD171-56と平行する。

109は土師器足釜の脚部。110は器種不明須恵器。摩耗が顕著。中世以降だが詳細な位置づけは困難である。

SD171-56 2・3トレンチで検出した溝跡。断面は非常に浅い皿状。調査時には攪乱として処理したが、4トレンチのSD144も同一の遺構の連続である可能性が高い。SD166-55と平行している。

111は東播系須恵器鉢の口縁部。こね鉢か。こちらも中世以降だが年代の詳細は難しい。

SK02 1トレンチで検出した土坑。112は肥前系磁器。碗の口縁部か。113は土師質の高坏脚部か。高松城様相編年（松本2003）様相2(1620-30年代)以降である。

SP194 5トレンチで検出したピット。114は弥生土器壺・甕底部。115は瀬戸美濃系陶器口縁部。詳細な時期決定は困難だが中世以降である。

SX134 4トレンチ北端で検出した不明遺構。116は焙烙。佐藤分類のA型式に相当し、18世紀代（佐藤1995）。117は須恵器坏身か。

SK21 2トレンチ南端付近で検出した土坑。近接してSK19・23が並ぶ。118は肥前系陶器でいわゆる唐津焼皿。胎土目の可能性高い。高松城様相編年様相1（17世紀初頭）か。

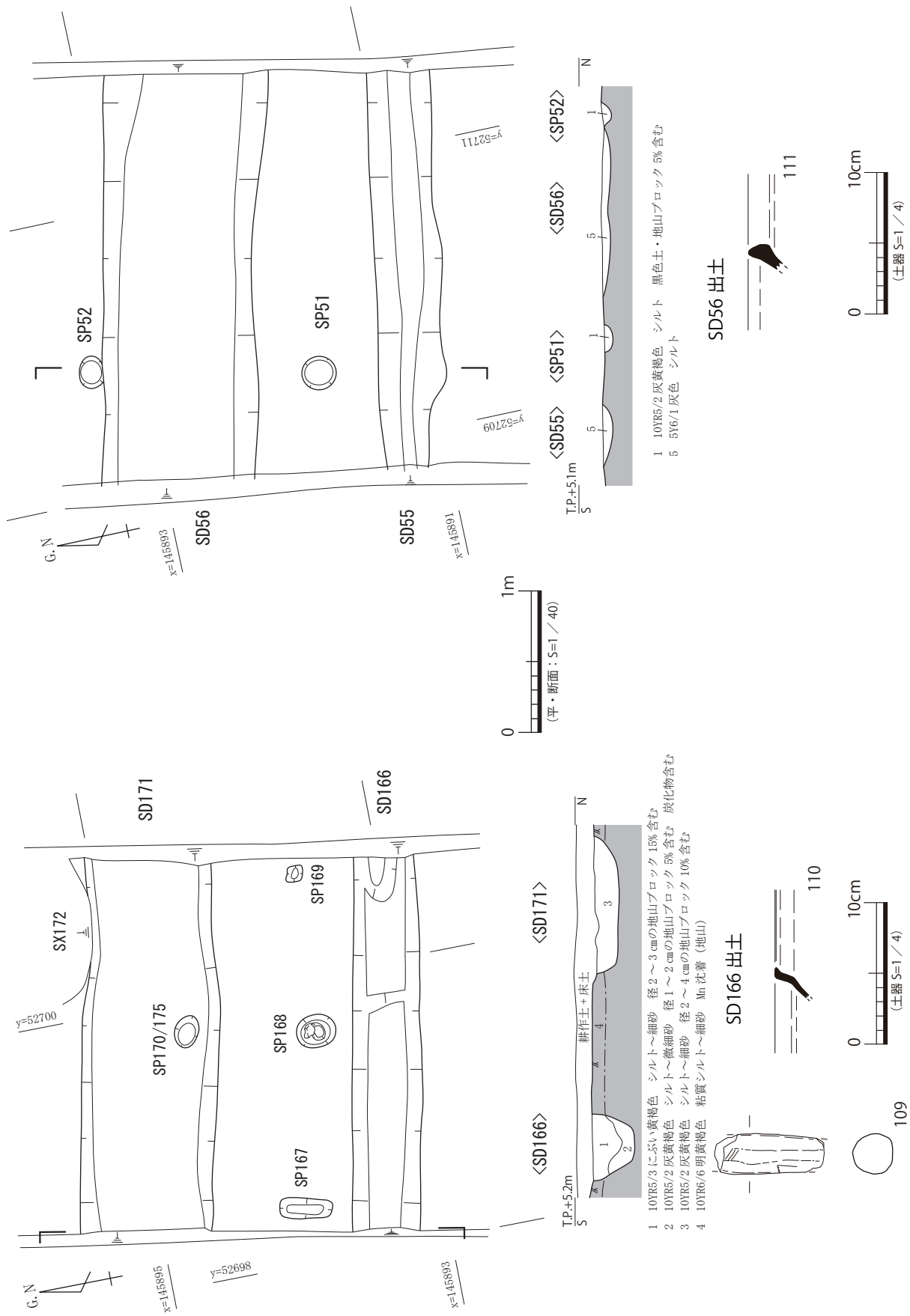
参考文献

佐藤竜馬 1995 「近世讃岐における土器生産」『財団法人香川県埋蔵文化財センター研究紀要』Ⅲ

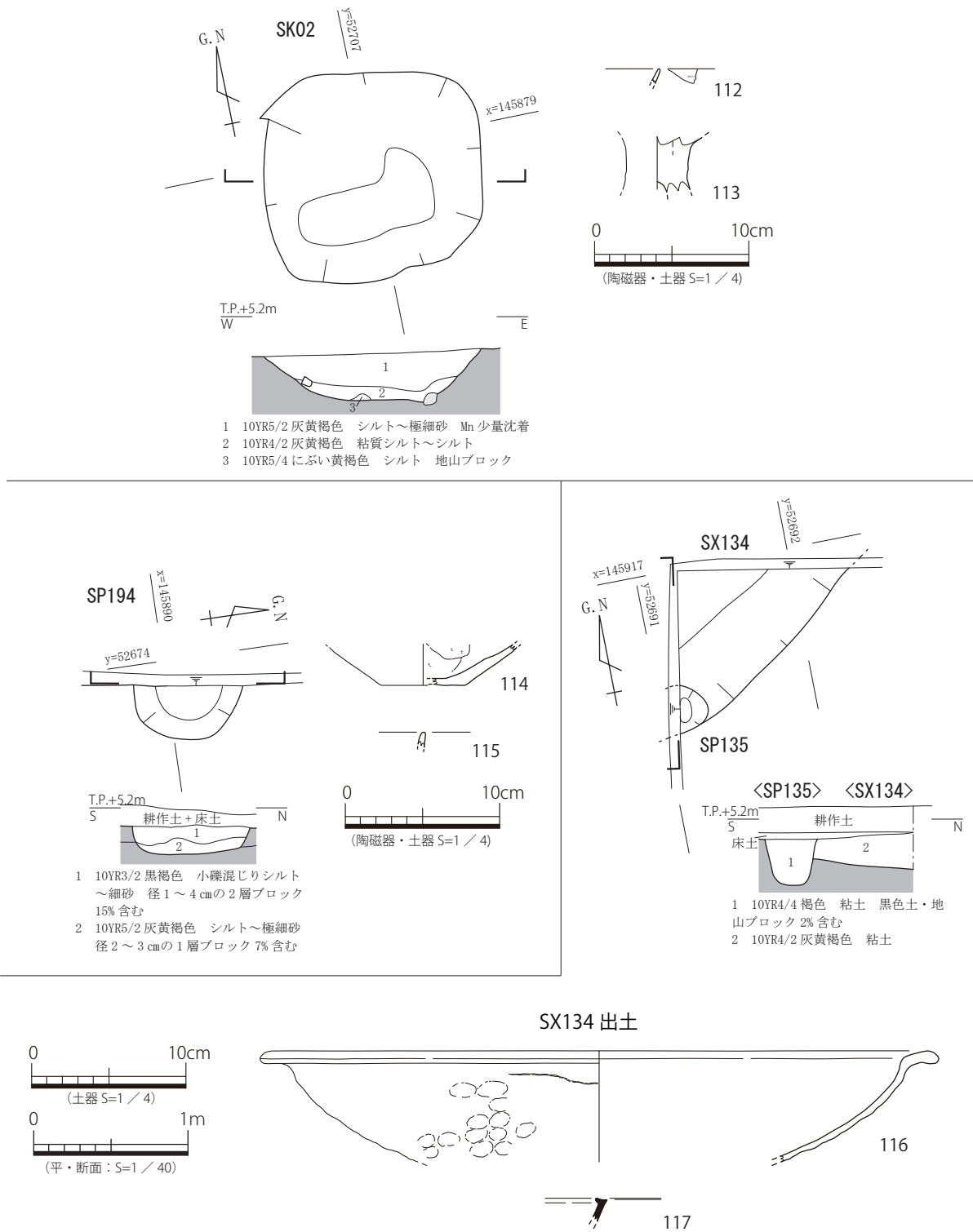
西弘海 1986 『土器様式の成立とその背景』

松本和彦・佐藤竜馬 2001 「高松城出土土器・陶磁器の変遷 様相の把握」『第3回四国徳島城下町研究会 四国と周辺の土器－焙烙の生産と流通－ 佐藤発表追加資料』

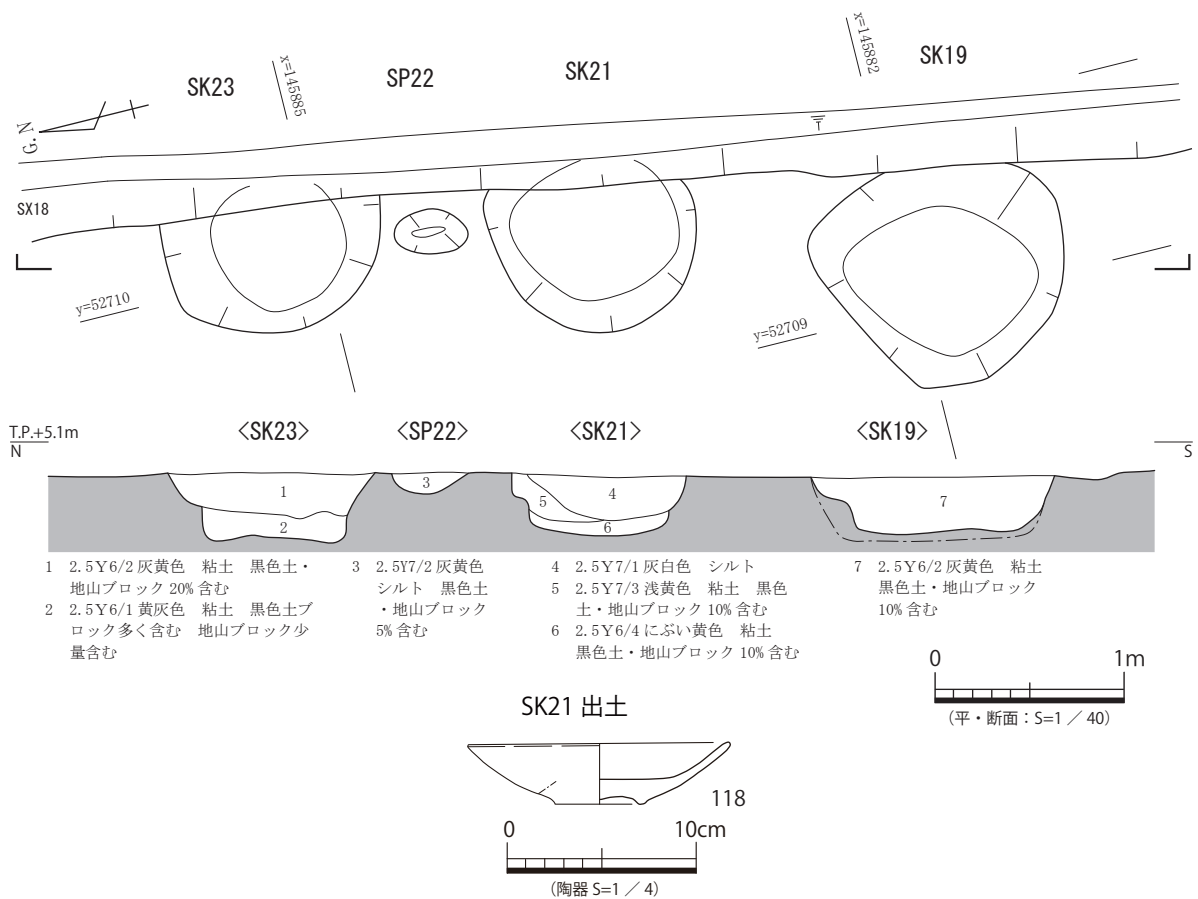
松本和彦 2003 「西の丸町地区出土の陶磁器について」『高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター



第 26 図 SD166-55・171-56 平・断面図、遺物実測図



第27図 SK02・SP194・SX134 平・断面図、遺物実測図



第 28 図 SK19・21・23 平・断面図、遺物実測図

第7節 時期決定が困難な遺構

第3節で整理したように、遺構の時期決定が困難な資料については基本的に一覧表で報告する(表1～4)。なお、埋土の特徴については調査時に大きく3種に区分して記録を作成していた。A：黒色系シルト主体、B：灰黄色系シルト主体、C：A層とB層がブロック状に混和、である。これを遺構配置図上に落とす(第29・30図)。なお、既述のとおり近世以降の遺構については灰白色系シルトが埋土となっているという理解をしているため、調査時には大きく4類型に整理して掘削を行っていた。また、対応は完全ではないものの、傾向としてはAは弥生時代の遺構に多く、B・Cは飛鳥時代の遺構に対応する傾向があることは報告しておく。

続いて、一部特徴的な遺構については特記して報告する。

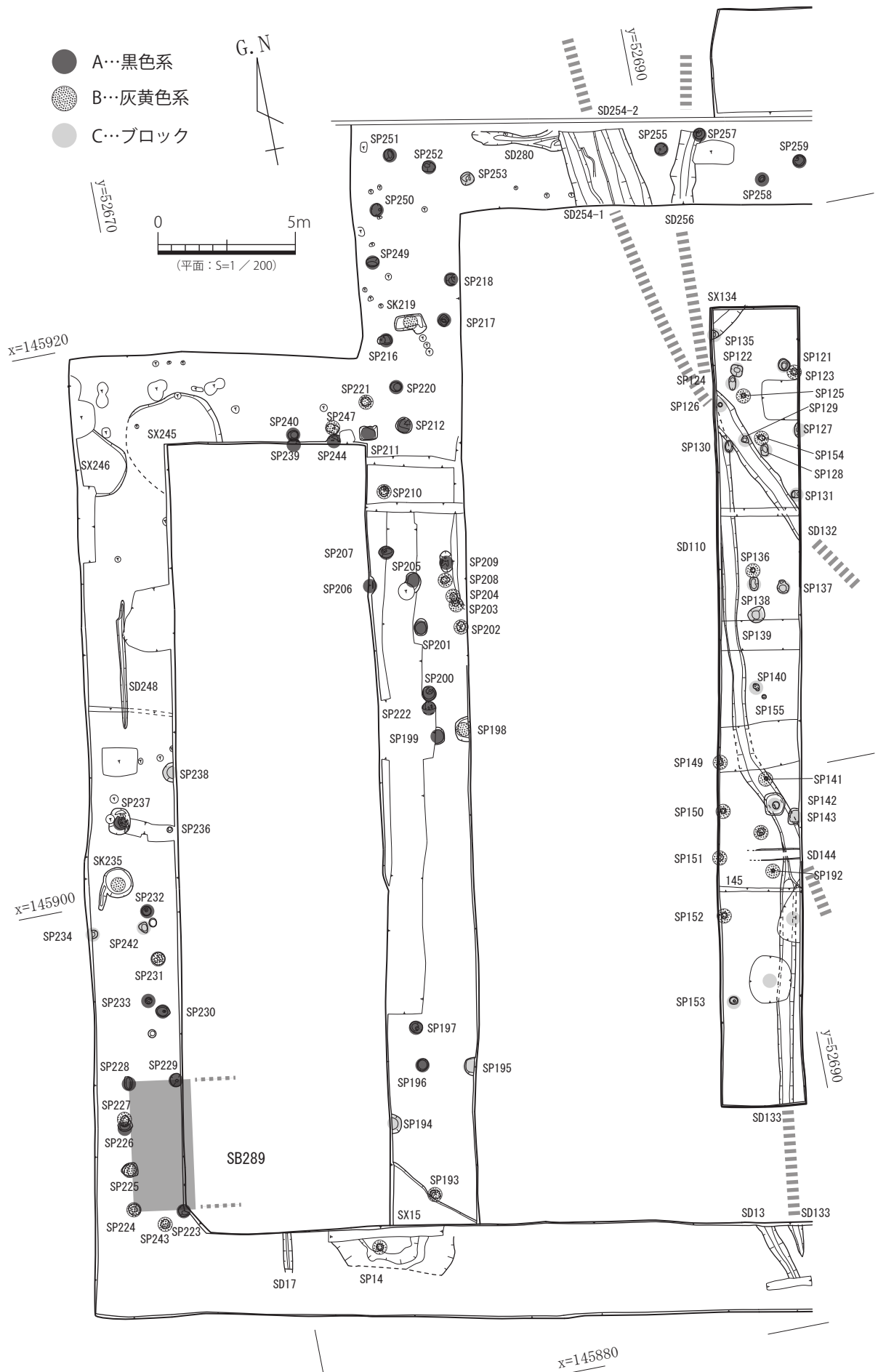
SP46・47・49・51・52・53・118・54 2トレンチで南北方向に連続して検出したピット群。建物を構成するか、柵列等になるか評価は難しい(第31図)。

SP149・150・151・152・153 4トレンチで南北方向に連続して検出したピット群。建物を構成するか、柵列等になるか評価は難しい(第32図)。

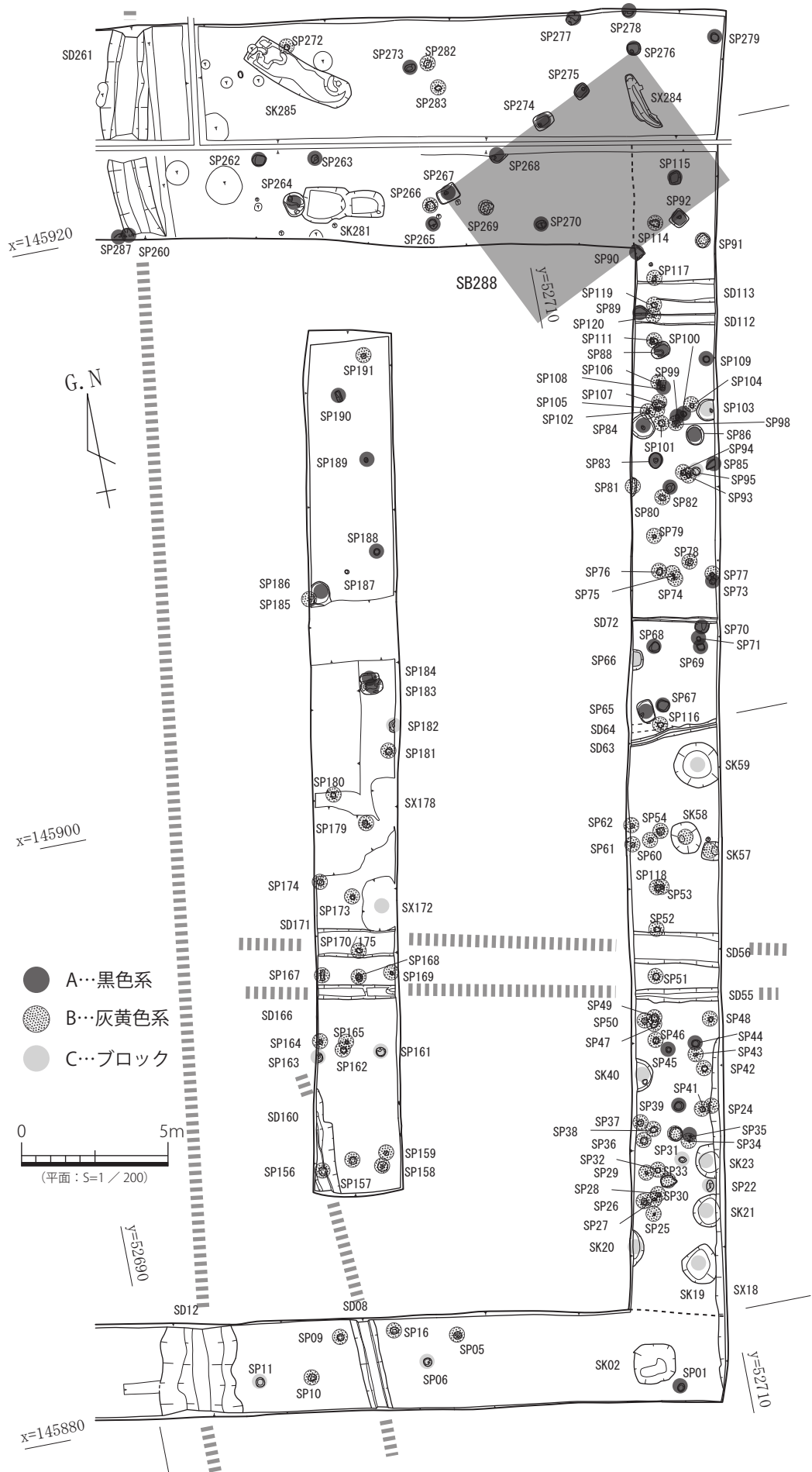
SP156・157・158・161・162・163 3トレンチ南側で検出したピット群。一連の建物の柱穴の可能性を想定したが、やや間隔が離れていることもあり確定しがたい(第33図)。

SP188・189・191 3トレンチ北側で検出したピット群。等間隔に展開するため、一連の建物の柱穴の可能性を想定したが確定しがたい。

このほか、2基以上のピットが一体性を持つ可能性があると判断した場合、同一図面に連続して記録した。こちらも一体性については可能性の提示のみで確定しえないので、図面(第34～36図)を集めて報告する。それ以外の遺構については、溝・土坑・ピットに分けて遺構番号順に掲載した(第37～47図)。



第 29 図 埋土の種類ごと遺構分布図 (西半)



第30図 埋土の類型ごと遺構分布図（東半）

表1 遺構一覧表①

遺構名	埋土色分け A: 黒 B: 灰黄 C: ブロック	特徴	出土遺物の 特徴
SP01	A		なし
SK02	B		陶磁器・土師器・ 弥生土器
SP03			欠
SP04			欠
SP05	B		なし
SP06	C		なし
SP07			欠
SD08	A		須恵器・土師器
SP09	B		なし
SP10	B		なし
SP11	C		なし
SD12	B		サヌカイト（剥 片）・木
SD13	B		弥生土器
SP14	B		土師器・豊島石
SX15	A	土器溜まり	弥生土器・土師 質土器・陶器・ 鉄製品
SP16	B		須恵器杯蓋
SD17	B	試掘 Tr に切ら れる	なし
SD18	C		粘土塊
SK19	C		なし
SK20	C	粘土採掘坑か	須恵器
SK21	C		陶器・須恵器・ 土師器・粘土塊・ 石・木
SP22	C		なし
SK23	C		弥生土器
SP24	B		なし
SP25	B		なし
SP26	B		土師器
SP27	B		なし
SP28	B		なし
SP29	B		なし
SP30	B		なし
SP31	B		なし
SP32	B		なし
SP33	C		なし
SP34	B		なし
SP35	A		なし
SP36	B		なし
SP37	B		なし
SP38	B		なし
SP39	A		なし

遺構名	埋土色分け A: 黒 B: 灰黄 C: ブロック	特徴	出土遺物の 特徴
SK40	C		須恵器・土師器・ 土師質土器
SP41	B		なし
SP42	B		なし
SP43	B		なし
SP44	A		なし
SP45	A		なし
SP46	B		なし
SP47	B	柵列か	なし
SP48	B		土師器
SP49	B	柵列か	なし
SP50	B	柵列か	なし
SP51	B	柵列か	なし
SP52	B	柵列か	なし
SP53	B	柵列か	なし
SP54	B	柵列か	なし
SD55	B		なし
SD56	B		須恵器・土師器
SK57	B		なし
SK58	B		なし
SK59	C	粘土採掘坑か	陶器
SP60	B		なし
SP61	B		なし
SP62	B		なし
SD63	B		なし
SD64	B	平面検出でき ず	須恵器
SP65	A		粘土塊
SP66	C		なし
SP67	A		なし
SP68	A		なし
SP69	A		なし
SP70	A		なし
SP71	A		弥生土器
SD72	B		なし
SP73	A		なし
SP74	B		なし
SP75	B		なし
SP76	B		なし
SP77	B		なし
SP78	B		なし
SP79	B		なし
SP80	B		なし
SP81	B		なし
SP82	A		なし
SP83	A		なし

表2 遺構一覧表②

遺構名	埋土色分け A: 黒 B: 灰黄 C: ブロック	特徴	出土遺物の 特徴	遺構名	埋土色分け A: 黒 B: 灰黄 C: ブロック	特徴	出土遺物の 特徴
SP84	A		弥生土器	SP130	C		瓦・弥生土器
SP85	A		なし	SP131	C		なし
SP86	A		弥生土器	SD132	A	底面がデコボ コ 須恵器多い	須恵器杯・須恵 器・土師器・弥 生土器
SP87	A		欠	SD133	B		なし
SP88	A		土師器	SX134	B		土師質土器鍋・ サヌカイト・石
SP89	A		なし	SP135	C		なし
SP90	A	掘立柱建物	なし	SP136	B		なし
SP91	B		なし	SP137	C		なし
SP92	A	掘立柱建物	弥生土器	SP138	C		なし
SP93	B		なし	SP139	C		土師質土器・瓦・ 粘土塊・鉄製品
SP94	B		なし	SP140	C		なし
SP95	C		なし	SP141	B		なし
SP96			欠	SP142	C		なし
SP97			欠	SP143	C		弥生土器
SP98	B		なし	SD144	C		なし
SP99	A		なし	攪乱 145	C		なし
SP100	A		なし	攪乱 146	C		なし
SP101	B		なし	攪乱 147	C		なし
SP102	B		なし	SP148	B		なし
SP103	C		土師器	SP149	B		なし
SP104	B		なし	SP150	B		なし
SP105	B		なし	SP151	B		なし
SP106	B		なし	SP152	B		なし
SP107	B		なし	SP153	C		弥生土器
SP108	A		弥生土器	SP154	B		なし
SP109	A		なし	SP155	-		なし
SD110	B		なし	SP156	B		須恵器・土師器・ 弥生土器
SP111	B		なし	SP157	B		土師器
SD112	B		なし	SP158	B		陶器・鉄製品?
SD113	B		なし	SP159	B		なし
SP114	B		なし	SD160	-		須恵器・土師器・ 弥生土器
SP115	A		弥生土器	SP161	C		なし
SP116	B		なし	SP162	B		なし
SP117	B		なし	SP163	C		なし
SP118	B		なし	SP164	B		なし
SP119	B		なし	SP165	B		なし
SP120	B		なし	SD166	B		土師質土器・須 恵器・土師器・ 陶器
SP121	C		陶磁器・須恵器	SP167	B		なし
SP122	C		なし	SP168	B		なし
SP123	B		なし				
SP124	C		なし				
SP125	B		なし				
SP126	C		なし				
SP127	C		なし				
SP128	C		瓦・炭化物				
SP129	C		瓦・須恵器・弥 生土器				

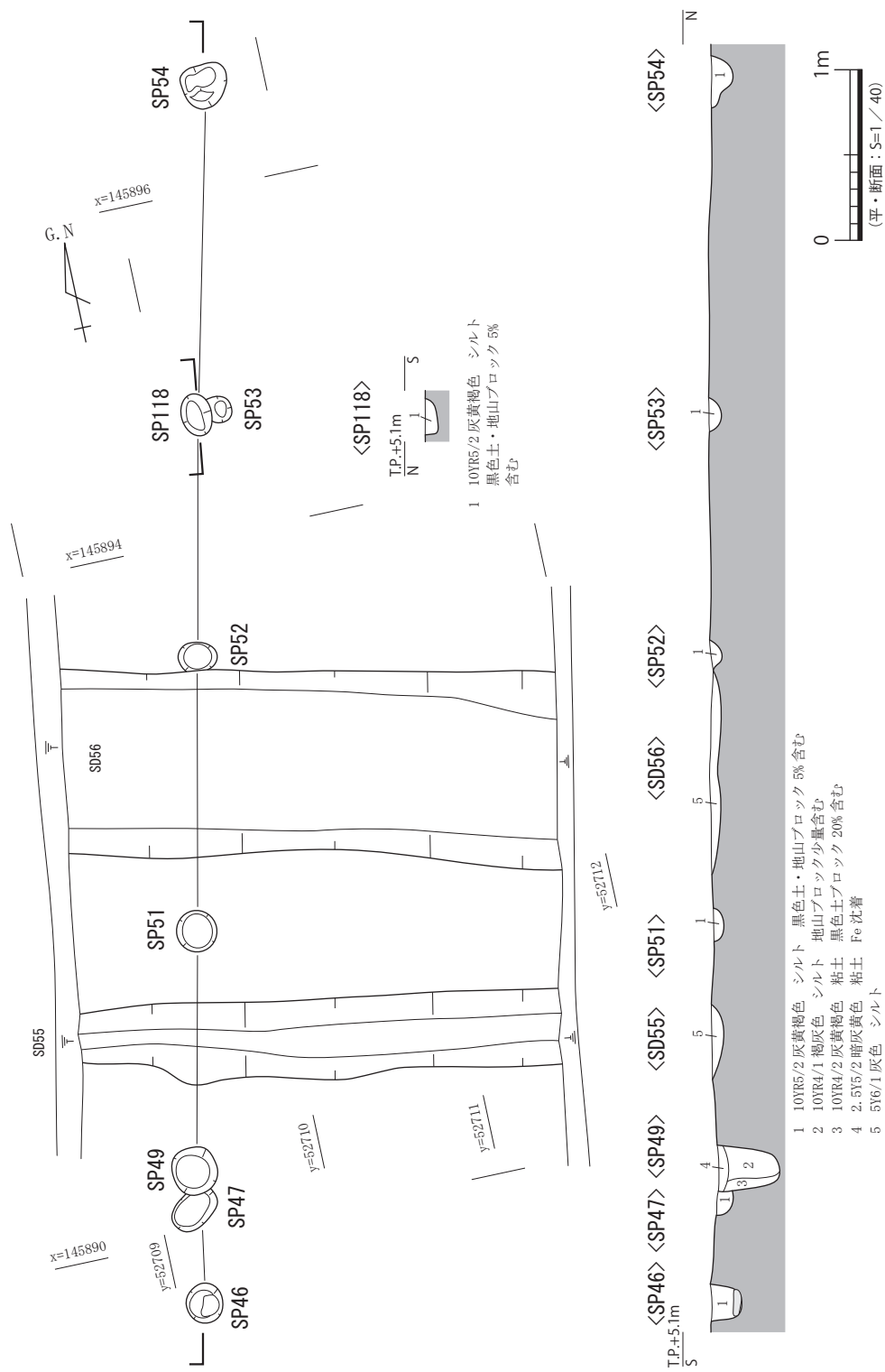
表3 遺構一覧表③

遺構名	埋土色分け A: 黒 B: 灰黄 C: ブロック	特徴	出土遺物の 特徴	遺構名	埋土色分け A: 黒 B: 灰黄 C: ブロック	特徴	出土遺物の 特徴
SP169	B		なし	SP207	A		弥生土器
SP170	B		なし	SP208	B		なし
SD171	B		なし	SP209	A		弥生土器・鉄滓
攪乱 172	C		播鉢・陶磁器・ 須恵器・土師質 土器・弥生土器	SP210	B		弥生土器
				SP211	A		弥生土器
SP173	B		なし	SP212	A		なし
SP174	B		なし	SP213	B		なし
SP175	B		なし	SP214	B		サヌカイト（剥 片）
SX176	C		須恵器・土師器				
SP177			欠	SP216	A		弥生土器
SK178	C		須恵器・磁器・ 土師器	SP217	A		なし
				SP218	A		なし
SP179	B		なし	SK219	B		石鏃
SP180	B		なし	SP220	A		なし
SP181	B		なし	SP221	B		なし
SP182	C		須恵器・土師器	SP222	A		なし
SP183	A		須恵器・土師器	SP223	A	掘立柱建物	なし
SP184	A		なし	SP224	B	掘立柱建物	弥生土器
				SP225	B	掘立柱建物	なし
SP185	B		土師質土器	SP226	A	掘立柱建物	なし
				SP227	B	掘立柱建物	なし
SP186	A		須恵器・土師器・ 石	SP228	A	掘立柱建物	なし
				SP229	A	掘立柱建物	須恵器杯・須恵 器壺・土師器
SP187			欠	SP230	A	掘立柱建物か	なし
SP188	A	柵列か	なし	SP231	B	掘立柱建物か	なし
SP189	A	柵列か	なし	SP232	A	掘立柱建物か	なし
SP190	A	柵列か	なし	SP233	A		なし
SP191	B	柵列か	なし	SP234	C		なし
SP192	B		なし	SK・ SD235	B A		須恵器杯・土師 器・弥生土器
SP193	B		なし				
SP194	C		陶器・弥生土器 or 土師器	SP237	A		弥生土器
				SP238	C		なし
SP195	C		なし	SP239	A		なし
SP196	A		なし	SP240	A		なし
SP197	A		なし	SP241			欠
SP198	B		須恵器	SP242	C		弥生土器
SP199	A		土師器・弥生土 器	SP243	B		なし
				SP244	A		なし
SP200	A		土師器・弥生土 器	SX245	A	旧河道の土器 溜まり	須恵器杯・須恵 器・土師器・弥 生土器・豊島石
SP201	A		弥生土器				
SP202	B		弥生土器	SP247	B		なし
SP203	B		なし	SD248	B		須恵器・土師器
SP204	B		弥生土器				
SP205	A		弥生土器				
SP206	A		なし				

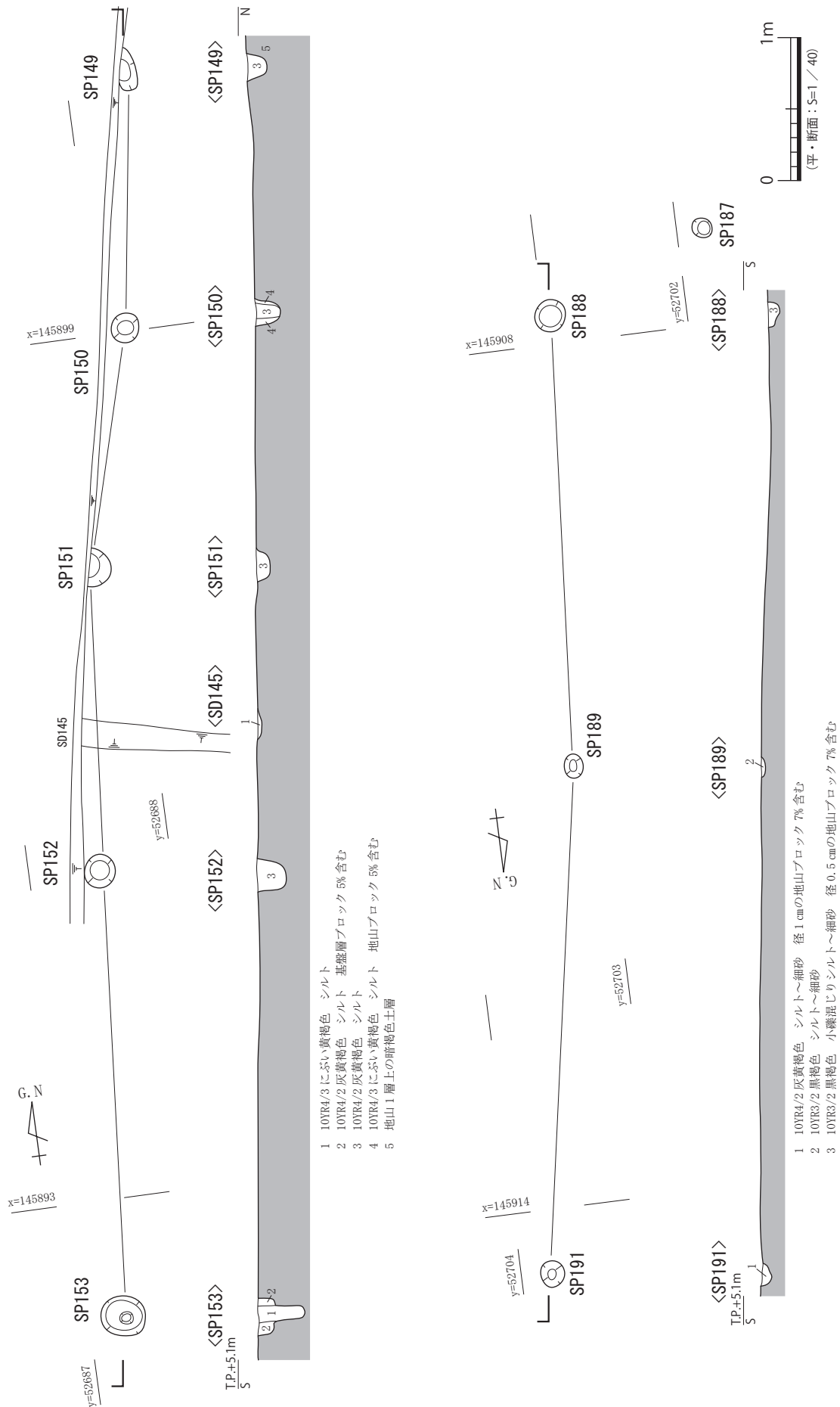
表4 遺構一覧表④

遺構名	埋土色分け A: 黒 B: 灰黄 C: ブロック	特徴	出土遺物の 特徴
SP249	A		須恵器
SP250	A		弥生土器・サヌカイト
SP251	A		なし
SP252	A		須恵器・弥生土器
SP253	C		弥生土器(試掘)
SD254-1	A	足跡多い	須恵器・土師器・弥生土器・石(燧石)
SD254-2	A	足跡多い	須恵器・土師器・弥生土器
SP255	A		弥生土器
SD256	B		なし
SP257	A		なし
SP258	A		なし
SP259	A		須恵器・石
SP260	A		弥生土器
SD261	A		木
SP262	A		弥生土器
SP263	A		サヌカイト
SP264	A		弥生土器
SP265	A		なし
SP266	B		なし
SP267	A	掘立柱建物	須恵器・土師器・弥生土器
SP268	A	掘立柱建物	須恵器・弥生土器
SP269	B		弥生土器
SP270	A		土師器・弥生土器
SP271	-		なし
SP272	B		なし
SP273	A		弥生土器
SP274	A	掘立柱建物	土師器・弥生土器
SP275	A	掘立柱建物	なし
SP276	A	掘立柱建物	弥生土器
SP277	A		なし
SP278	A		なし
SP279	A		なし

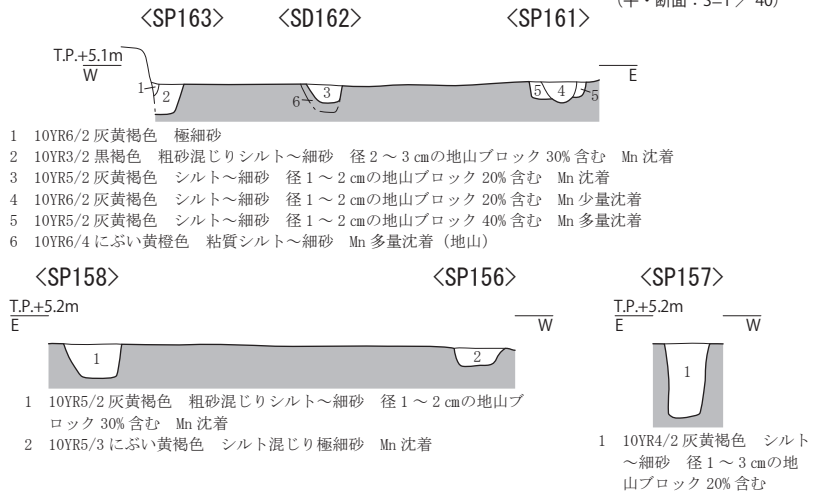
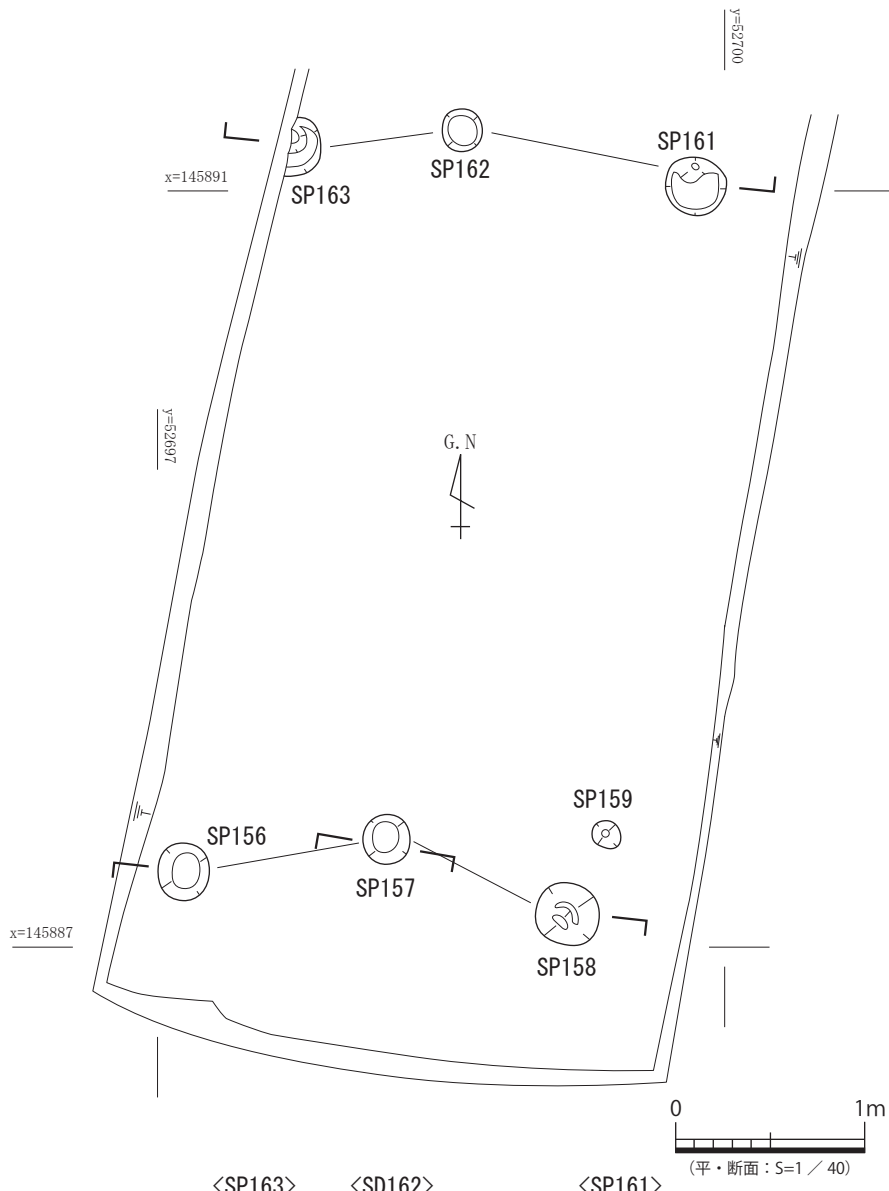
遺構名	埋土色分け A: 黒 B: 灰黄 C: ブロック	特徴	出土遺物の 特徴
SD280	A		須恵器・土師器・弥生土器
SK281	C		須恵器・土師器・弥生土器・サヌカイト
SP282	B		なし
SP283	B		なし
SX284	B		なし
SK285	B		なし
攪乱 286	C		なし
SP287	A		なし
旧河道			石鏃・木



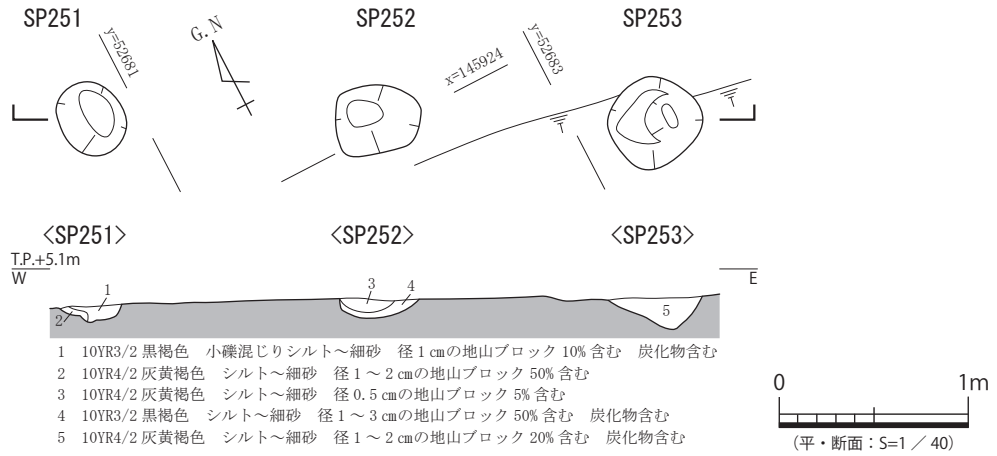
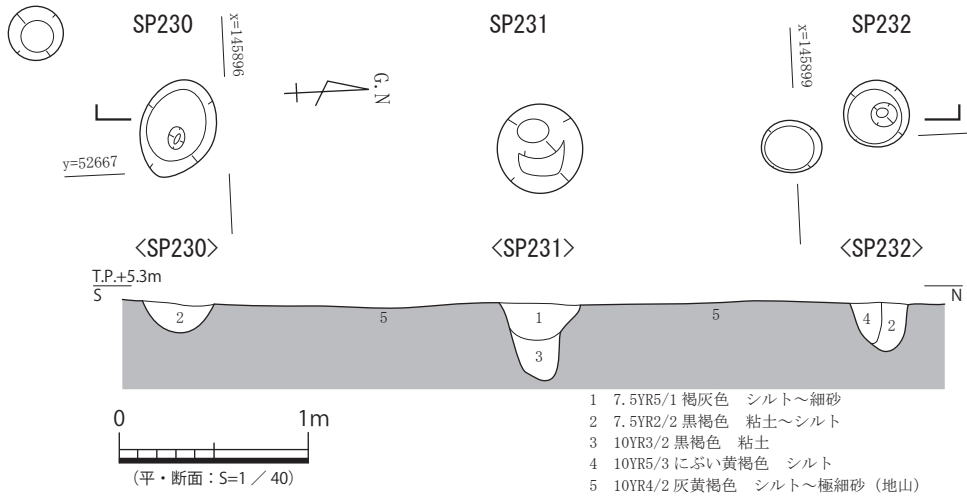
第 31 図 SP46・47・49・51・52・53・118・54 平・断面図



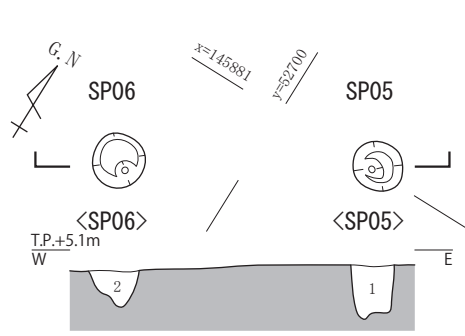
第 32 図 SP149・150・151・152・153、SP188・189・191 平・断面図



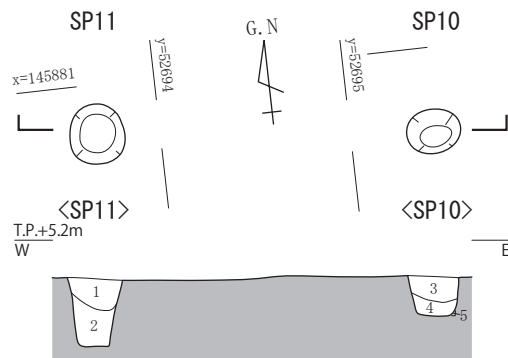
第 33 図 SP156・157・158・161・162・163 平・断面図



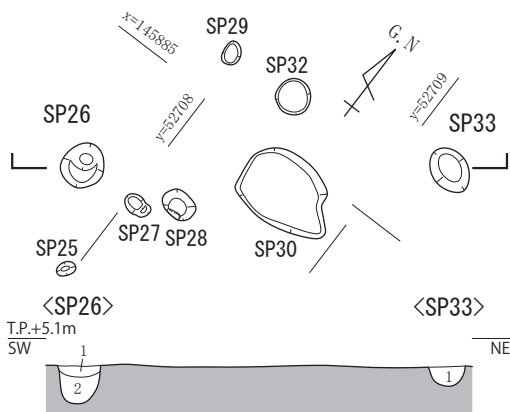
第34図 SP230～232、SP251～253 平・断面図



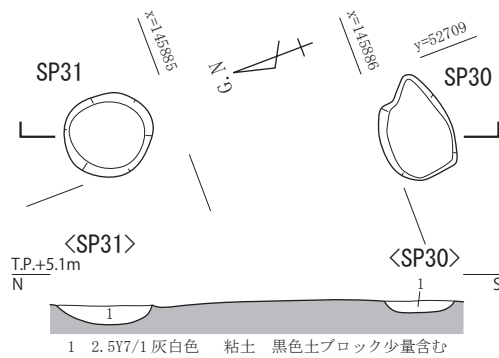
- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト～極細砂 Mn 沈着
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト～極細砂 径2～5cmの
10YR5/6 黄褐色粘質シルトブロック 40% 含む Mn 沈着



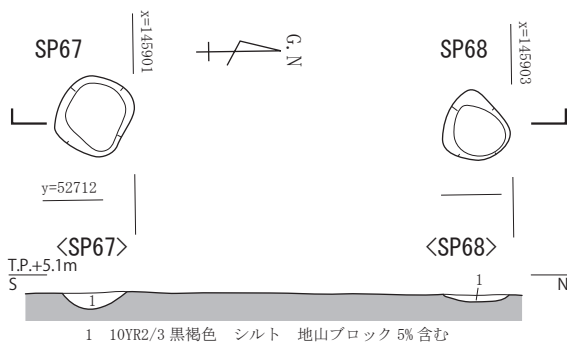
- 1 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト 径2～3cmの
10YR5/6 黄褐色シルトブロック 30% 含む Mn 沈着
- 2 10YR3/2 黒褐色 粗砂混じりシルト～細砂 粘性あり
- 3 10YR5/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト 径1～4cmの
10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック 20% 含む Mn 沈着
- 4 10YR3/3 暗褐色 極粗砂混じりシルト～細砂
- 5 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じり粘質シルト (地山)



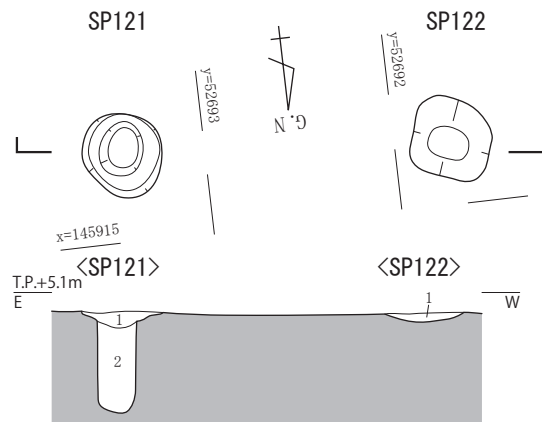
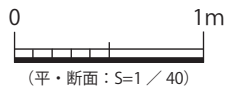
- 1 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 黒色土・地山ブロック 2% 含む
- 2 10YR4/1 褐灰色 シルト 黒色土・地山ブロック 10% 含む



- 1 2.5Y7/1 灰白色 粘土 黒色土ブロック少量含む

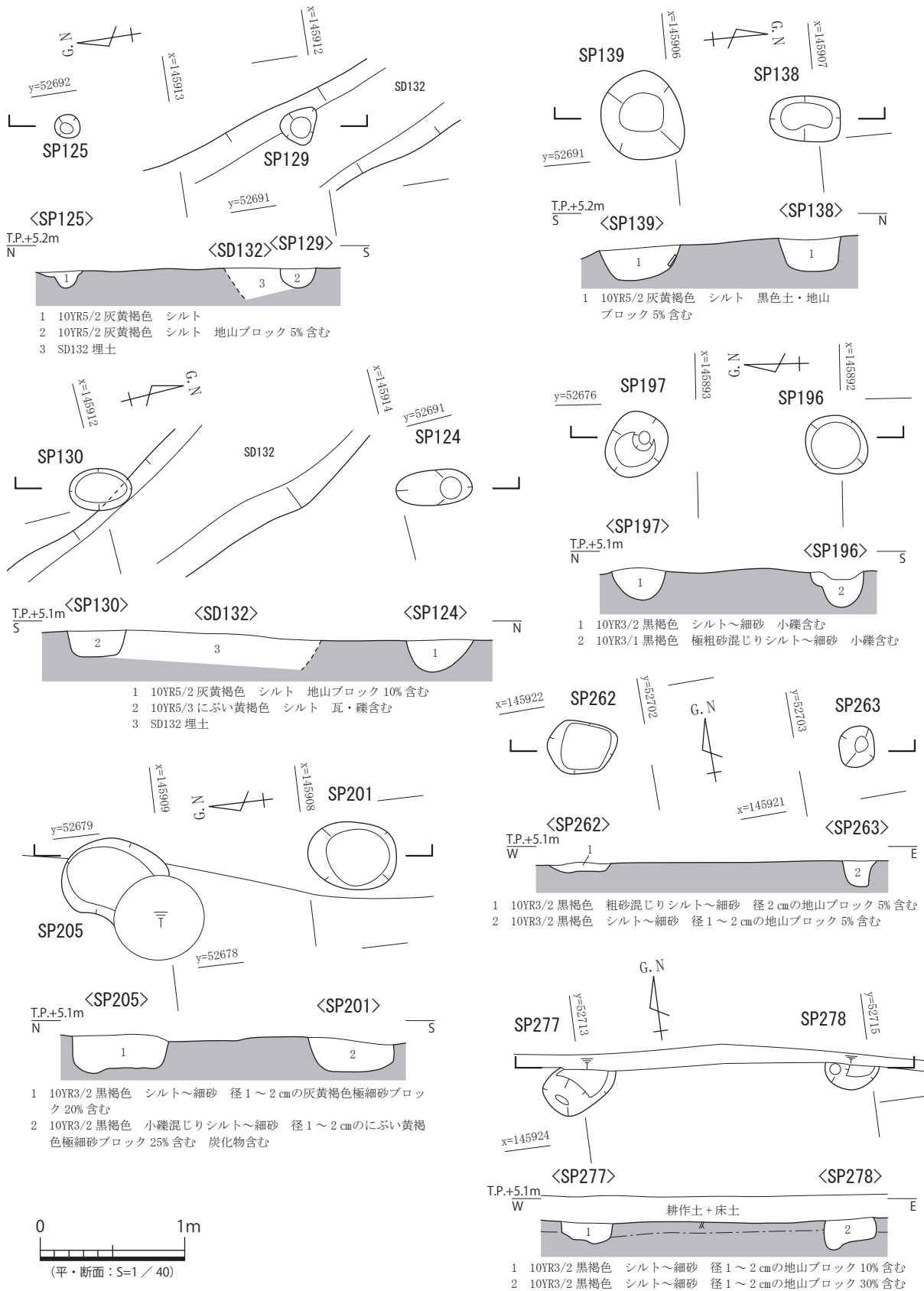


- 1 10YR2/3 黒褐色 シルト 地山ブロック 5% 含む

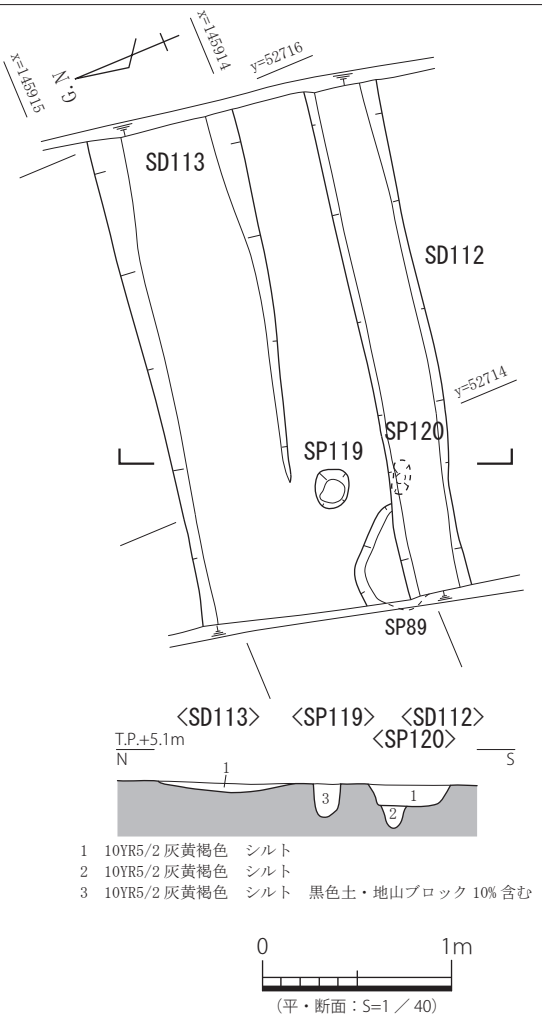
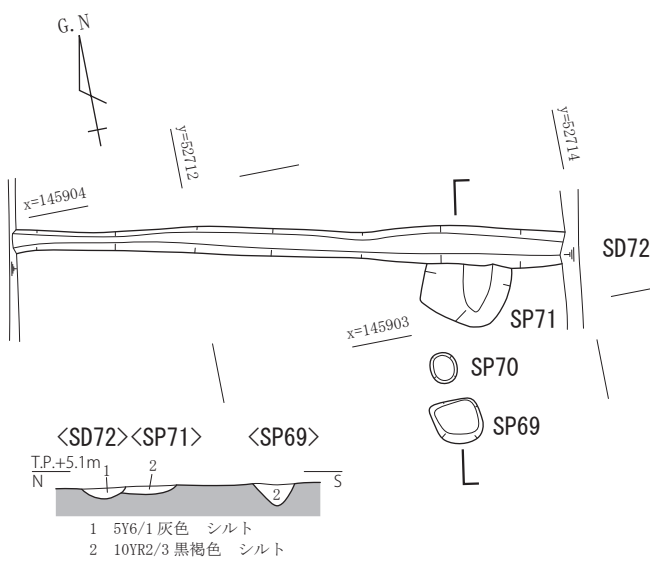
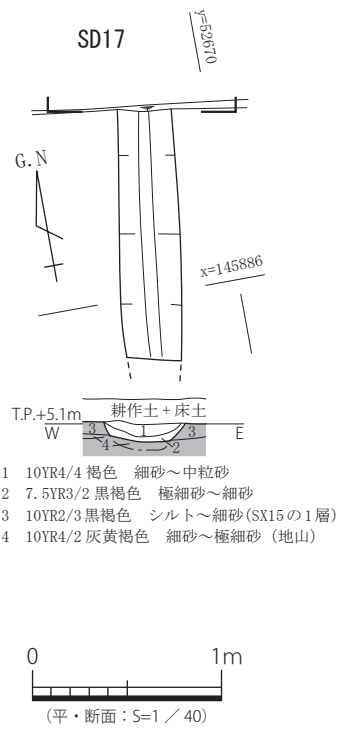
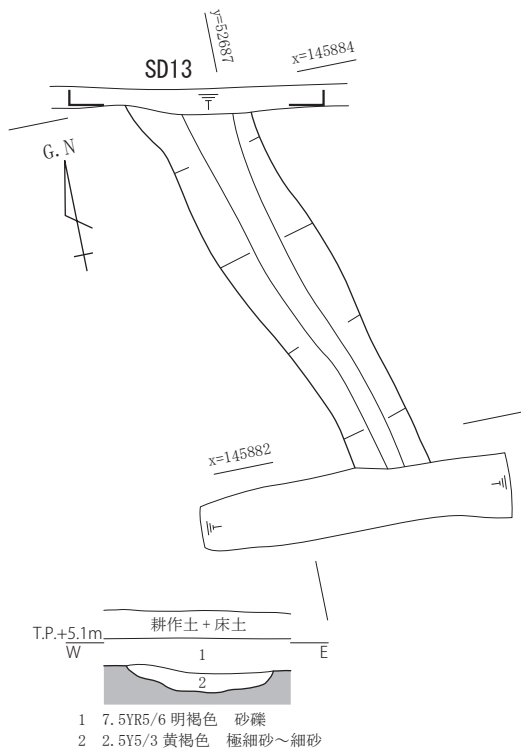


- 1 10YR5/2 灰黄褐色 シルト～細砂 地山ブロック 5% 含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色 シルト

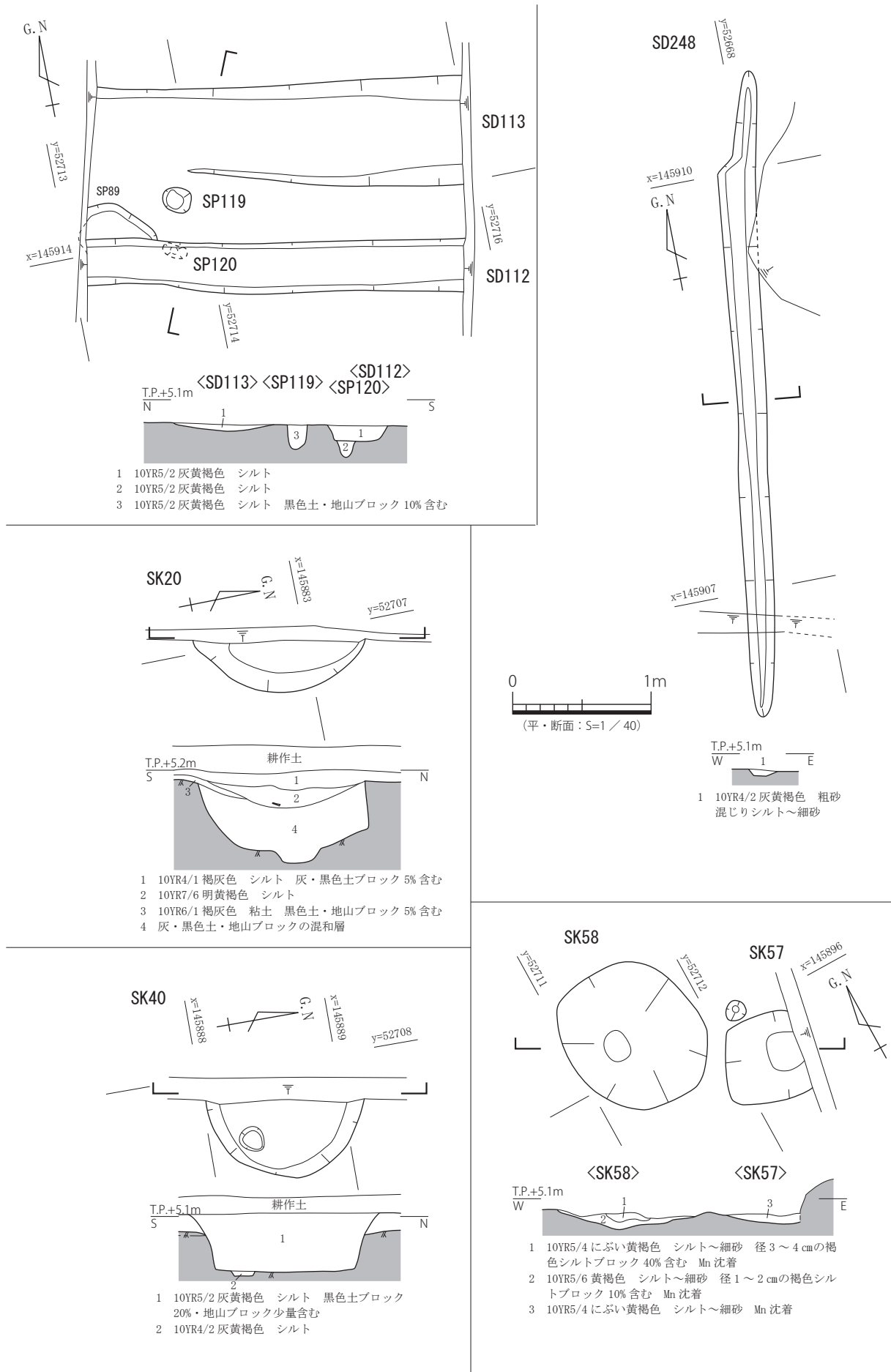
第 35 図 SP05・06、10・11、26・33、30・31、67・68、121・122 平・断面図



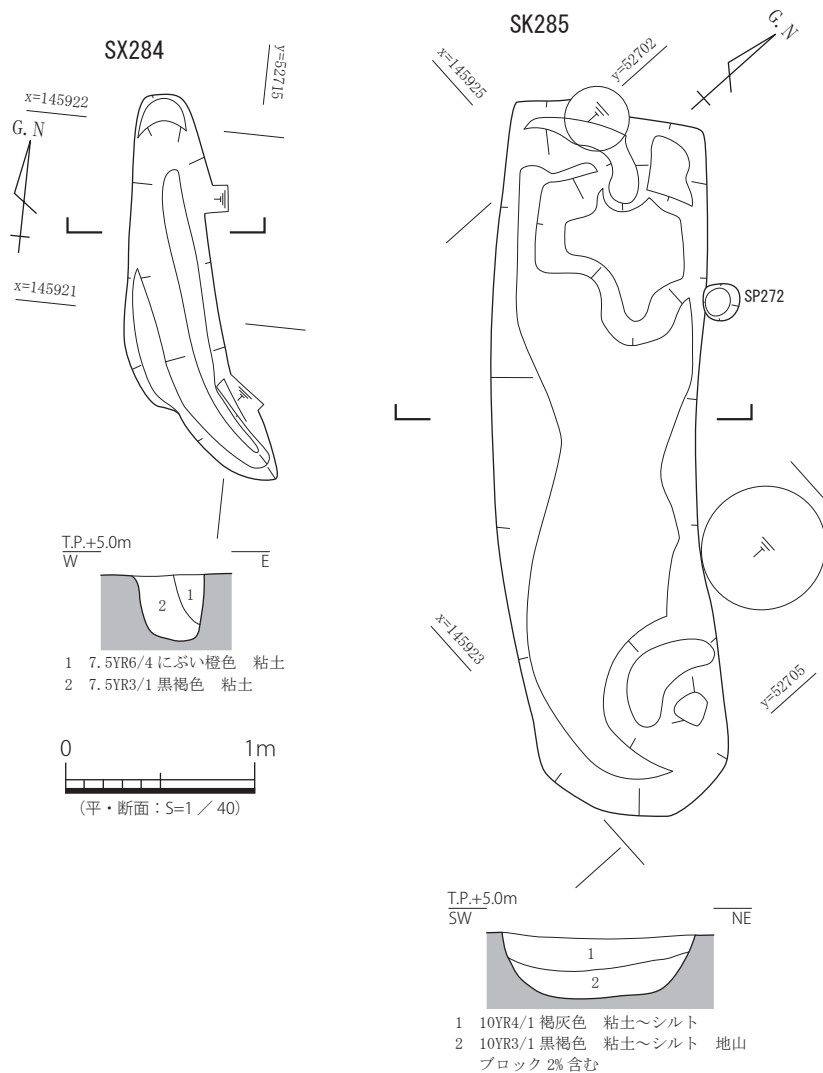
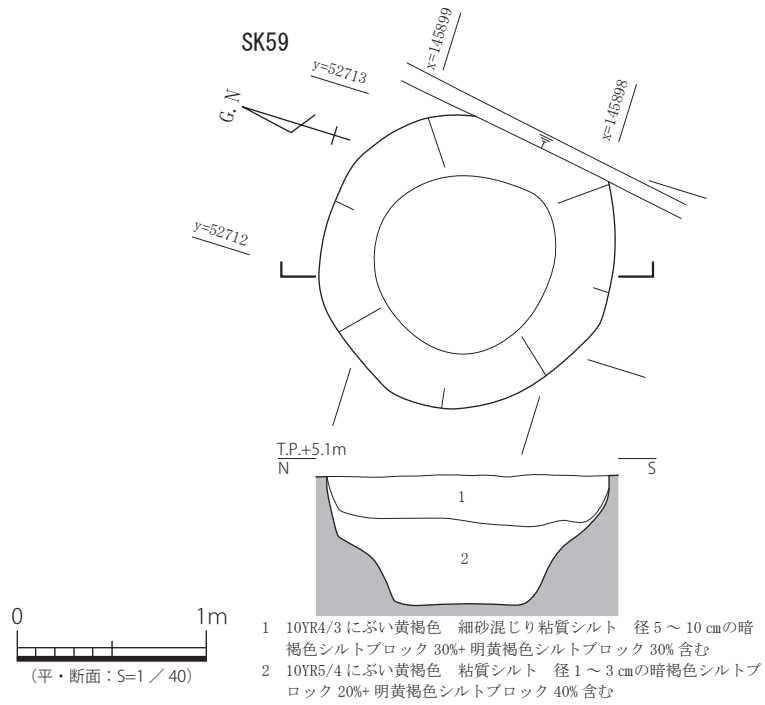
第36図 SP125・129、124・130、138・139、196・197、201・205、262・263、277・278 平・断面図



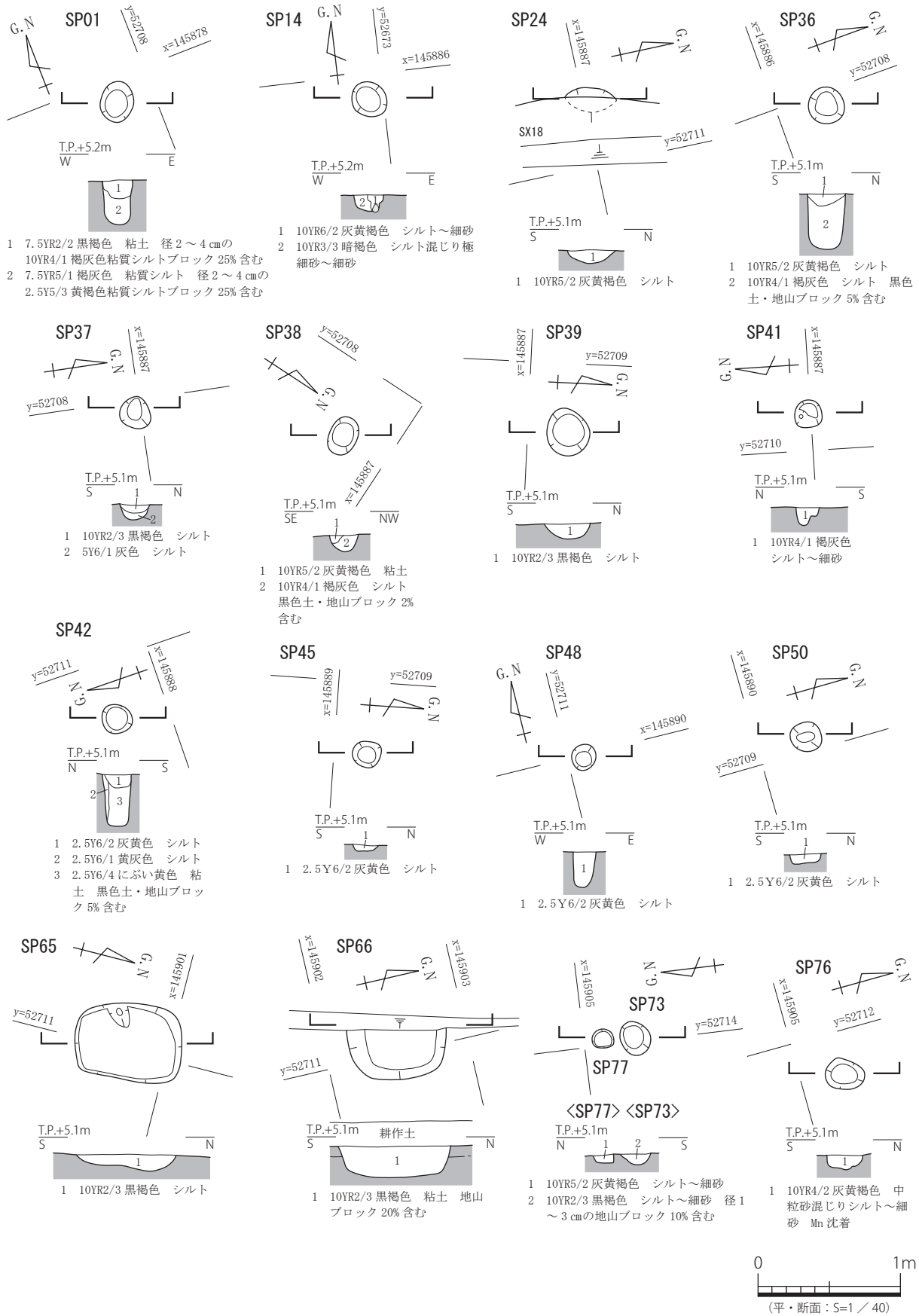
第 37 図 時期不明遺構集合① (溝)



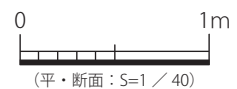
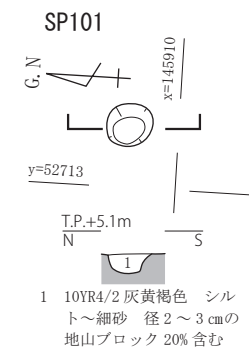
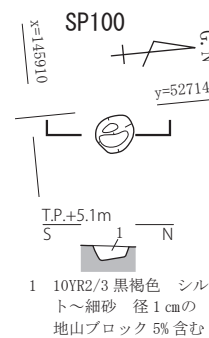
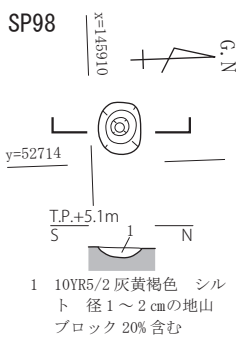
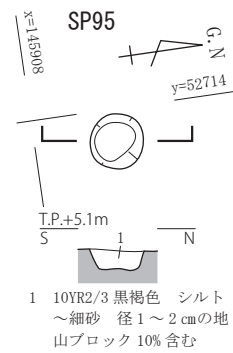
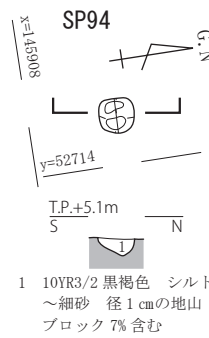
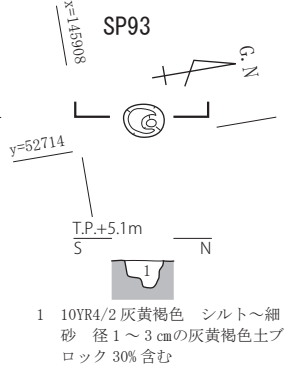
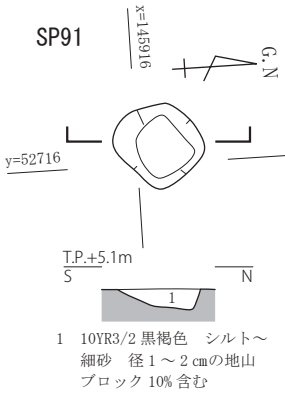
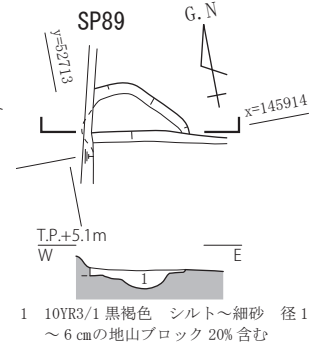
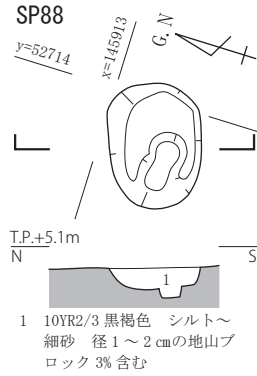
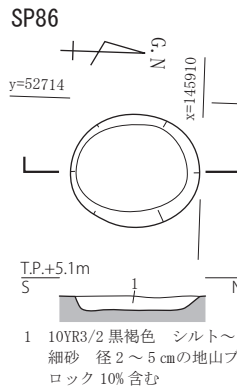
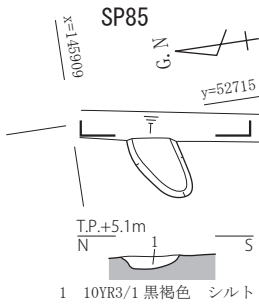
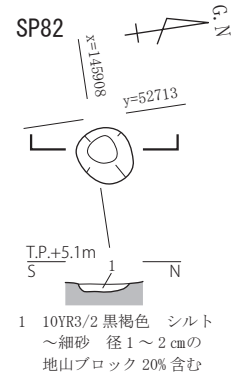
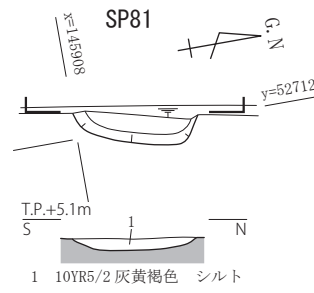
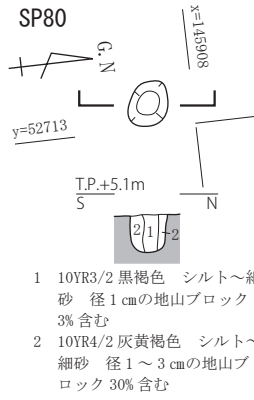
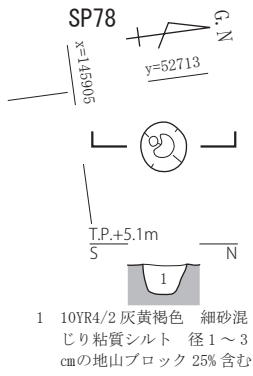
第 38 図 時期不明遺構集合② (溝・土坑)



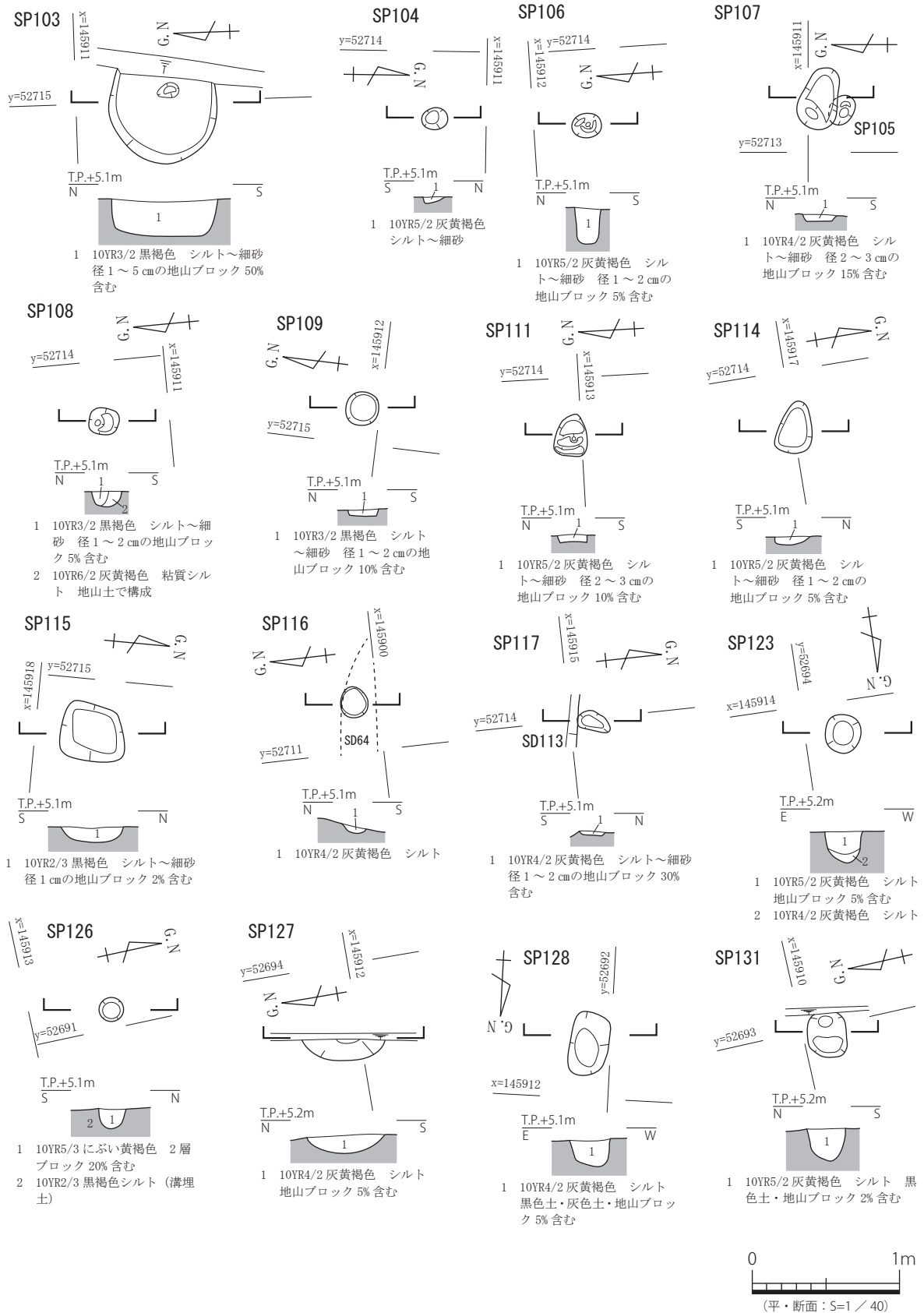
第39図 時期不明遺構集合③(土坑)



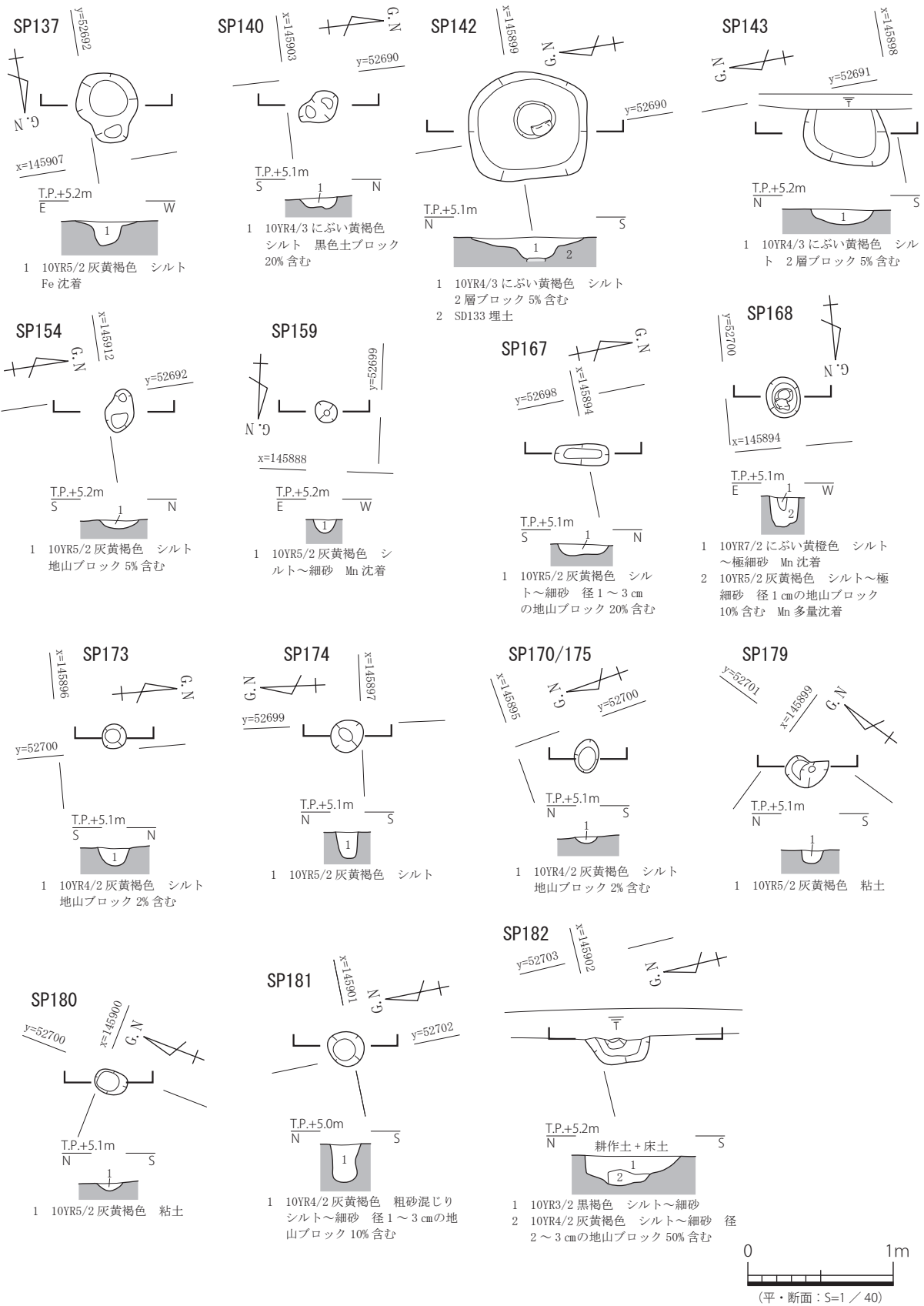
第40図 時期不明遺構集合④(ピット)



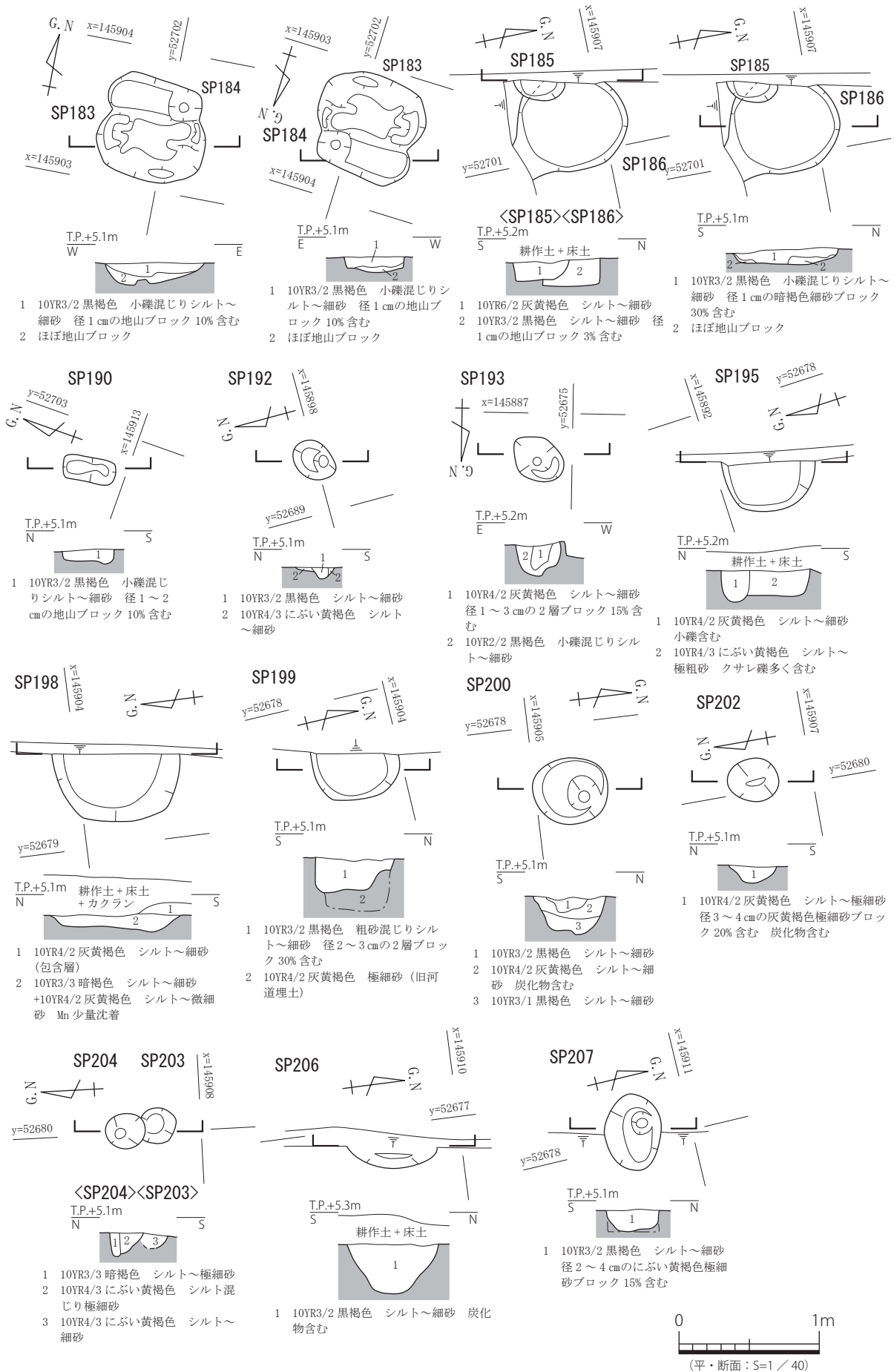
第 41 図 時期不明遺構集合⑤ (ピット)



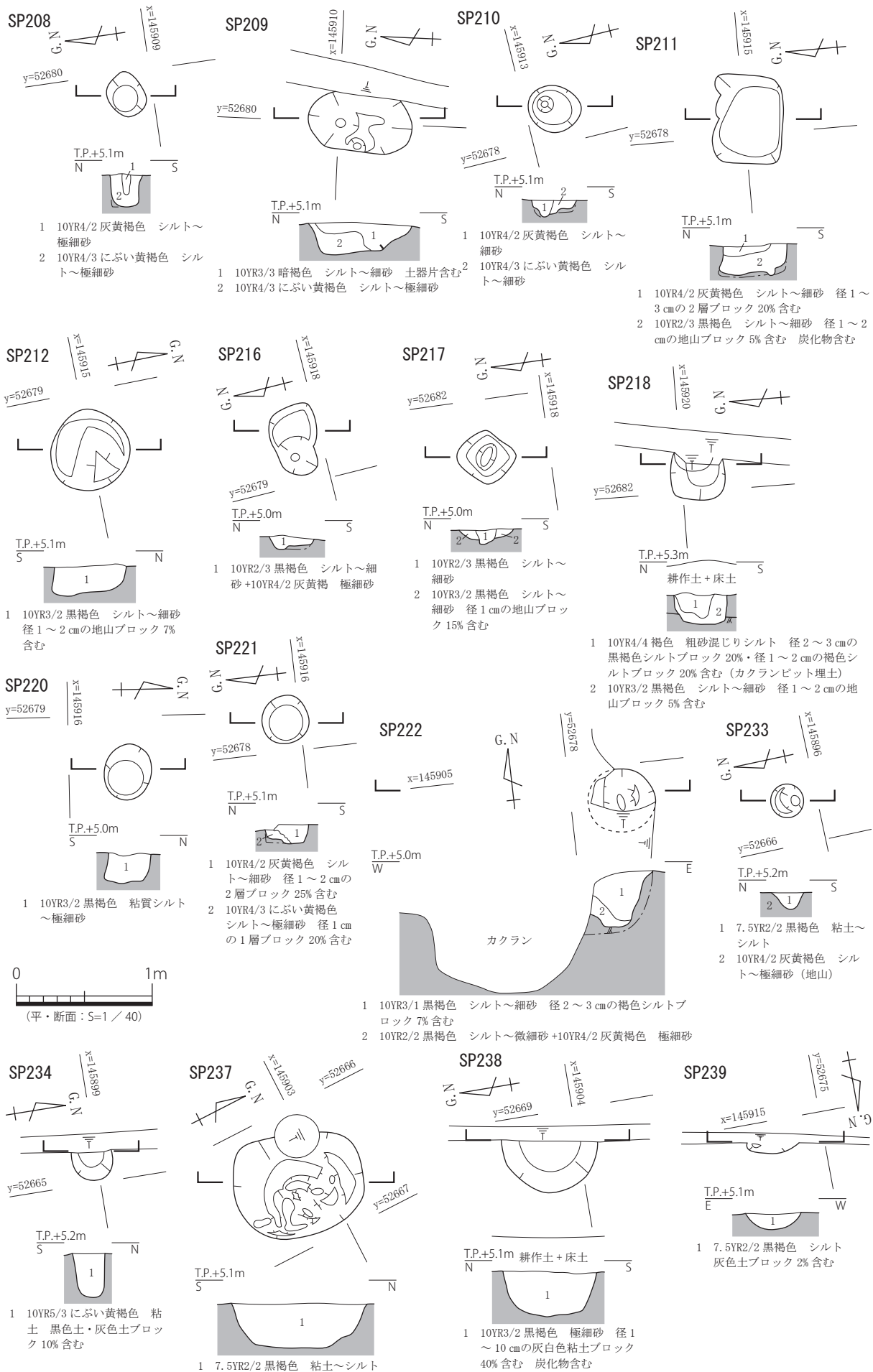
第 42 図 時期不明遺構集合⑥ (ピット)



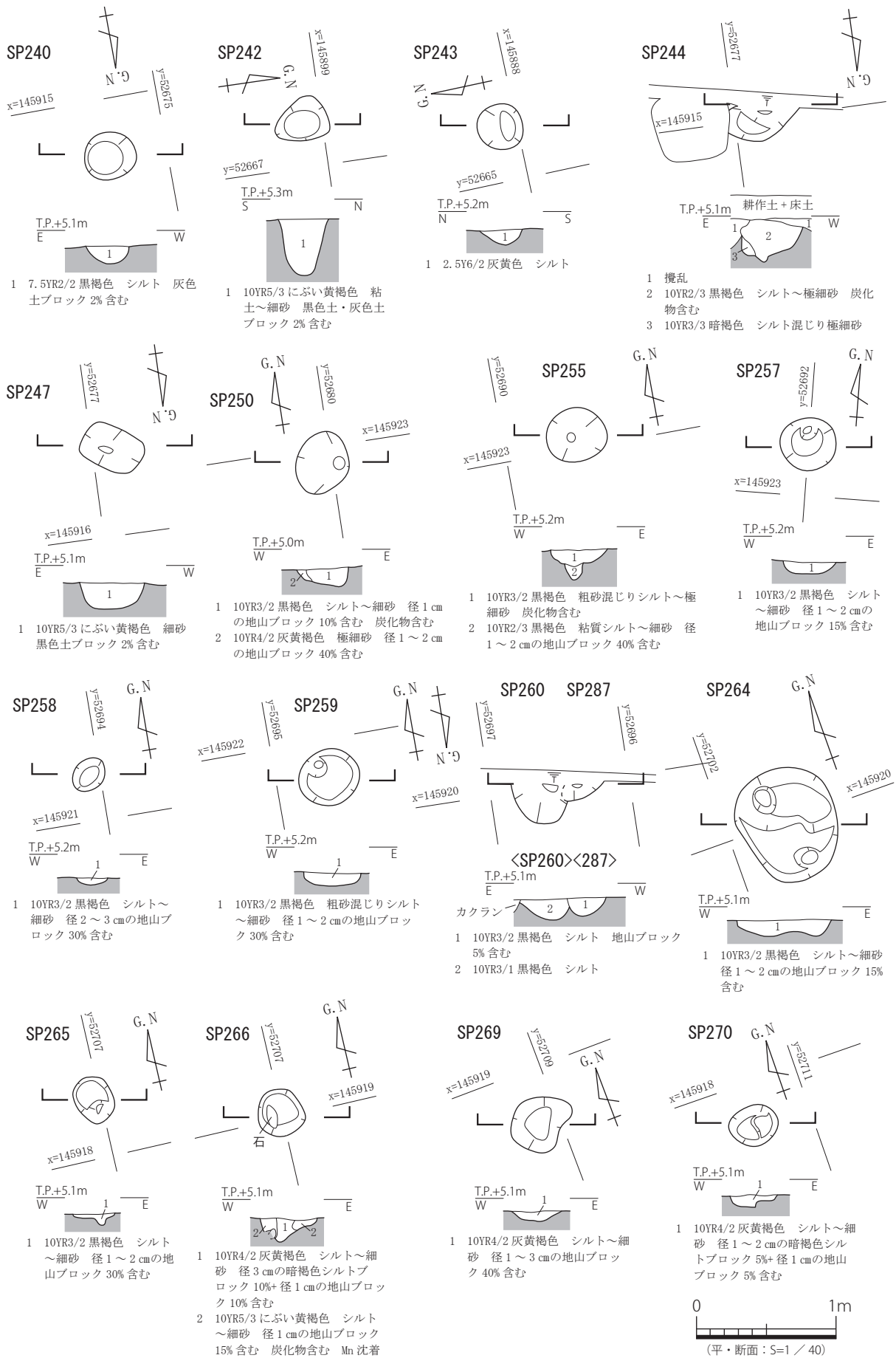
第 43 図 時期不明遺構集合⑦ (ピット)



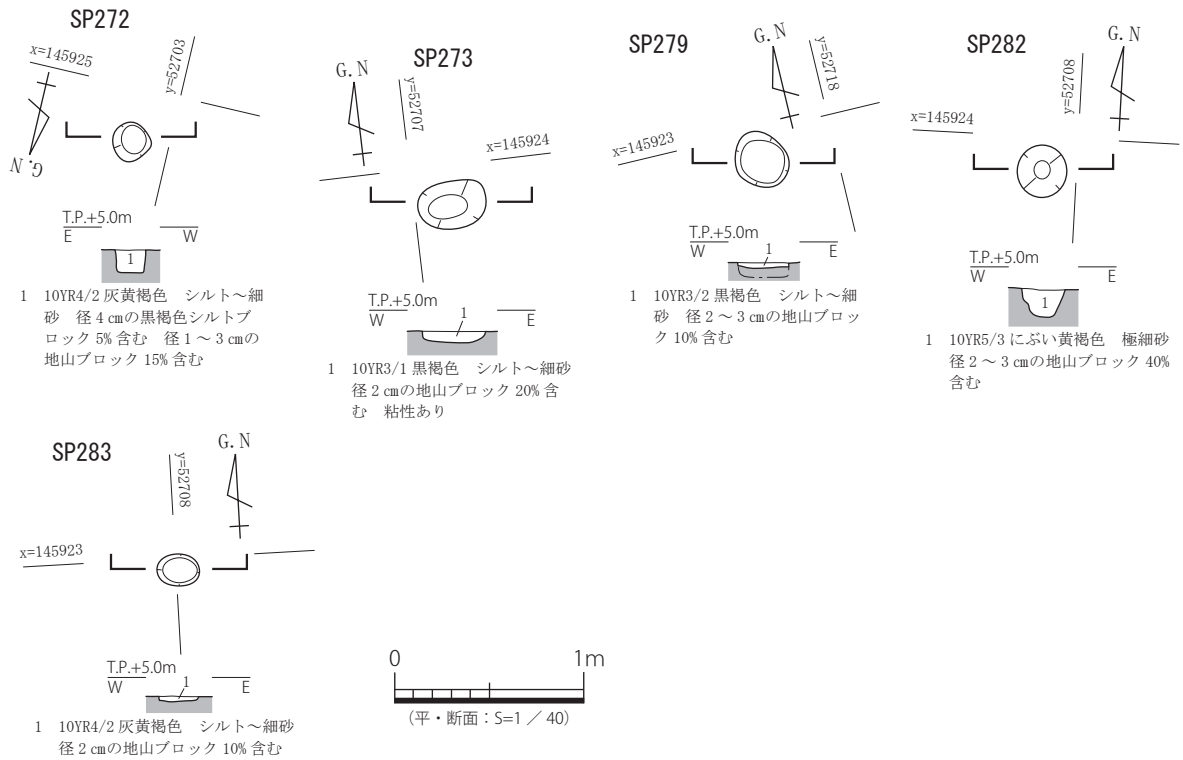
第44図 時期不明遺構集合⑧ (ピット)



第45図 時期不明遺構集合⑨(ピット)



第 46 図 時期不明遺構集合⑩ (ピット)

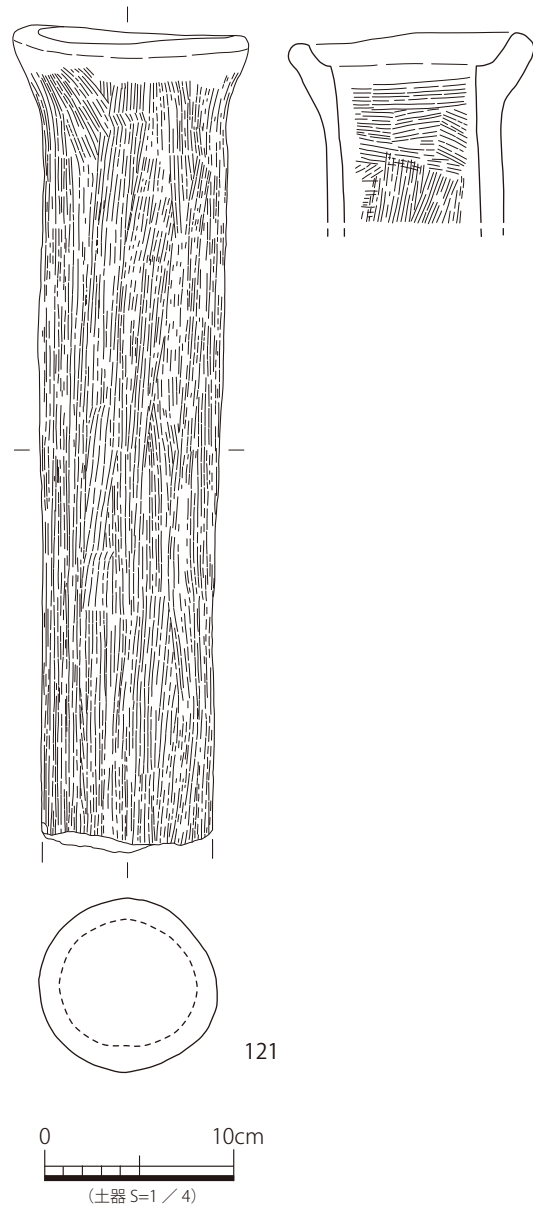
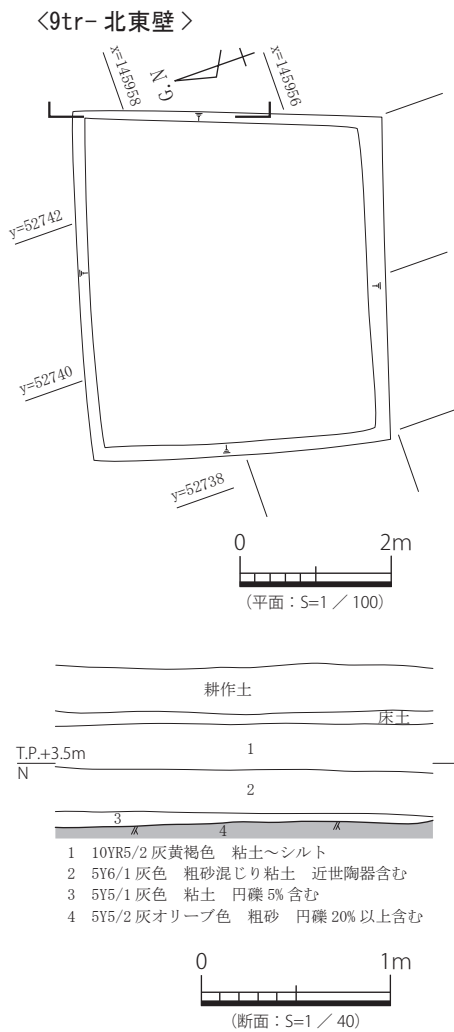
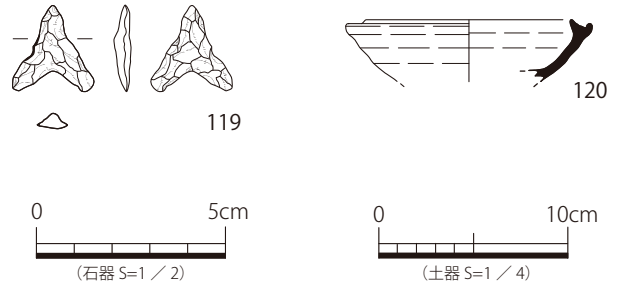


第 47 図 時期不明遺構集合⑪ (ピット)

第8節 その他

遺構・遺物は確認されなかったが、9トレンチの調査成果を報告しておく。他の地点とは異なり、地山が礫層によって形成されており、極めて湧水が多い。また堆積土も荒い砂層が主体となっていることから、埋没した旧河道等が存在する箇所には相当するのではないかと考えられる。

また、遺構外から出土した遺物のうち、特徴的なものをここで報告しておく。119は1トレンチの遺構面直上で出土した石鏃。小型でサヌカイト製の凹基式。重量1.0g。120は4トレンチ清掃中に出土した須恵器坏H身。121は7トレンチでSD261の東側に並走して設置されていた水路土管。同形のものが複数連結されていたが、残りの良いものを1点のみサンプルとして持ち帰った。



第48図 9トレンチ平・断面図

第49図 遺構外出土遺物

第4章 自然科学分析

第1節 木太小原遺跡出土木製品の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

はじめに

香川県高松市の木太小原遺跡から出土した自然木の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

試料と方法

試料は、1トレンチの旧河道最下層で出土した自然木1点である。試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。なお、試料は年代測定の結果、縄文時代晩期後半～弥生時代前期前半の暦年代を示した。

樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラルで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

結果

同定の結果、試料は広葉樹のコナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）であった。同定結果を表5に示す。

表5 木太小原遺跡出土木製品の樹種同定結果

試料No.	遺物No.	位置	遺構	層位	器種	樹種	木取り	年代測定番号
1	138	第1トレンチ	旧河道	最下層	木製品	コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	PLD-50361

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版1 1a-1c(No.1)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

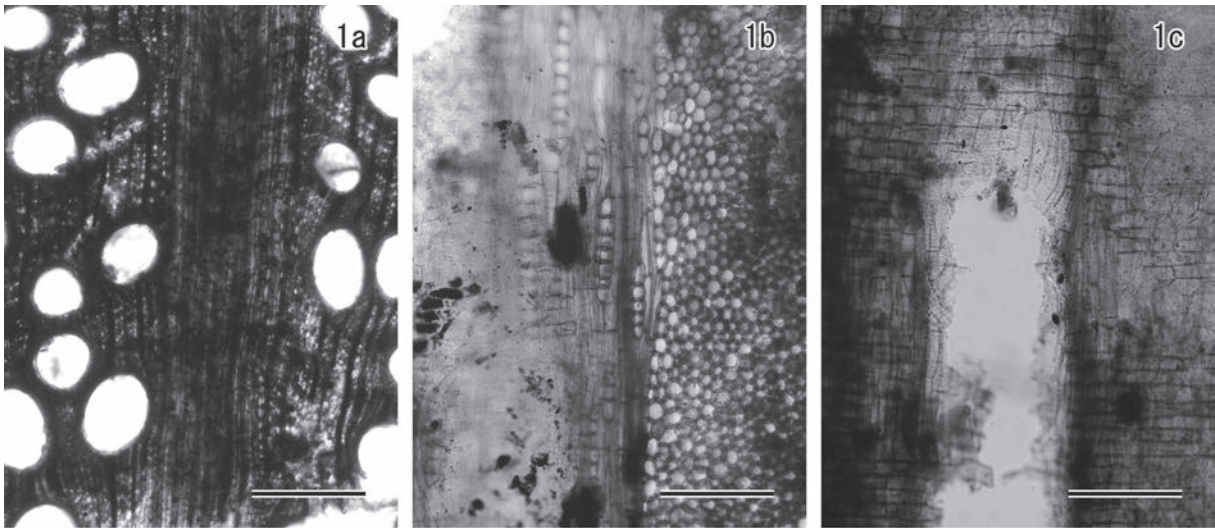
コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靱で、耐水性があり、切削加工は困難である。

考察

同定の結果、試料はアカガシ亜属であった。アカガシ亜属は堅硬な樹種である（伊東ほか，2011）。縄文時代晩期後半～弥生時代前期前半において遺跡周辺に生育していたアカガシ亜属が、伐採利用されたと考えられる。

（引用文献）

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社．



図版1 木太小原遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真

1a-1c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 1) a: 横断面 (スケール=500 μm)、b: 接線断面 (スケール=200 μm)、c: 放射断面 (スケール=200 μm)

第2節 木太小原遺跡出土木製品の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtadze・小林克也

はじめに

香川県高松市の木太小原遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている（第1節参照）。

試料と方法

試料は、第1トレンチの旧河道最下層から出土した木製品1点（試料 No.1:PLD - 50361）である。試料は、樹種同定の結果はコナラ属アカガシ亜属で、最終形成年輪が残っていた。測定試料の情報、調製データは表6のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表6 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-50361	試料 No.1 位置：第1トレンチ 遺構：旧河道 層位：最下層 遺物 No.138	種類：生材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)

結果

表7に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、第50図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.27%であることを示す。

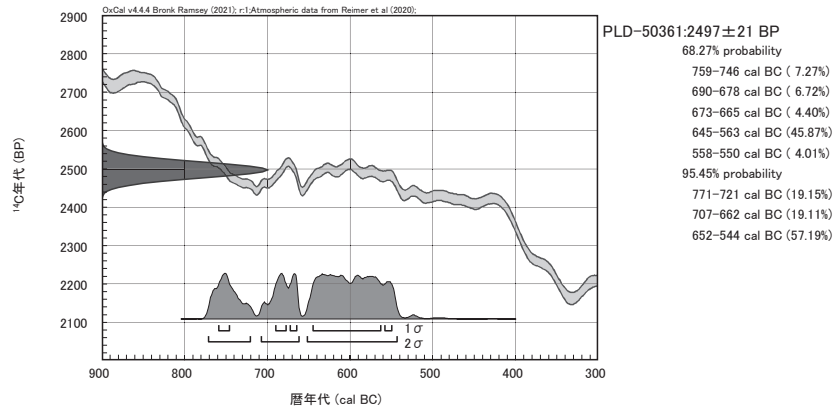
なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表7 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-50361 試料 No.1	-29.71 \pm 0.20	2497 \pm 21	2495 \pm 20	759-746 cal BC (7.27%) 690-678 cal BC (6.72%) 673-665 cal BC (4.40%) 645-563 cal BC (45.87%) 558-550 cal BC (4.01%)	771-721 cal BC (19.15%) 707-662 cal BC (19.11%) 652-544 cal BC (57.19%)



第50図 暦年較正結果

考察

第1トレンチの旧河道最下層から出土した試料 No.1 (PLD-50361) は、 ^{14}C 年代が 2495 \pm 20 ^{14}C BP、2 σ 暦年代範囲 (確率 95.45%) が 771-721 cal BC (19.15%)、707-662 cal BC (19.11%)、652-544 cal BC (57.19%) で、紀元前 8 世紀前半～紀元前 6 世紀中頃の暦年代を示した。これは、藤尾 (2009) および小林 (2017) を参照すると、縄文時代晩期後半～弥生時代前期前半に相当する。なお、今回の測定試料は最終形成年輪を含めて採取されており、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示す。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

藤尾慎一郎 (2013) 弥生時代文化像の新構築. 275p, 吉川弘文館.

小林謙一 (2017) 縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素 14 年代—. 263p, 同成社.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷

弥生時代 資料数が極めて少ないため、時期の詳細は確定が難しいが、調査区南西側の旧河道が縄文時代晩期～弥生時代前期に埋没をはじめ、弥生時代後期後半までには周辺の地盤と同程度まで平坦化している。大型の溝であるSD261-12が第2節の通り北側に連続する溝と一連の遺構であれば、弥生時代後期前葉に大規模な水路掘削がなされたことになるが確証に欠ける。3・4トレンチの間を発掘する機会が今後あれば、飛鳥時代の溝と本遺構との切りあい関係が確認できるはずである。遺物で年代が押さえがたい現状であるため、遺構の年代観を遺構から解明する手掛かりが現地に残されていることを明示しておきたい。

明確に確認できたのは弥生時代後期後半に土坑状の落ち込み（SX15）から比較的多量の土器が出土した。周囲にこうした土器の供給源が存在したことが推測される。

飛鳥時代 一部古墳時代後期に遡る資料も散見されるが、遺構形成が明確に行われるのは飛鳥時代の中でも飛鳥Ⅰ～Ⅱ期であり、特に飛鳥Ⅱ期に埋没した遺構が顕著である。

検出した遺構としては、概ね南北方向を基調とした溝が開削されている。切りあい関係が認められることから、溝の埋没と掘削はやや時間差をもって実施されたものと考えられ、最終的に埋没したのが飛鳥Ⅱ期と考えて大過ないだろう。掘立柱建物もこの時期に帰属するものが確認できる。なお、礎石建物や瓦は全く確認されていない。

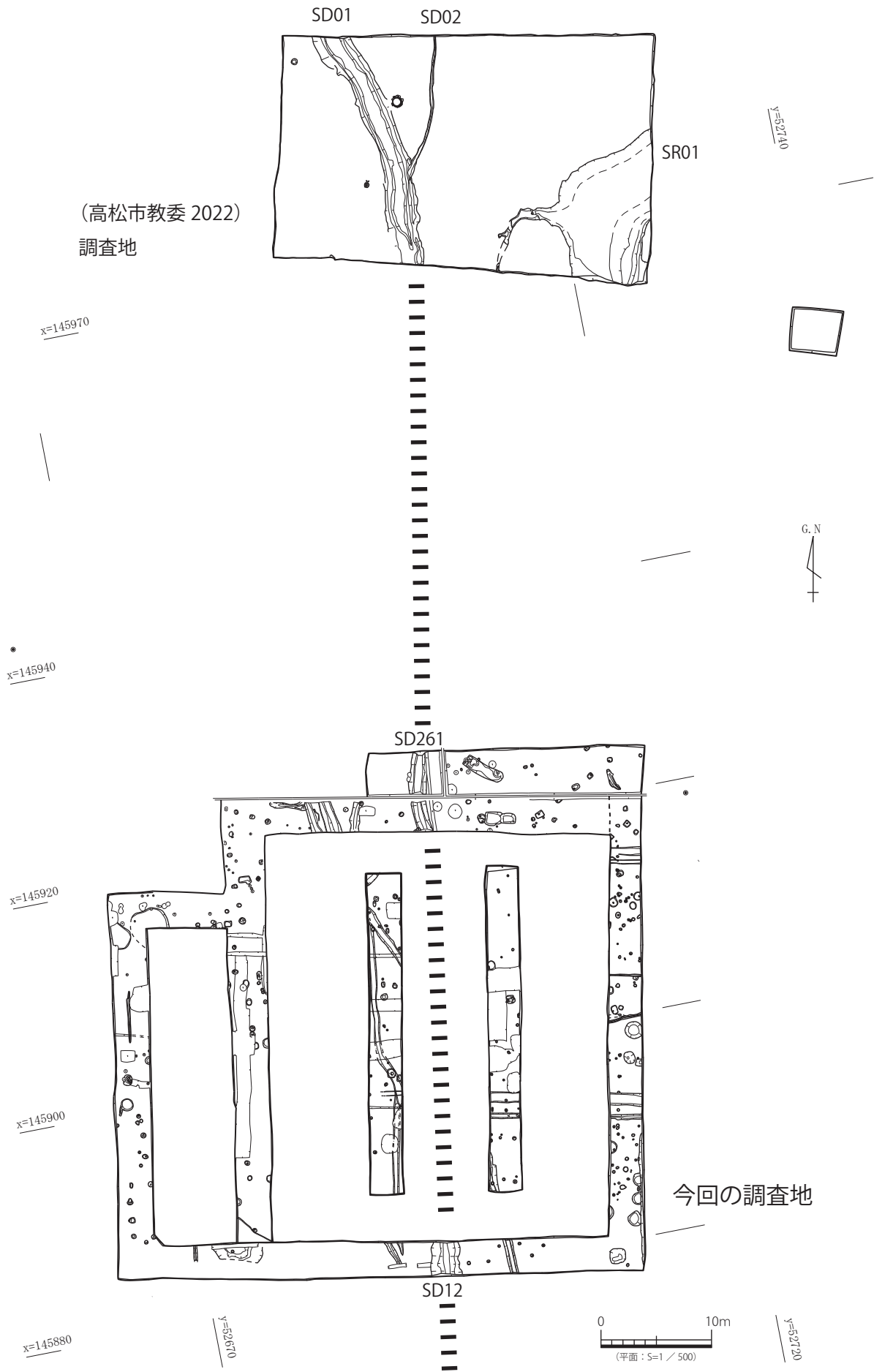
中世から近世 中世の遺物は極めて限られており、遺構形成がある程度活発になるのは近世に入ってからである。第3章第3節で整理したとおり、近世遺構は調査途中より記録保存の対象から除外しているが、概要だけを整理すると掘立柱建物と粘土採掘坑の可能性が想定される大型の土坑が目立つ。

第2節 周辺の調査成果との照合

本書の調査地点の北側に隣接して発掘調査が実施されている（高松市教委2022）。遺構配置図を同一図中に示した（第51図）。

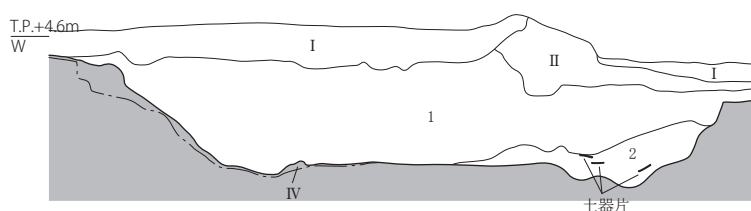
まず溝の連続性について検討しよう。SD261-12を直線的に北側に延伸した位置に、溝が確認される（SD01・02）。なお、報告文ではSD02がSD01に連結すると評価されており、一体的な遺構として評価されている。位置関係から、SD261-12はこのいずれかの溝に連続する可能性が想定できるため、それぞれの溝との共通性と差異について整理しよう。

あくまでも検出した状況による比較だが、SD261-12は大型の溝であり、平面規模ではSD01の方が共通性が高い。ただし、黒褐色シルトを主体とした埋土であること、緩やかな傾斜を持つ断面形状であること、遺物を大量に含むこと等相違点も多い。一方、SD02は平面規模が大きく異なるものの、溝底部がやや強い屈曲で箱状を呈する点、遺物を全く含まない点等には共通性が認められる。検出幅の違いは上部の削平等の影響により溝上部が欠損したからと考えることも可能である。いずれも確定的な根拠は提示しがたいため、両論を併記して今後の検証の材料としたい。いずれにせよ、検出長130mを超える大型の溝の開削であるため、その土木量は大きいこと、いずれも条里地割には合致しないことは指摘できる。

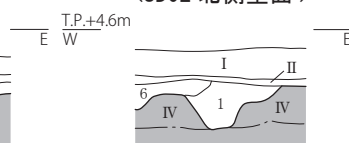


第 51 図 周辺の調査成果合成図

<SD01 北壁>

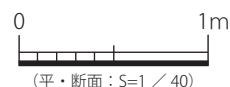


<SD02 北側壁面>



- I 甘土
- II 2.5Y4/2 暗灰黄 細粒砂混じりシルト (近世～近代の造成)
10YR5/6 黄褐色土ブロック 40% 含む
- III 10YR6/1 褐灰 シルト 10YR5/6 黄褐色土ブロック 40% 含む
- IV 2.5Y7/1 灰白 粘土 2.5Y7/4 浅黄色土ブロック 10% 含む (地山)

- 1 5YR2/1 黒褐 細粒砂混じりシルト 遺物多く含む
- 2 7.5YR3/2 黒褐 細粒砂～中粒砂 径5～10cmの礫含む 遺物多く含む



第 52 図 SD01・02 断面図 (高松市教委 2022) より転載

続いて、遺構の分布状況の差異について確認する。今回の調査地点では記述の通り多数のピットが検出されており、複数時期にまたがる建物遺構の形成を認めた。一方で隣接する調査地点ではほとんどこうした遺構は確認されていない。建物遺構の分布境界が調査地点間のどこかにあることになる。この差異は北東側で検出されたSR 01 や本書の9トレンチの調査状況から推測できるように、北側にむかって地形が低く、安定しない基盤層が広がることと関連付けて理解することも可能だろう。

参考文献

高松市教育委員会 2022 『木太小原遺跡』



1 調査前風景（北東から）



2 調査前風景（南東から）



1 1 tr 西半 (東から)



2 1 tr 東半 (西から)



1 SD12 完掘状況（南から）



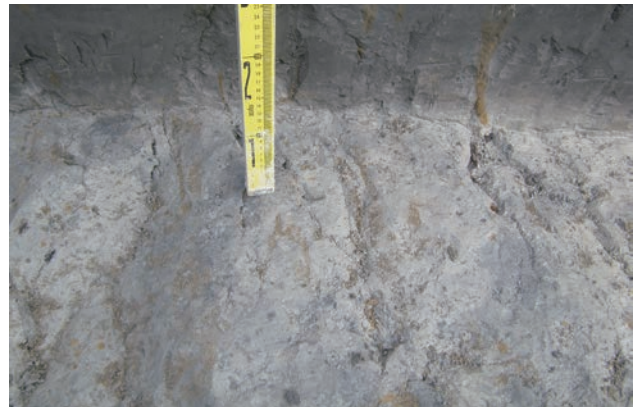
2 SD12 断面（南から）



1 1 tr 西半断割り断面（南西から）



2 旧河道最下層石礫出土（南から）



3 石礫出土状況（南から）



4 SP46～SP54（北から）



1 2tr 南半 (北から)



2 2tr 北半 (南から)



1 3 tr 北半 (南から)



2 3 tr 南半 (北から)



1 4 tr 南半 (北から)



2 SD132 完掘状況 (南東から)



3 SD110・133 切りあい状況 (北から)



4 SD133 完掘状況 (南から)



1 5tr 南半 (北から)



2 5tr 北半 (南から)



1 SX15 完掘状況（北から）



2 旧河道断面（南東から）



3 SX15 完掘状況（南から）



1 6 tr 南半 (北から)



2 6 tr 北半 (南から)



1 6 tr 北部 (東から)



2 5・7 tr 境界 (東から)



1 7・8tr 西半（東から）



2 7・8tr 東半（西から）



1 SD254-1・2 完掘状況（北から）



2 SD254-1・2 遺物出土状況（南から）



5 SD254-2 遺物出土状況（西から）



3 SD254-1・2 遺物出土状況（東から）



6 SD254-1・2 遺物出土状況（南から）



4 SD254-1・2 遺物出土状況（南から）



7 SD254-1・2 完掘状況（東から）



1 SD261 完掘状況（南から）



1 SD256 (北から)



2 陶製土管出土状況 (南から)



1 9tr 東壁断面（西から）



2 9tr 完掘状況（南西から）



SX15 出土遺物



SD254 出土遺物



SD160 出土遺物



試掘 2-3tr 溝 出土遺物



48

SD12 出土遺物



118

SK21 出土遺物



SD132 出土遺物



SP229 出土遺物



出土石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	きたおほらいせき (だい2じちょうさ)							
書名	木太小原遺跡 (第2次調査)							
副書名	店舗新築工事に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第250集							
編著者名	高上 拓・磯崎 福子							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	令和6年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′ / ″	東経 ° / ′ / ″	調査期間	調査 面積	発掘 原因
		市町村	遺跡番号					
きたおほらいせき 木太小原遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 きたちよう 木太町	37201	10971	34° 18′ 50″	134° 04′ 21″	2022.11.2~ 2022.12.2	936㎡	店舗新築 工事
所収遺跡名	種別	おもな時代		おもな遺構		おもな遺物		特記事項
木太小原遺跡	集落遺跡	弥生時代後期 飛鳥時代 中世 近世		土器溜まり 掘立柱建物 溝 土坑		弥生土器 石器 土師器 須恵器 陶磁器		
要約	高松市木太町に所在する、弥生時代後期と飛鳥時代、近世を中心とする集落遺跡である。特に飛鳥時代の遺構形成が顕著で、溝・掘立柱建物を主体とした集落が形成される。時期不明なピットも多数存在するが、長期間掘立柱建物を主体として遺構が継続して形成されている。							

2024年3月31日 発行

高松市埋蔵文化財調査報告第250集
店舗新築工事に伴う発掘調査報告書
木太小原遺跡（第2次調査）

著作権所有 高松市番町一丁目8番15号
発行者 高松市教育委員会
印刷者 有限会社 中央ファイリング